

---

# 熱の手

壬哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

熱の手

### 【Nコード】

N2185D

### 【作者名】

壬哉

### 【あらすじ】

極普通の高校生。学校でも、友達を第一に大事にしたい自分。でも、そんな中友達と自分の異変に気付いて行く。そんな物語。

## 第1話

よく見る夢は、炎に囲まれ、周りには誰もいない。たった一人で  
「どうしてこんなことをしてんだろ……」と、自分が炎を点け  
たかのような感想を持っていた。

周りは赤と黒しかなく、それが逆に不気味な気分させている。  
他には特に変わったことはなかった。

今までは。

生まれてきてから、何の根拠もなく考えてしまうことがある。自  
分への問い掛け。「どうして生まれてきてしまったのだろう」と、  
「生まれてはいけない」だ。

一つは問い掛けだが、もう一つの感情だけは、自分には理解がで  
きなかった。どうして自分には理解できないことを、自分に言い聞  
かせる呪文のように、グルグルと頭の中を彷徨い続けているのだろ  
うかと。

「<sup>なげき</sup>泣く。今日どっか寄っていくだろう？」

「あたりめえじゃん？ 学校帰りは、騒ぐ遊ぶ叫ぶだろ？」

疑問に追われながらも、必死に高校生活をエンジョイしているつ  
もりだ。

友達も不自由なくできたし、友達を大事にしないうちにをするん  
だという性格な俺は、自分がしてやれることは頼まれればするなり、  
手伝うなりした。それしか自分にできることはないと思ったからだ。  
小さい頃から、特別何かができるわけも、アプローチ出来る何か  
もなかった。

一つ言うなら、他人よりも、左手が熱をこみやすいことだった。  
利き手ならば少しは納得できたものの、期待を外すこと利き手は  
右で、投げ手も右だ。

「ば・あ・か。こんな雨のなかどうやって寄り道する気だよ」

寄り道に誘った相澤の後ろから、思いつきり遠慮を知らずに、頭を狙って前の席の相澤の筆箱を振り下ろした。

相澤の席は、窓の外を眺めていたおれらにとって、かなりの死角となっていた。

「バカはお前だ杵島<sup>きしま</sup>！ 筆入れで殴るなら、こいつの筆入れを使えっ」

問題はそこなのだろうか。

雨が降っていることを忘れるためにも、こうやってばか騒ぎの話をしていたそこに、雨の話を持ち出すなど。そこに怒るつもりでいた俺は、話のすれ違いに素直に驚いた。

相澤の筆入れよりも、俺の筆入れのほうが、素材的にも中身的にもやわらかく、殴られても普通の筆入れで殴られるよか、よっぽど痛くはなかった。比べればの話だ。

「だって丁度近場にあったのがお前のだったんだ。筆入れに駄<sup>しつげ</sup>がなっていないな」

「お前は天才的なバカだな。筆入れに駄なんてできるものか」

基本的には俺を入れたこの三人で行動することがおおい。

杵島と相澤はよくこういった怒り場所が理解できない内容の喧嘩をする仲良しだ。

最初顔を会わせたときからこんな感じだったから、昔からの友達なのかと思って聞いたが、「昔も今もこんなやつとあったのは今が初めてだ」と、二人息をあわせていった。

しかし、これは二人の言葉を混ぜていっただけであって、二人は少々違うようで同じようなことをいつていたかもしれない。

初対面にしては凄く馴々しい気がした。そんな二人が羨ましいと思いついたのは、いつからだろうか。

ちみっちゃいことで口論し、プイツと顔をそらし、相手が謝ってくるまで俺は知らないぞと言うような空気を二人して醸し出されている。

相澤は杵島が俺の近くにいないとき。杵島は相澤が俺の近くにいないとき。どうしてか俺に相談まがいなことをしてくる。どちらかといえば愚痴なのだが、やっぱり二人が怒っているところを理解するのは、至極困難だ。だから共感も慰めることすらない。

「どうすればそこで怒ることができるんだ？」

と言いつつになるのを毎度も息を止め、笑いを堪えてしまう。

何せ二人は本気で口論をするのだ。

「女子ってすごいよな」

「……何をいきなり」

口論中、空気をぶつ切り切るかのように体をひねって教室内にむかせ、雨に動揺しない女子を遠目に見ながらもそういった。

二人は口論を一旦休止した。

「だってさ、雨降ったって女子は折り畳みいつも常備だからさ」

「だったらお前も持ってくればいいと思う……」

杵島は少し呆れるような口調で言う。

確かにとも思えるけれども、凄く女々しいイメージがあるため、どうしてもためらってしまう。それに何より、今日の朝は雨なんか降るような天気ではなかった。

よく当たると評判の天気予報だって、今日一日快晴で、洗濯日和だといっていた。

母は洗濯物を干す準備をし、登校中には、鼻歌を歌いながらも愉快に洗濯物を干す主婦も見た。

きつと今頃、急いで力強い雨に当たった洗濯物を引っ張り取っているだろう。そして天気予報にブツブツ文句を言いながら、再び洗濯機にそれを放り投げていることだろう。

「杵島は持ってきたの？」

「んな女々しいもの持ってくるもんか」

同意見だ。

そう思わない人もいるのだろうが、少なくともおれらは思う側だった。

「そうか。なら俺は先帰るかな」

言いだしたのは相澤だ。

いきなり立ち上がり、にやりと微笑んでいる。

「もしかしてお前」と俺が。

「女々しいものを持ってきていると!？」と杵島が言った。

「おうよ。おまえら曰く女々しい女々ちゃんをもってきているさ」

誇らしげに相澤が言う。

「相澤様どうか一緒に入れてくれないでしょうか??」

ギョツと相澤をつかみ、助けを求めるように、じっと見つめる。

「ふっ……キスしてくれたら入れてやってもいいかもな」

なんて、軽く格好つけて言う相澤に、俺はたちあがり杵島と回れ右をして、教室から出ようとしながら言う。

「購買で傘買ってこよー」

「割勘して相合しねえ?」

「杵島ナイスアイデア」

「いや冗談だから! 退くな! 俺なしで話をすすめないでくれ」  
ガシツとオレらの肩をつかみ食い止めてきた。

もちろんのこと土砂降りの雨は、放課後までも弛むことなく降り続けた。

玄関には傘を開き、いまにでも校外にでる人や、もうすでに出た人。傘がなくて笑いながらもどうしようかといっている男子たちが見えた。

校内にいる必要もないし、いつもの勢いのまま、杵島と相合傘をし、右手に相澤と挟まれながらもいつもの道程を、何気なく意味を成さない会話をしながら帰っていった。

三人とも別々の地区だからこそ、途中の交差点で三人ばらばらになる。朝は、そこで三人バツタリ会う。

特に前からそこで会おうなどという計画や、約束なんてものはない。ただ、たまたま登校時間が重なっただけなのだ。

ジャンケンで負けたため、杵島と買った傘は杵島行き。土砂降りのなか濡れて帰るという運命を背負った自分。ジャンケンの存在を恨んだ瞬間かもしれない。

じゃあなと手を軽く振りながらも、相澤は右手の信号が青になったその時歩きだした。

「信号が青になるまで一緒にいてやるよ」

杵島はくすつと微笑みながらも、真つすぐの道を行くため、目の前の信号が青になるまで待つ俺を、信号なんて関係の無い左側に歩いていく杵島は待っていてくれた。

「悪いね」

「いえいえ。ハイシャさんが余計な時間まで雨に当たり風邪を引かないためにね」

「歯医者さん？」

首を傾げながらも俺は杵島を見上げた。

「敗者復活戦の敗者。要はジャンケンの敗者だ」

「ああ。なるほど。勝者さんはいいですね、信号なんて七面倒な物を利用しなくって」

「良いだろ。場所は譲らねえぞ」

「いいよ。学校帰りに斜面を上るだなんて、余計に疲れるような道はゴメンだ」

杵島の方向は、少しだけ斜面であり、それが帰りに上り坂になるという疲れるような道程だ。

それならば、信号をじっくり待つなり、信号無視をするなりしたほうが、平和に生きていけるような気がした。

「確かにな。まあ、風邪引かねえようにこれを貸してやろう。ちょっと傘持つて」

すつと傘を差しだしてくるものだから、受け取りながらもボソボソと質問をする。

「傘を譲ってくれるの？」

「ちやうわボケエイ」

笑いながらもそういいながら、学生服の上を脱ぎワイシャツのみになる。

脱いだ上着を俺のうえにぼさつとかけ、ポンポンツと二度ほどたたき、傘を取り上げられた。

「えっこれじゃあ杵島が風邪引くぞ？」

「引いたとしてもお前よりはひどくはないだろう」

「だとしてもっ」

「いいから。そういうときはありがとっっていうんだよー！」

「……ありがとう」

「よく言えました。ほら青だぞ」

「うん。じゃあまた明日ね」

「おう」

青なのを確認し、走りだした。

フツと後ろを振り向くと、見えなくなるまで待っていてくれるつもりなのか、まだわかんないや杵島の姿が見えた。

何だかそれが、杵島達をみる、最期な気がした。

そんな気がするのは今日だけのことじゃない。

スツと熱の籠もりはじめた左手の甲を右手で軽く擦りながらも、雨の中を走り抜けた。

自分だけが、みんなの流れから逆らっているような気がした。

それはただ俺の家の方向に、通っている学校よりもレベルが高く、近い高校があるため、そこから下校してくる生徒で塗れるから。

水飛沫を作るように走り去る学生や、傘をさしてのんきに歩く学生。みんながみんな、一点だけを見つめ、自分とは違うところに消え去ってしまうのではないだろうか。曇りの日になると特に不安になる。

住宅が並んでいるとおりに出ると、自宅が見える。

いつもは人通りがないというわけではないのだが、雨だからか、



人が歩いている様子も、窓から外を眺める人もいなさそうだ。

辛気臭い町中にでも来たかのような。

土砂降りで、暗いせいなのか、家に近づいていくなり家の前に人影がある。ただぼんやりと、家を眺めるだけのように。

でも近づいていくと、2つの異変に気付いた。

（熱い……）

近づくにつれて、左手が燃えるかのように熱くなっていく気がした。

もう一つの異変は、そのつつ立っている男の人だろうの異変だ。

男の人は雨のなか、傘をさすわけでも、雨宿りができるような位置にいるわけでもないのに、雨に濡れる様子が無い。その人の周りが、見えない何かに包まれているかのような。

いつのまにか俺は足を止めていた。

杵島の学ランから、雨がしみ込んできているのを、俺は頭に感じられる。

雨は確かに降り続けている。

地面を叩き、周りの音をも叩き消すかのように力強く降り続く。

近づいていくべきか、ここでこの人が去ってくれるのを、じつくりと待つべきか。今の俺には、ただぼんやりと悩み続けるしかないのだろうか。

雨は止んでくれない。

ジワジワと俺をびしょぬれにしていく。

退いてくれる様子はないが、俺の存在に気付いてくれたのか、ゆつくりとだが、首をむかせてきた。

怖いのか、肩がびくつと力強く跳ねてしまう。

「あの……ウチになにか？」

かなりの勇気を振り絞り、口がようやく開いた。

本当は自分の家ではなく、隣家を見ていたのかもしれない。少し

それは恥ずかしい気もするのだが、そうだということを期待していた。

「君……気を付けたほうがいいよ」

「えっ……？」

スラッとした、透き通るような声だった。

今にでも消えてしまつのではないだろうかというようなこえを、俺は確かに聞いていた。

こんな土砂降りのなか、数歩はなれている人の声を、すぐ耳元で聞き取っていた。

一瞬にして体中に鳥肌がたった。

「君には守れる？ 人を……大事な人を」

言っている内容が唐突過ぎて、うまく理解できずに、瞬きをした瞬間、数歩離れていたはずの男の人が。

本当に一瞬だけの瞬きだったのに。

その間にこんな。今にでもぶつかるかのような位置に、男の人が変わらぬ表情で立っていた。

声を出して驚く暇さえなく、俺の意識は遠退いていた。

## 第1話（後書き）

滅多に書かないファンタジーものです。

更新がすごく遅かったりすることありますが、最後まで付き合ってくださいるととても嬉しいです。

これからよろしく願います。

時代は現代ものと一応してもらっていますが、不安なところです。  
一応希望として現代とさせていただきます。

## 第2話

（ああ……杵島に制服返さなきゃ。っていつかあれからどうしたんだっけ？っていつか……頭痛い……）

頭痛で目を覚ますというのも、素晴らしく目覚めが悪い。

しかも、当たり前なのだが意識を手放してから記憶がないに等しい気分だ。

雨が当たっている様子はない。

寒い気もしない。

熱くなっていた左手も、なんとか治まってはいる気がする。

真っ暗な中、今の状況を把握しようとするが、まったく頭は機能しないし、目蓋も開けられる気はしない。

何もかもにやる気をなくした子供が、昼寝をして、その睡魔に負けて夜まで寝続けたあとの気分だ。

寝すぎて頭は痛いけど、このまま寝ていれば治るような、そんな錯覚を覚え、再び眠りにつこうとしてしまう。

ただ今、俺がそんな心境だった。苦しくて、痛くて辛くて。目を覚ましたら、一日がただの夢で、学校に遅刻で。もういいやとベッドに再び潜り込んで、二度寝をしてしまおう。

きつとそのほうが安心できるだろう。

重い目蓋を必死に持ち上げるように、ゆっくりと開き、目の前をみる。

寝すぎたせいか、視点がきちんと合わず、ぼんやりとしている。

ぼんやりとしているが、視界が基本的に白く、确实自宅のどこでもないというのがわかる。

視界はぼんやりとしてはいるのだが、自分の状態が仰向けになり、布団が何かに押されている気もする。

ベッドかどこかに寝ているのだろうか。

「んっ……」

体の節々が痛い。

表面が薄く蟬せみで固められ、それを必死に外そうとしたときになる、ピキピキつという音が鳴るんじゃないかという感覚だ。

だんだんと視界が安定してきて、自分が今横になっでいて、それを起こした場所が、保健室のような作りの部屋だった。でも、少し違うのは、保健室のような机みたいなものがなく、どちらかといえば病院のような匂いがする。

周りを見回してみても、誰かがいるわけでも無いのだが、病院らしい雰囲気がある。

やはり倒れたのは夢ではないのだろう。

病院だったら、看護師を呼べるボタンがあるはずだ。

今まで入院というものをしたことがないから、はつきりと仕掛けというのか、仕組みというようなものを知らない。でも、とりあえずはボタンを押してみるほうが良いだろう。でも、もしかしてこれは、何かの警報ボタンだったらとおもうと、少しだけ背筋に冷たいものが通った。

体をシーツに滑らせながらも、ボタンに手を触れたその時だった。廊下のほうからパタパタと人が歩く程度の足音が聞こえてくる。

ちゃんと人はいるようだ。

何だか安心し、ボタンを押そうとした手を引っ込ませる。

体も動くし、頭以外は不調はない。頭だけで看護師さんを呼ぶようなことをしてはいけない。とはおもったが、目が覚めて誰もいない状況で、どうやってここに運ばれてきたのかも、まったくわかっていないのも不安だ。

よくドラマや漫画など、空想のなかでは、目が覚めたらキラキラした瞳で、目覚めたことに安心するように急に抱き締めたりと、そ

んなことすらも起きなかったから、余計にこわい。

誰かがいれば、どうしてここにいいのかなど、説明してくれるだろうに。

一人残されたこの素朴感。

いつもはこういうとき、杵島や相澤がいろいろと助けてくれそうなのに、俺の記憶では、別れたばかりだ。

やっぱりあの時感じた、もう会えないかもしれないというのはビングなのだろうか。でもまだ俺は死んだわけではないだろう。

ベッドの周りを見回すが、靴やスリッパなどのものは見当たらない。

服はよく病院で見かける白い楽な服。というのが寝巻というのか。あれに名前はあるのだろうか。

（バスローブ？ いや。バスローブはもっとフアフア感があるような気がするし……）

空はもうすでに晴天で、あの雨がまったく嘘かのような晴れ模様。今頃杵島達は何をしているだろう。

少なくとも一日は過ぎていた。

裸足のまま床に立つ気にはならない。

潔癖症というわけではないが、どうも許せないのだ。

そうなってしまうえば、今、自分がどういう状況になっているのか、わからずに一日が過ぎていきそうだった。

早く学校に行かなければ、杵島が上着が無いことに不満を持ち、怒っていることだろう。

そうするには、とりあえずこの状況から抜け出すしかなかった。ゆっくりと俺はようやくボタンを押した。

「特に異常は見当たらないね。どこか体に異変はないかい？」

それを探るのが医者の仕事じゃないのだろうか。

ふとそう感じながらも、しみじみと頭痛のことを言った。

「それはきつと、倒れたときに頭を強く打ったからじゃないだろうかと思うんだ。少しだけ脳震盪を起こしていたと思われます。倒れる前の記憶を知りたいのだが」

母さんには看護師さんのほうから連絡が行き、すぐに来るといつていた。でも、まさか自分が一週間も寝たきりだったなんて、まったく感覚が無い。

ならば杵島は相当上着のことで頭を抱えているのではないだろうか。

「えっと……学校が終わって、友達とかえって途中で別れて。で家の前に着いて」

男の人が……。そういいたかったのだが、口が拒んでいるかのように、声がつまくなかった。

つい黙ってしまった俺に、先生が顔を覗き込んできた。

「着いた後？」

「き……記憶にありません……」

そういつしかなかった。

でも殴られたり、蹴られたり。脅迫をされたり、脅されたりというようなことはされていない。それだけはいえると思う。

左手に熱がもって、男の人にあつて。そんなことをいえるほど、俺は強くなかなかつた。

「そうか。もしかしたら、殴られたか倒れたときに、強い衝撃で記憶を失っている可能性もありますね。救急車を呼んだのはお母さんです。同じ学校の上着を羽織ったような状態で、特に目立った外傷はなく運ばれてきました」

記憶がない？

そんなわけがない。

倒れる前の記憶がある。あえて言わない。このまま騙したままで良いのだろうか。

学校に行ったら、やっぱり一番にあの二人に相談してみよう。

相談しても良いのだろうか……

俺の頭には、一つだけ確実に覚えている台詞があるのだ。

『君には守れる？ 人を……大事な人を』

男の人が言った言葉だ。

大事な人。

ついつい俺は押し黙ってしまふ。

泣きさ  
辻にとつての大事な人というのは、いつも一緒にいてくれる、相  
澤や杵島などの友達だった。

母さんと顔を会わせるなり、心配したと泣きじゃくってきた。ス  
ーツ姿の父さんは、仕事から飛び出してきたかのようにだった。

わざわざ仕事から抜けてきたのか。そう思うと少しだけうれしか  
った。

医者から記憶障害のことを聞くなり、少しだけ驚いたというのか、  
不思議そうなのか、何とも表現できない顔つきだった。

大事な人に手を出されることだけは許せない。もしあの人が、暴  
力団とかやくざとか、そういう人だとすれば脅し。杵島達を盾にと  
るだなんて、卑怯すぎる。

でも、あの人がそういう人にはどうも見えないのだ。



むしろ温厚で、ひ弱な感じがする。

それに、そういう危ない人に、何か喧嘩を売るような行為はして  
いないはずだ。

言い方だつて、なにかをやさしく警告しているかのような感じだ  
つた。特別危ない人ではない気がする。ただの思い過しだろうか。  
でも今の時代、いろんな問題を抱えている。拉致とか誘拐とか、  
国のなんとか省の人とかだつて、暴力で捕まったり、性的暴行を行  
い、警察に捕まるくらいに政治を行っている人すら、信用ならない  
社会となつてきている。いい人面や、病弱面して人を騙すような奴  
がいてもおかしくない世の中だ。

俺は一旦病院に二日ほど世話になり、退院した。

その次の日から、学校へ復活することを決めた。

「母さん。倒れたときに俺がもつてた、あの制服どうしたの？ 杵  
島のなんだけど」

「ちゃんとクリーニングに出して返しましたよー。ほらっ、もうそ  
ろそろ時間！ 早くしないと遅刻するわよ」

「うん。じゃあ行ってくる」

ソファの横においておいたカバンを肩に掛け、リビングを出る。

「具合悪くなったらすぐ保健室に行くのよ？」

「うんわかってるよ」

もう大丈夫だ。あれから具合が悪いこともないし、頭痛だつて入  
院中に治つたし、これ以上休むわけには行かない。

杵島達は心配してくれているだろうか。

あいつらのことだから、いつもどおりに接してくるだろう。

久々の登校路。何だか数か月とおっていないような景色に感じる。

「辻！？」

いつも杵島達と合流する場所で、杵島の声が聞こえてきた。

「杵島あ」

久々の杵島に顔を明るくさせる。

「おまえ大丈夫なのか？ 倒れたって……」

「おう！ もう大丈夫。でもごめんな？ 制服」

「ばあか。そんなもん気にすんなよ」

「でも……」

「止！」

逆のほうからも、相澤の声が聞こえてきた。

「大丈夫か？ もう来て平気なのか？」

「大丈夫だよ。そんなひ弱に見えるかあ？」

「見える」

「どこがだよ。ボールが頭に当たっても、暢気に走り回れるやつだぞ？」

まさかひ弱に見られていたなんて。

でも心配してくれるのは素直にうれしい。

「そんなの関係ねえよ。でもぶっ倒れたって、何があっただよ」

「えつと……貧血？ 実はあんまり覚えてないんだよね」

軽く頭を掻きながらもうつすらとそういった。

「貧血？ 貧血って一週間も意識不明になるもんなのか？」

「えつ……杵島なんで意識不明だったことまで？」

「先生が言ってた。病院まで見舞いに行ってみたけど、本当に意識ないみたいだったし……」

「見舞い。来てくれたんだあ」

「ああ」

学校では、本当にいろんな人が心配してくれた。先生も、ほとんどの人が。

チャホヤされているのかもしれない。甘やかされているのかもしれない。そんなことは考えちゃいない。考えてはいけなと思うて

いる。

いつもどおりな毎日が再び続いてくれるだろうと信じ、内容がさっぱりな授業を聞き、放課後には補習を受けながらも、また一日が過ぎていく。

雨は降らず、補習を受けている俺を待っていていた杵島達と合流し、いつもの下校路を歩いた。

またあの人に会いたい。そんな気持ち広がっていく。

いつも通る石橋に足を踏み入れた。

そんなに長いわけではないその橋は、何気なく通り過ぎていくのが今までだった。

チロチロと流れていくような川の音が、夕日にあてられながらも、静かなこのおれら三人の間に聞こえてくる。

めったにこの時間にこの橋を通ることはなかった。寄り道して、夕日すらも沈んでいるか、いまだに太陽が出ている時間帯に通るかだ。だからか、夕日に照らされているこの川を見るのはすごく、懐かしい気がした。

「辻？」

じつと太陽側の上流を見つめていた俺に、もうすでに橋から離れた杵島達が振り向いていた。

「あつごめん」

再び夕日を見、杵島達の場所まで駆けていった。

その日の夜、何事も起きずに、本当にあの男の人が夢だったかのように、平和すぎる。その平和がすごく怖い感じもしてくる。

風呂に入りご飯を食べ、歯を磨いて部屋に戻る。いつもの流れを行い、ベッドに潜り込んで携帯をいじる。

杵島から来たメール。相澤から来たメール。それをすべて返していき、ウトウトと眠りにつきはじめる。

まだ電気も付けっ放しで、時間だってまだ夜の零時少し前だ。こ

んな時間帯に眠くなることなんてそう滅多にない。

今まで病院生活で、就寝時間が早かったから、それに合わせるもんで、身体がその時間で慣れてしまったのだ。

眠気を我慢することができずに、うつすらと眠りに入っていく。

真っ暗な中。

少しだけ懐かしく感じる炎の夢。

でもなにか、今までの夢とは少し違う。

ボーッと何気なくその炎を眺めていた。

感じるのは、今までとはちがく、炎に囲まれている感覚までもする。

怖いという気持ちと、淋しいという気持ち。好奇心というものまでも芽生えている。

パチパチと炎が舞い上がる音までもリアルで、本当にその場にいるかのような感じた。

（ここはどこ……）

そう聞きたいのに、口を開けない。いや開いているのかもしれないけれど、声が出てこない。

今自分は どうしているのか。

「おまえがやったんだ」

一人の男の声が聞こえてくる。昔に聞いたことがあるような声だ。会ったことがあったはずだ。だけどどうしても思い出せるような気がしない。

「火玉を放ったのは、おまえ自身だ」

（俺……？）

どこから聞こえてくるその声は、いくら待ってもそれ以上の返事は帰ってこなかった。

ただ一人どこかも、どんな人がいるのかも、何を目指せば良いのかもわからない状況で取り残されている。

足を進めようとしても、足は動いてくれそうもない。

ただ身体が熱くなっているということが感じるだけ。最初よりも、さつきよりも、だんだんと温度はあがっていく。

苦しくて、呼吸すらも儘ならない状況で。

(どうしよう……)

進む足はないけれど、疲れてしゃがむ足はある。

疲れているわけではないのだろっけれど。

素朴で淋しくて。

ハッと目が覚めたのは、熱さが最高に熱くなったときだった。

布団を捲り上げるように上体を起こした。

息は荒く、体全体が左手を中心に熱を帯びているようだった。喉だってカラカラだった。

### 第3話

息を整えながらも部屋を見回すと、電気は付けっ放しだし、カーテンの向こう側だつて、まだまだ真っ暗だ。

時計を見るとまだ深夜の二時。

寝てからそんなに経っていないはずだ。なのにあんなに長く感じる夢是最悪だ。

ぱっちり目が覚めてしまった所為で、二度寝ができる様子もない手にもっている携帯が、ピコピコと光っている。

ベッドから降りながらも、杵島が相澤からのメールを開き、部屋を出る。

誰も起きている様子はない。静かなりリビングの戸を開け、台所のほうにメールの返信を打ちながらも足を進めた。

何処にどうなっているのか、もう感覚で覚えている手でコップをとり、足で飲み物専用冷蔵庫をあける。

父さんが昔に一人暮らしをしていた頃使っていた小さい冷蔵庫だ。だから俺の家には冷蔵庫が二台もある。

コップにコポコポと牛乳を左手でついでいく。

いつもよりも冷たく感じる牛乳。

でもそれは、異常に熱い左手がそう感じさせている。

いつも返事が早い二人から、なかなか返事は返ってこなかった。時間が時間だから仕方がないのかもしれない。

熱い喉に冷たい牛乳を通すなり、その使ったコップをその辺に放置し、携帯を持ってリビングを後にした。

深夜に外に出るだなんて初めて……いや懐かしいかもしれない。

中学のいつだったかの日に、ちょっとだけの好奇心で抜け出したことがあった。

空を見上げると本当に真っ暗で、その中に飲み込まれるかのように濁って見える、ポツポツと広がっているお星さま達。その濁った星は変わらないのだが、あんな星は見たことがなかった。

白く輝くお月さまの近くに、なんの濁りもない真っ赤な満月に似たものが、何気なく月と肩を並べていた。

夢で見た……あの炎に似ていた。

「あの時間に送るのは卑怯だよ」

次の日。

登校中に二人からの苦情。といっても、笑い飛ばすことができるようなことだ。

「ごめんごめん。あの後寝ちゃって、目が覚めたのがあの時間だったもん……ごめん」

「ったく……いつもならメールでも起きるのに、やっぱりあの時間帯だったからか、目が覚めなかったみたいだよ……朝見たときはびっくりしたあ」

「メールに？」

「そうそう」

につこり笑いながらもおれらはのんきに学校へと通っていく。

月のことはいわなかった。なんだかちょっとだけ眠気があったから、そのせいだと感じてもちいたから。

「でもあんな時間に起きたら、二度寝なんてできなくないか？」

「うん。できそうもなかったから、外に出て眺めてた」

「はあ？ おまえ風邪引くだろ」

「大丈夫大丈夫」

「病み上がりに近いっていうのに」

渋い顔をしながらも相澤はそう説教してくる。

それと反面するかのよう、杵島が少し頬笑みながらも聞いてくる。

「きれいだった？」

「んーどうかなあ。あんまりってところかな？ 空気濁ってる感じだった」

「そっか。なら今度、空気がきれいだろう森でキャンプでもしてみるか？」

「キャンプとか趣味？」

意外なものを見るかのように相澤の目が見開いていた。

「ああ。詳しいわけじゃねえけど、自然に少しだけ興味があつてな」初めて知った。杵島にそういう興味があつたなんて。今までそういう会話にならなかったからだろうか。

少しだけ知らない部分をしつつ嬉しく感じてくる。

「じゃあ今度三人で行こうか」

提案したのは俺だ。

この三人だったら、何の問題もなく過ごせそうな気がする。

やっぱり一緒にいる時期が長いからだろうか。あまり時間などを気にしたくはなかったのだが、気楽に話せる相手と最初は行きたいものだ。

それは俺のわがままだろうか。少しだけ不安になりながらも二人を見上げる。

「そうだな。行こうか」

最初に賛成したのは意外にも相澤のほうだった。

「うん。行こう」

につこり頬笑む杵島。

ホッと安心しながらも、俺も強くうなずいた。



あれから何度見ても紅い月らしきものは見当たらなかった。

あれはただ寝呆けていただけだ。そう諦めに近い納得を覚え、約束のキャンプだ。

もともと杵島の父さんがキャンプ好きだったからか、ほとんどの準備は、杵島のほうでやってってくれていた。

場所取りとかがある場所らしく、より山に近く、より施設がきれいな場所を選んでくれたらしい。保護者として一緒にしてくれるらしく、本当に任せっきりとなってしまった。

二泊三日という、キャンプが初めての人にとってはつらいかもしれない日程だ。

一日目で楽しければいいのだが、一日目が最悪だと、三日間はつらいらしい。

「いい天気ですね！山のほうは天気の変化が激しいっていいですけど、何だか今日は大丈夫みたいですね！」

まだついてはいないのだが、もう少しだといわれ、つつい窓から顔を出してしまう。

きつと一番はしゃいでるのは俺だと思う。

何ともいえないけれど、すぐ胸のどこかがざわざわしている。今の俺には、そのざわめきは良い方向にしか感じられなかった。

つくなり早々荷物下ろしだ。

それがなんとか落ち着くなり、力一杯腕に力をいれ、その腕をのばして体を反らして力一杯のびをした。

新鮮な冷ための空気が口に入り、すぐに喉に通っては肺一杯に入り、一気に吐き出す。

「新鮮ってこういうことなんだな」

隣でも伸びをしている相澤にいう。

来慣れているだろう杵島は、そんなこともせず、のんびりテント

の中で荷物の整理をしては、虫除けスプレーを取出し、テントから出てきた。

伸びをし、ボーツとしているおれらに、カ一杯遠慮なく全身にスプレーを放射した。

「ばっ！ ゲホッゲホッ」

不意にスプレーをかけるなんて、肺にスプレーの粉が入っていつてしまう。

体をまるめ、新鮮な空気捜し求めるようにしゃがみこんだ。

「こんのやるお……」

怒りを見せたのは相澤の方だった。

一緒にしゃがみこんだ相澤は、一瞬にして立ち上がり杵島の胸元を掴みあげ、ギヤーギヤーと怒鳴り付ける。

早口でうまく聞き取ることは俺にはできなかったが、杵島はきちんと聞き取れているらしく、きちんと言い返している様子だった。それすらも聞き取れない。

「元気だなあ」

隣に顔を出してきたのは、杵島の父さんだった。

「まだまだ若者ですから」

なんとなく、あんなに楽しそうな杵島と相澤を見れるのは、後もう少ししかないような気がして、胸のどこかが冷たく、苦しい気分になる。

この二人を残しておきたく、携帯を取り出しカメラモードにし、テントを背景に写真を撮った。

カシャッとなったその音を合図かのように二人は固まり、ゆっくりと俺の方に振り向いた。

もうすでにその時には、自動保存設定でSDに保存されていた。

消してやろうと思ったのか、二人して俺の方に手を延ばしてきた。

「なぎさあゝ！」

「なに撮ってやがる！」

「ええゝいいじゃんかあ！ 記念だ記念！」

「何の記念だバカもの！」

「いいじゃあん！」

携帯を撮ってやろうとのびてくる二人の手が、どうしてかすごく焦っていてもしろい。

そんなに二人戯れているところを見られなくなかったのだろうか。でも、こんな二人は可愛くてからかいがあるのだ。

ハッハッハッと笑っている杵島の父さんが横目に見える。うれしくて、にっこり笑顔を向けてみる。

「辻あ」

「ハハッ取れるもんだつたら取ってみや……あつ」

グイッと後ろに体重をかけたとき、踵の方に少しでかめの石があり、それに少々乗ってしまい体勢を崩す。

「おい」

「ばかつ」

二人して俺を支えようと手をのばすが、完璧に俺の体重は倒れる方向にむいている。もし俺を捕まえられたとしても、杵島達も巻き添えを食らう。

ガシッと二の腕辺りの服を掴み、自分達の方に腕を引っ張るが、思った通り足に力が入っていない俺を起こすのは無理で、杵島達までもが倒れこんだ。

二人の体重がかかるのはそれなりにつらいが、そんなことよりも今のこの状態が楽しくて、ついつい笑ってしまう。

「あつはははは……巻き添え巻き添え！」

「てめっ……わざとかよ」

「助けようとしたおれらがバカだった」

ゆっくりと体を起こしながらも、呆れるような口調で言うてくる。

「おい杵島……何で複数形なんだ？ バカはおまえ一人で十分だ」

「ああ？ せえっかくおまえだけじゃないっていうのを示してやったのに、なんだ？ その言い草は！ 本当は、バカはおまえだけで十分だ」

「あんだとお！？ てめえ調子に乗るのも大概にしるよ？」

再び相澤は杵島の胸倉を掴み上げ、杵島も相澤の胸倉を掴む。

「はいはいはい！」

パンパンツと手をたたき、二人の行動を止めたのは、近くで見守っていた杵島の父さんだった。

「喧嘩も良いけど、ちやつちやつとご飯作っちゃおうねえ。二人だけご飯抜きを食らいたいかな？」

『それだけは勘弁してください』

二人して手を離し、ぺこりと頭を下げる。

二人に気付かれないようにくすつと笑い、杵島の父さんに三人でついていった。

男だけで作る料理はかなり大雑把で、キャンプといえはカレーを作った。その芋はもうボコボコでかく、まさに男の料理という感じだった。

食べているときも、ちょっとしたこと喧嘩する杵島と相澤に、杵島父さんと笑いながらも、観覧する。

すごく楽しい。楽しいけれど、俺の頭には、あの見たこともなく、怪しい男の言葉が脳裏を過りつづける。

守れるか…… 大事な人を。

それは一体どういう意味なのだろうか。

「元気だなあ」

「仲良い証拠ですよ？」

「だな…… おれにもこんな時代があつたさ」

懐かしいような口調でそんなことをいうものだから、どういう意味なのか、どうしてそんなことを話したのか。

時代。

どうして時代というのは変わっていつてしまうのだろうか。同じ時代というのではないのだろうか。何の問題も起きない時代というのは、現われることはないのだろうか。

こう考えるようになったのは、全てあの怪しいおじさん。いや、怪しいお兄さんの言葉が気になって仕方がないからだ。

不吉な予感。

きつと、感じる人は不安に感じてくるのだろうか。

「夜といえば天体観測だろ」

夜になり、おれらはテントに戻った。

「さすが相澤、キャンプの夜の心得を知ってるな」

にやりと微笑み、めずらしく相澤を誉める杵島。

「まだまだ序の口よ」

「序の口の意味を知ったのか？」

「ばあか。しらねえで使ったんだよ。まだまだ始まったばかりみたいな意味だろう？」

適当な奴だなあと杵島がいい、そこに相澤が言い返し、喧嘩になる。いつものことだ。

また喧嘩をするのかと呆れるように杵島父。少しだけ気持ちは解りますよと苦笑する俺。

ワイワイガヤガヤと言うのはこういうことだろう。

「こおら。そこで喧嘩してるお子さま達よ、さっさとこないと置いていくぞー」

さっさと観測する準備をして、テントから出ようとした。

二人の口喧嘩は止まり、できるだけ暖かい格好に急いで着替えた。「あいつらを扱うコツがわかってきたぞ」

楽しそうに言う杵島父に、くすつと笑い、上手いですねとほほえ

んだ。

## 第4話

「今日、なんかつらかったか？」

「え？」

観測をしに、持ってきていたブルーシートに身を任せ、空を見上げていたときだった。

隣にいた相澤が不意に聞いてきた。もちろんのこと、俺は言葉につまってしまう。

「辛いつていうより淋しそうかな？ 最近、この世の終わりが近づいてきたかのような顔してる」

逆隣にいた杵島までそういつてくる。

「この世の終わりか……どちらかといえば、この世が終わってほしいかもしれないや」

「何があつた？」

「んー……相澤たちはいつから気付いてたの？」

『おまえがぶつ倒れた後くらいから』

二人息を合わせ、じつと俺の方を見ていた。

ということとは、最初からわかっていたのだろうか。少しだけ嬉しいけど、やっぱり安心する。ちゃんと俺のことを見ていてくれるという事が。

「んーばれてたか」

「なにがあつた？ いい加減言ってくれないか？ 十分おれらは待った。それとも、まだおれらに信用ないのか？」

「違う！ ……信用ならあるよ。あるから怖いんだよ。俺は二人が大事だからさ」

「なんか脅されたのか？」

心配そうに体を起こし、相澤は俺の左手に触れてきた。その時にピタッと固まった。

固まったというより、何かに反応してとまったという感じだ。

「沁……手、暖かいな」

「えっ？」

「いつもより熱い」

「相澤の手はいつも冷たいから」

「冷え性だからじゃねえか？　っていうかおまえ、熱あるんじゃない？」

杵島はすつと手を伸ばしてきては、俺の額に触れようとしてくる。その時だった。

『いつ！』

二人して身を引く。

めずらしくも額と手で強めの静電気が発した。

「ごっごめっ」

「いや……うん。大丈夫だけど……びっくりしたあ。手と額でも静電気って発生するんだね」

「あっ……そうだね」

「？　どうかしたの？」

深刻な顔になった杵島を見るなり、視線は少し相澤の方を見ていた。

相澤も、何かを知っているかのように、視線が合うなりすぐに俯き、誰の視線からも逃げてしまうかのように。

「なんでもないよ。沁。おれらにとって、おまえは大事だから……絶対守ってみせる」

「はっ……はあ？　なにがしたいの？」

それは俺の台詞だよ。

今日のまともな会話はそこまでだった。

「あれ？　おれ……何してるんだろっ」

気付いてみれば、周りは暗くて何を焦点を合わせていいのか解ら



ず、目が疲れてくる。

いつも見る夢とは少しだけ違う。

明るく赤い炎が目の前に現われてはいないし、手も熱くならない。もうあんな夢を見たくないから、微妙な位置に放り投げられたのだろうか。

あわてない自分がいる。夢ならいつか覚めるから、ここで慌てていたって、どうなることもないことを自分が知っている。それだけで十分だった。

どこをみても、ほんの少しの光もみつからない。

いつもの炎はどこから放たれていたのか。

知っていたはずなのに、途端に見なくなってから感覚を忘れてしまった。なにか罪悪感を感じていたはずなのに。

「罪悪感……か」

罪悪感というならば、自分から発しているのか。ふと思ってしまえば、何かを自分でできる気がする。

ゆっくりと左手を目の前にのばし、すこしだけ炎をイメージしてみる。

あつく、今まで見てきたような炎を。

「俺とは関係ないってか」

ため息とともに出る言葉。

目の前に火が出るどころか、いつものように左手に熱が籠もらなかった。

その瞬間、ああダメなんだな、とすぐに理解することができた。

諦めが良すぎる。

自分の悪いところなのかもしれない。

粘り強く何かを成し遂げようとする気持ちがあるわけでもなく、ダメだと一瞬思ってしまうえば、たいいていのものは諦めてしまっ自分。そして、諦め後で後悔するのだろうか。

「結局俺一人じゃあ、何もできないへなちよこだったか？」

夢だからと時間に任せ、目が覚めるのを待つことしかない。そんな自分が嫌い。

でも……改善しようとしないうち。そんな自分も嫌い。

ぎゅっと目を瞑る。それでも真つ暗のまま。目が覚めてくれるような感じもしない。

「いい加減解放してくれ」

座り込み、頭を抱えるようにしながらも、思考の何かから逃げる。

『逃げ続けるのか？』

ふと声がした。

耳から入ってくるのではなく、頭のなかに直接入ってくるかのような男の人の声。

聞き覚えはない。あの怪しい男の人の声ではないことは、はっきりとしている。

「な……に？」

弱々しい口調で聞き返す。

『逃げ続けて大事な人を護ることができるのか』

「杵島……相澤？」

『その二人を護りたいならば、強くなるのだ。俺を呼び起こせ』

「え？ 呼ぶ……？ 起こす……？」

なんのことを言っているのがチンプンカンプンだった。

話しているということは、起きているということだろうし、強くなるというのは、どういう意味での強くなるのだろうか。精神的に？ 肉体的に？

「あなたは前の人とは違うの？ 雨が降ったときの……あなたと俺の左手は関係あるの？」

『まだ……わからないのか』

「だから聞いているのに。知ってたら聞かないよ。呼び起こすたって、どうやってたら出てきてくれるの？ 夢なんだからさ、もう少し大雑把な内容にしてくれない？」

『夢だと思っている間は、おまえは強くなんかならない』  
それきり、何を問い掛けても返事が返ってこなくなった。

「おはよう」

目が覚めたら、チュツチュツと鳴く小鳥や、カアカアと鳴くカラスの鳴き声が鳴り響いていた。

先に起きていた杵島父と杵島は、目覚めすっきり笑顔で朝のあいさつだった。

軽く目をこすりながらも、ボソボソツと挨拶を返す。

まだ隣で寝ている相澤を見つめ、今自分達がキャンプに来たことを、はつきりと思い出す。

(やっぱり夢だったんじゃない……)

夢じゃないなら夢じゃないと言ってほしい。夢なら夢だといってほしい。

人の顔を見て何かを理解しようとするのは苦手だ。ましてや顔すらも見えない、人なのか何なのか解らない得体の知れない人物なんて余計に。

顔色を伺うということは、その人自身に嫌われたくないか、相手がどんなことで怒るのか解らない、信用ならない相手だというどちらかの理由だ。

俺が杵島や相澤になら、いくらでも顔色を伺う。嫌われたくないから。親友で、大事な人だから。

「相澤よく寝るねえ」

ボーツと相澤の方を見ながらそうばそりという。

「おまえも十分な睡眠とってたけどな」

「え？ 今何時？」

「9時」

「おっ起こしてよあ！」

休みの日は確実爆睡中だが、今日から二日はそんなこととしてはいけないと思っていたというのに、初っぱなからしてしまったとなると、何とも言えない。

「涎垂らして幸せそうにしてる奴を起こせるかよ」

「よっ涎垂らしてた!？」

急いで口元をグイツと拭うが、その姿がおもしろかったのか、プツと吹き出し、大声で笑いだした。

「だらだらにな」

笑いを堪えようとしながらも、杵島がそういう。

カアツと赤くなる自分が反応し、ようやくからかわれているだけだとわかった。

「きしまあ！」

「つるっせえやあ」

怒鳴り起きる相澤の声が聞こえてくるなり、杵島の顔に近くに置いておいた懐中電気が飛び込んできた。

がつつんという、鳴ってはならないような音が響く。

「いつ……」

丁度ぶつかったのが額だけに、体を丸くさせて頭を抱え込んでいる。

「杵島……！ 大丈夫？」

「大丈夫じゃない。立ち直れそうもない……」

冗談のように言う言葉に、半分乗るかのようにがつしり杵島を覆うように抱き締めてやる。

「きしまあー！ 死んじゃだ……あ？」

「何で疑問系？」

「なんか……体が熱い」

ゆっくりと体を離し、自分の手のひらや体全体を見る。

なんだかほんわりと暖かい自分の身体。いままでは、すべて左手

にしか集まらなかった熱が、俺全体を暖めているかのようだ。

「熱でもあるのか？」

のそのそと体を起こして、額に触れてくる相澤。  
相変わらず冷たい手をしている。

「んー熱いには熱いな……」

「でも、体怠かったり、熱っぽいって感じはしないなあ」

「少し休んでおきなさい。きっと慣れない空気で、体がきつとついてきてないんだと思うから、今日は無理しちゃダメだからな」

杵島が慣れたような口調で、ペラペラとそういった。昔に一度でも自分がかかったことがあるかのように。もしくは、誰かがなるか、父から何かから仕入れた情報かのようにだった。

反抗する理由も、できる立場でもないため、おとなしく頭を縦に振った。

でも、そんなんじゃない。

自然についていけなくなったとか、体に何かが合わなかったとかじゃない。左手の熱の力が、体に何かを教えているかのようだった。これじゃあまるで、自分に何かの力があると信じてしまっているかのようだ。

夢だ。でもそれが、杵島と相澤を危険なことに巻き添えを食らわせてしまうのならば、俺はいくらでも強くなつてやる。でも、信じきり、本当にただの夢だというオチはいやだ。

でも、いつも見たあの夢などは、すぐくリアルティがあった。

きっと、体が何かを教えたいのか。

そう考えてしまうのは、ただの自意識過剰なのだろうか。

できることはしたい。実際、体には何の症状（熱いのを除き）は無いのだから、少し動くだなんてもの、何の恐れもなかった。

しかし、杵島のおでこは大丈夫なのだろうか……。

楽しい一日というのは、過ぎていくのはとてつもなく早い。だからこそ、一日一日を大切にしたいという気持ちがあらわれてくる。

キャンプ場の夜は涼しかった。

どこからかやってくる冷たい風が、人間の体をとことん冷やしていく。

杵島は、俺の体を気に掛けながらも、話があると、相澤とともに電灯すらもない場所につれていかれた。

遠くにいくなよと杵島父に言われ、守るつもりがあるのかないのか、てきとうにはあいと答えてテントを出ていった。

キャンプ最後の一日の夜。記念に何かを残そうと思っているのか、言いにくい話をするつもりなのか、二人は少しだけしんみりした表情をしていた。

「あのよ……おれら、おまえも気付いてると思うけど、普通とは違う特別な力持つてるんだ」

杵島が先頭きつてはなす。

急な話題だった。何ていったらいいものか、杵島達も同じ力を持っているということだ。ということは、ちゃんと自覚できるところまでわかっているのか、力というものを発動できてしまっているのか。

半信半疑な状態の俺には、何とも反応しにくいものだった。

ただ茫然と杵島と相澤を見る。どうも、冗談で言っているようには見えない。

どう反応するべきか。はっきりと気持ちが悪く整理できないでいる。

「……なにいつてるの？」

もしかしたら俺が考えているようなことではないと、必死に思い込もうとする。

「力だよ。運命さ。きつと神は、俺たちを選んでくれたんだ」

誇るような口調で相澤が語る。

奇跡じゃないんだ。生まれ持った力なんだ。神の子なんだと。

少しだけ心のどこかに警告が鳴り響いた。こんな相澤なんか知らない。すべてを信じ切ってしまい、大事なものを見落とし過ぎている。瞳は輝くというより、かなりの貧乏人が、いきなり億万長者になっってしまった、お金を持て余している様子だ。

怖かった。なにをしでかすかわからない、なにを考えているのかわからない。いまにでも、今まで憎んでいた者を殺すかのような。「お前だつて持つてるだろ？ 特別な力を」

どちらかといえば杵島のほうが冷静だった。

相澤が見ていないものを見、たいていのものを知っているかのよう。もともとおれらのなかでは冷静な奴だった。

「辻……わかるだろ？」

「こ……怖いよ二人とも……」

「こわい？ そんなことねえだろ。少し興奮してるけど、怖くしてるつもりはねえよ？ なあ、教えてくれよ。お前はなにを持つてるんだよ」

取り乱し気味な相澤が、ガシツと俺の肩をつかみ、じっと睨み付けられる。

怯える姿に気付いてくれたのか、杵島が間に入るようにし、真剣に聞き入れるかのような口調で言ってくる。

「夜に、俺との間に静電気が起きたの覚えてるか？」

「うつ……うつん」

「俺は電気の力を持つてる。だから電気に敏感で、静電気がおきやすくなつたんだ。制御することはできるけど、余り気にしないで触れたりすると静電気が起きやすいんだ」

ふと、実験するかのように、やさしく俺の手を取った。その瞬間、小さいが確かに静電気が起きた。

な？ つと伝えるように言う姿に、たまたまな静電気が起きたんだ。

でも、どうしてコントロールすることができるのだろうか。俺なんか、力を信じることも、あるという存在自体、半信半疑。いや、

どちらかといえば、信じていないに近いというのに。

これは夢なのか。

そうだ。これはきつと夢なんだ。そう、思い込みたい。

でも痛かった。静電気が、俺の芯をやさしく痺れさせるような程度の電流が走った。

痛かった。痛いというなら、それは夢ではないのだろう。夢だと思ってしまうだろうと、先に考え、夢ではないことを示してくれたのだろう。

「相澤は……相澤はなにを持ってるんだよ？」

「水。だから俺の手は冷たかっただろう？　なあ、お前は？　辻はなんだよ。オレらにあつて、お前にないなんてことはないだろう？」

「ないよ……わかんないよ！」

必死に首をぶんぶん横に振る。

「嘘だろ。なあ、本当のこといつてくれよ」

「わかんない……今の二人がわかんないよ！」

手で顔を隠した。

きつと今泣きだしそうな顔をしている。夜だから見えないだろうけど、この距離だったら見えないほうがおかしい。

悲しかった。こんなにも二人が遠くに離れていく感覚、初めてだった。

高校で知り合つて、当たり前のように隣にいてそれが普通だった頃を思い浮べると、いまは、かなりの異常さを感じさせられた。気まずい状態は家につくまでだった。



## 第5話

夏休みという期間は、二人と距離をおき、考えるにはちょうどよかった。

今までは、三人でいたほうが楽しく、休みもそれなりにちよくよく会ったりしていた。会いたくないなんて感情、今まで考えたことなんかなかったし、思い浮かぶこともなかった。

だから、今の自分は普段の自分とは違う。二人には会いたくないし、今は未だ顔をあわせたくないと思ってしまう。

力という名の壁。

まだあれは夢だったんじゃないのだろうかという気持ちがある。

すぐく眠くて、眠いが故に仲間がいてほしいという、半信半疑な力のことを題材に、夢として何かが流れたのだろう。

杵島がそうであってほしい。相澤がそうであってほしいと、勝手に思い込んで二人との間に勝手に壁を作って。

もしそうであるなら、自分はどんなに理不尽なのだろうか。

自分の力というものがだんだんわかんなくなってきたのは、それは本当にあることなのかと疑問に感じてくる。

漫画などで、よく平凡な主人公がわけもわかんないような力を、ひよんなことから手に入れたりするものがあるが、どうしてそんな簡単に力というものを信じる事が出来るのだろうか。

夢だとか、幻想だとか幻覚だとか考えたことはないのだろうか。もしかして感じているかもしれない。でも、大体そういうものは強いと決められている。

でももし本当に自分の中に力が宿っていたら？

なんのため？ 最終的になにをしなければいけないのか、もしかしてただのお飾りだったら？

夢が本当なら、自分が炎だという事を知られてはいけない気がする。

物陰に隠れるようにその力を隠し、成すべき使命を果たさなければいけない。相澤たちのように無防備に自分の力を表せてはいけない。

本当に信じた仲間にか……。

（信じた仲間……）

もしかしたら俺は二人に信じられていたのだろうか。

二人で必死に話し合って、いつ言おうか悩みあっていたのかもしない。そしたら、その悩みに悩み、出した結論から逃げてしまったということなのだろうか。

ひどい……

なんて自分はひどいことをしたのだろうか。

視界がウルツと水のなかに沈めこめられ、ぼんやりとしてくる。

両手で顔を覆い、少しずつだが流れる小さな水滴を手のひらに感じる。

裏切ってしまった。そんな感情ばかりが、俺の心を悼み付けてくる。

どうすればいいのだろうか。謝るべきなのか、このまま壁を作っておくか。自分の力というものはつきりするまで、二人とはいつもどおりに接してくれるよう頼むか。

でももし、力が起きなかったら？

『俺を呼び起こせ』

いつだったかどっかの誰かがそう言ってきた。

呼び起こすという意味がわからなかったが、もしかしたら二人はその力を呼び起こし、いまに至ったのかもしれない。

努力をするものとしらないもので分けるなら、きつとしらないほうだ。杵島達は、きつとした側。努力すれば力が手に入る。簡単な原理だ。でも、どう頑張ればいいのだろうか。

努力をしない人間は、努力をする人間にすぐ失礼な存在だ。今自分は、失礼な場所に位置している。

二人をわかってやる。今自分にできることは、それ位しかないのだろうか。

その日も夢を見た。

真つ暗な闇の中に放り投げられ、何かの罪悪感のみが自分を襲い続ける。なにが悪いのかわからない。なにを示しているのかわからない。

自分が必要とされていないかのようだ。

どうしてここにいるのだろうか、どうしてこれしかないのか。もしかしたら、本当の存在位置はここなのかもしれない。

ここで生まれここで力のみが育つ。それだけなのかもしれない。

「俺は……生きてていいのかな？」

それすらわからない。

本当は生きていてはいけない存在なのかも知れない。でも、今は生きることしか手段はない。

暗やみにも慣れた。罪悪感にも慣れた。この暗闇だけの夢は、ここ数日つづく。炎を見ていたあの頃がすごく懐かしくも感じられてしまう。

なにをすれば自分が変わるのか、なにをすれば、自分の存在価値を見いだせることができるのか。どうすれば、自分が生きていけるのか。ただそれだけを考えるための場所になってきてしまっている。呼び起こす。その言葉も頭に回る。

なんのために呼び起こすのか。呼び起こしたところで、何の役目があり、自分になんの得があるのか。

それがないと呼び起こしてはいけない気がする。

今はまだ、自分が生きている理由すらも見当たらないというのに。

そう簡単に月日は過ぎなくなっていた。

丸一日考えることに費やし、それでも答えが見当たらずに散歩に出て、時間が経っただろうと思った頃に帰っても、三十分も経っていないかったり。

一日がこんなにも長く感じることもなんて、そんなにないだろうと  
いうくらい長く感じて。

どうすればいい？　だなんてそんなこと、誰に聞いていいのかも  
わからない状況で。

暑さなんか忘れて。いまが、夏休みだということも半分忘れて遠  
出することを決めた。決めたその瞬間に体は、思った以上の行動を  
起こしていた。

財布を出し、一万近くあるのを確認して家を飛び出した。

家のテーブルには、ちよつと遠出してくると母にメッセージを残  
した。

行く先は駅。

有り金で往復できるようなくらいの切符を買い、快速や特急では  
なく、普通列車に乗った。

まだ混むような位置じゃないからか、座る場所を確保できた。

通勤通学ラッシュ、帰宅ラッシュとは時間が違うおかげだったの  
かもしれない。

然程混んではない。

景色を見て心を癒そうにも、周りにはビル、ビル、ビル。ビルで  
なくても、背の高い店やマンション等が建ち並び、癒されるような

景色なんて見当たらなかった。むしろ、窮屈感がある。

狭いところに立たされ、なにをすることもなく周りから睨み付けられていそうな気がして、状況すらも考える余裕を与えてくれないかのように。少しだけ、喩<sup>たと</sup>えを間違えてしまったかもしれないけれど、とりあえず窮屈。

何かを急かされている気がするのと同じように。

考えをまとめるため一旦気を紛らわし、ゆっくりと考えようとしたり計画が、今から崩されているようだ。

（なにから考えよう）

急かされていようと、少しだけでも早く答えを導きたい。

気を紛らわせるのは、景色が変わってからにしよう。心にそう決め付け、そつと瞳を閉じた。

潮の匂い。塩の匂い。普通はどちらを言うのか。

生まれてこの方16年、海岸で考え続けた。

生まれてずっと海岸にいるわけではないが。

「風邪をひく」

冷たい口調でそうやって言ってくれる人がいる。それに甘えて、されるがままに上着を掛けられる。

「お兄ちゃん、あたしが怖い？」

「どうして」

肩をあわせて隣に座り、出来るだけ風邪を引かないようにしてく

れる。

「なんとなく」

「おまえは俺が怖いか？」

その問いに首を横に振る。

「どうして？」

「えっ……お兄ちゃんだから。仲間だから」

その答えに、お兄ちゃんはクスツと微笑み、言う。

「だろ？」

「うん。よかった」

傍にいてくれる。それだけで十分だ。

ただそれだけ。近くにいて、一人残してあの人の時を見ないように。

守ってくれる。自分達は自分を信じ仲間を信じる。それだけでよかった。

いや、それだけがいい。

「お兄ちゃん、暖かいや」

スツと兄の手をつかんで感想を一つ。

「便利だろ？ お前の手は……冷たい」

お互い死なないように。ただそれだけが、たった一つのお願いだった。

乗る電車を間違えてしまったのだろうか。でも、目的地には着いた。と言っても、適当に選んだ場所であって、深い目的があつてきたわけではない。

景色は邪魔な大きな建物がなくて、周りを見回すにあたって面倒なものがない。

切符を通した時点で、なに駅だったかも忘れていってしまい、何の興味もないんだなと確信した。

でも、考えるための癒される景色は見てきた。駅から出たら、すでに夕日が見えていた。考えるには十分な癒しだ。

思った以上に考えたけれども、思った以上に考えはまとまらなかった。

明るいうちに帰るのは、到着してすぐに無理だと察した。

どこかに野宿か、早急に帰ろうか迷った。故に出た答えは、スツと顔を上げて見えた景色が答えてくれた。

海がある。

真っ青な海が広がっていた。

どこまであるんだろうか……。答えの見つからない質問を、誰かに投げつけ、茫然と海を見つめる、

その海に行くのは当然のことだ。そんな気がして、足は駅前に並んでいるバスを探した。

どれに乗れば一番近いのだろうか。こちら辺に詳しくない自分には、はつきりとはわからない。

わからないからこそ、なんとなく目についたバスに乗ろうかと思った。でも、後々考えてみるとお金がない。

帰りの電車代も、ぎりぎりの場所を選んでしまったため、無闇にお金を使うことはできない。

歩いて、帰るのを明日に回そうか、電車で今すぐ帰宅するか。すごく究極な選択のような気がしてきた。

休みの日は後もう少しある。でも、所持金も貯めたお金もそんなにあるわけではない。今できることは、今やっておいたほうが後悔はきつとしない。

足をすすめた。真っ青に広がる海のほうへと、あの海はどこまで繋がっているのか考えながら。

「あいつ。やっぱりむりだったかな？」

「おまえが焦らせるようなこというからだろ？」

「……それはごめん。でも、お告げが出たんだろ？ 俺には出なかったけど、杵島。おまえにはわかったんだろ？ そのなんとかって奴が辻の名前を呼んだって」

「ああ。でもわからないんだよ。どうして……どうしておまえの名前は出なかったのか？」

場所は杵島の部屋。

キャンプからかえって、少しだけたった日付の頃、杵島は相澤を呼んだ。

用件を言わずとも、相澤には何となくわかっていた。

杵島自身が力の存在を知ったのは、辻が倒れる数ヶ月程前だった。夢のなかにカリフォンスという青年があらわれ、力の存在を簡単に説明してくれた。

自分にそのなにかを納得させるためなのか、いやに落ち着いていられた。

頭が着いてきていなかったのかもしれない。

そのカリフォンスが言うことには、「辻について行け。それがおまえの唯一の光の道だ」ということだった。

それからというものの、夢のほとんどがカリフォンスと出会うことが出来た。

徐々に話を聞いているうちに、カリフォンスになら自分を捧げてもよいとを感じるようになっていた。

力を手に入れたのはいつ頃だっただろうか。捧げてからそう多く日付はかわっていなかったはずだ。

それからしばらくしてから、相澤が変な夢を見るようになったと言ってきた。

相談を受けているうちに、だんだんと相澤にも力が芽生えてきた



らしい。それは、沚が倒れる数日前の話だった。

しかし、杵島はなんとカリフォンスに相澤のことを聞こうとしても、口を開いた彼の声だけが聞こえなかった。

いや。聞こえているのだが、どうも目が覚めたときにはその声だけが思い出せなかった。拒絶されているかのように。

「ごめん。俺の力が足りないばかりに……」

「あついや。別に責めてるわけじゃねえんだ。きつく言ってすまなかった」

沚を挟んだときと、二人は話し方が違う。

どうしても、こういう力の話を持ち出してしまいそうで怖かったから、必死にテンションを上げ、沚を中心にするように気配りをしていた。

「沚、この夏休みが終わったらいつもどおりにしてくれると思うか？」

「……オレら次第。もしくはあいつの精神状態次第だろうな」  
「だな」

杵島にはなくて相澤にはあつて、相澤にはないものが沚にはある。沚が持っていないものを、杵島にはある。

誰かに出来ないものは違う誰かにはふとしたときに出来てしまうことだつてある。少しだけ今の状況に似ている部分がある。

沚自身に起きていることを本人ははっきりと直視できていないが、相澤はそれも運命だと、目で見たものははっきりと信じ切ってしまうが、いざというときに落ち着いてはいられない。その分、杵島は必要以上に落ち着き切っている部分はあるが、沚みたいに何かを癒してくれる雰囲気を出せない。相手を不安にさせ、自分の感情をうまく出せないでいた。

三人が仲間一人一人の欠点を補うように存在している。

しかし、今回はその欠点がはっきりと現われた。



## 第6話

『お兄ちゃん……お兄ちゃん？ ……お兄ちゃん！！ おにーちゃん！』

穴に落ちていく。

驚いた妹の顔がだんだんと離れていき、自分はただ真っ暗な穴のなかに沈むように落ちていく。

だんだん泣きじゃくる姿になる妹が微かに見えては、消えていく。なにが起きたのかわからない。

ただ妹を残して、自分がもう元いた場所に戻れないということだけがなぜかわかる。

真っ暗に染まったとき、まわりからクスクスと、なにが面白いのかもわからない、子供の笑い声がすぐ耳元で聞こえてくる。

その瞬間……パツと目が覚めた。

反射的に上体を起こしたその視界は、いつもの部屋のなかだ。

窓の外からは、雀の高い鳴き声が響き渡る。

「……夢？」

何の変哲もないいつもの朝。

自分が、消えていく夢。

いやな予感で胸が騒ついてくる。なにか、現れてはいけない何か  
が近づいてきているような。

胸騒ぎは、時間が経つにつれて大きくなる。

心臓が跳ねるような感覚がして、口から本当に心臓が飛び出してくるのではないかというくらい。

緊張しているときとは、少しだけ違うような、何とも言い難い感覚。  
覚。

「麻紀……」

ハッと大事なものを思い出し、布団を捲り足をベッドから出し、飛び出す勢いで部屋から出る。

すぐ隣の部屋の戸を、ノックをせずに力一杯開き、まだ寝ているだろう妹の姿を探す。

しかし、その中はきれいに誰もいなく、すでに起きて、外に出ている。

妹である麻紀の場合、部屋にいなければ、すぐその浜辺の岩場のちよつとした場所にいては、じつと海を眺めている。

なにを考えているのかは知らない。ただぼんやりと眺めているのかもしれない。人の気持ちまで知ることなんか、できやしない。

誰にも。

急いで家を飛び出し、すぐその浜辺まで走った。

「麻紀！」

浜辺に出る数段の階段を駆け下り、足を浜に取られながらも岩場に急ぐ。

微かに見えた麻紀の姿にホッと胸を撫で下ろし、岩に脚を掛け、息を整えながら近づいていく。

相変わらず近づくと気配に気付くこともなく、ただぼんやりと海を眺め続けている。

いつものように隣に腰を下ろす。

「お兄ちゃん。今日は来るの早かったね。いつも夕方近いのに」  
うつすらと微笑む妹にやさしく抱き締める。

「怖い夢……厭な夢を見た」

「厭な？」

「うん。怖かった」

「珍し。お兄ちゃんの弱み初めて聞いたかも」

「弱み？ 弱音じゃなくて？」

「うっ……そうとも言っ」

かわいい。そんなちよつとした間違えが可愛い。妹だからこそ、憎めない可愛さも持ち合わせている妹。

「どんな夢なの？」

「どんなって……どんなのだったかな？ ……忘れた」

なんて嘘だ。しっかりと落ちていく感覚も、はっきりと覚えている。でも、今それを言って、妹を心配なんかさせたくない。

べつに、ただの夢なんだしと割り切ったってかまわないことなんだけど、あいつのことがあったから。あいつのことを、麻紀が一番根に持っているから。

『優貴！ 優貴ー！！』

血相を変えて、どうにか助けてやろうと手を伸ばす麻紀。その隣で、現実が飲み込めていない自分が、見開いた眼で、あいつ……優貴を見つめていた。

あいつを助けることが出来ない自分達。ただあいつを呼び、叫んでは現実逃避をしかけてしまう。

姿が薄くなる優貴を、麻紀はあきらめずに優貴に触れようとした。しかし、いくら触れようとしても、結局触れられずに。

その場には泣き崩れる麻紀の声しか響いてはいない。

でも、最後に見た優貴の微笑みだけが脳裏に焼き付いて離れない。どうして微笑んだのか。

どうしてその微笑みが、麻紀と俺を納得させるかのような、少しだけこうなることを知っていたかのような微笑みだったのか。もう聞くことなく、自分で理解しようとしなければいけなくなっ

た。

この場所が愉快な場所である麻紀と優貴に、この場所が天敵な俺。

いつかはここを離れたいと思っている。もちろん麻紀と、思っている。はいる。

でも、きっとそれは難しいだろう。

麻紀がここにいれば、麻紀自身の身くらい、守ることくらいは出来るだろう。でも、俺にはただの弱点にしかない。

それを回避するにはここを離れなければならない。でも、麻紀を一人にしたくない。

結局この循環だ。

優貴は、俺を護るといった。麻紀を護るといった。でも、俺と麻紀は、対立してしまう位置関係だ。

麻紀や優貴が俺を護るということは、直接的なダメージはなくても、ほんの少しのダメージを食らってしまうのは確実だろう。

「麻紀。おれな、いつかはここを離れようと思ってるんだ」

「……え？」

なにを言っているの？　と言うように、軽く眼を見開いたまま、ゆっくりと顔を向けた。

「いっしょに……いてくれるんじゃないの？」

「ああ。だからその時は、お前も……一緒に来てくれるか？」

見開いていた眼は、ゆっくりと目尻が下がって、すぐくうれしそうな顔をしていた。

ここは麻紀にとって愉快的場所。いつかはかならず返ってくる場所。

うつすらと閉じた目蓋には、再びここに戻ってきた麻紀の姿が見えた。でも、どうしてもそこには返ってくる自分自身の姿が見当たらなかった。

でも一人じゃない。それ位はわかった。でも、そこには確実に自分はいないだろう。

寂しいはずなのに、それが当たり前な気がした。

ここを離れるのは今すぐというわけには行かないだろう。俺にも麻紀にも学校がある。今は夏休みだけれど、いつかは夏休みも終わってしまい、自由が利かなくなってしまう。

「いきたい……行きたいよ。お兄ちゃんと一緒だったら、どこにだって行ける気がするよ」

「じゃあ、学校卒業したら行くか」

「うん。じゃあそれまでにバイトで旅費稼ごうかなあ」

「それは俺がするから、麻紀は勉学に励んで？」

「それ、私が馬鹿だって遠回りに言ってる？」

少しだけ疑うように、プウツと頬を膨らませた顔が可愛い。

結構成長したと思う。

数カ月前。優貴を失ってからはそのうふうに、表情を変えることなんて、知らないかのように、無表情。というよりは、寂しそうな顔しかなかったから。

話しているうちに表情が変わるなんて進歩したほうだと思う。

「言っていない言っていない」

うつすらと微笑み、そっくり聞かせるように言った。

一日が過ぎるのは、今では目的がある俺にとって早く感じられた。それもこれも、無謀なことをしてしまったからなのかもしれない。でも、そこへ行くという選択を選べなくなってしまった身からしてみると、「歩く」という選択以外には考えられなかった。

悔しいほどに、真っ赤に腫れた太陽が東に見えていた。

「あと何キロだろ……」

気が遠くなってきた気がする。

と感じられるなら、あと一時間は大丈夫だろう。

夜更かしが得意なわけではない。

長距離歩くのが得意なわけではない。

数メートル前に、「海水浴場まで後15キロメートル」だったか、数字はあやふやだったが、もうすでに何キロも歩いた自分には、億劫にしかならなかった。

近づいてきたせいか、不思議と海の匂いがしてきた。

いや、向かっている先が海だから、海の匂いがしてきて喜ぶべきだろうか。

…海に行つてどうするんだ？

自分の答えを見つけにいく。

…そこに答えがあるのか？

わからない。なかったらなかったけど、なにか、行かなければならない気がする。

…もし答えが見当たらなかったらどうする？

だから……なかったらなかっただ。行ってみないとわからない。やってみないとわからない。

好奇心って、そういうことだろう？

…子供じみた思考だと思わないか？

大人になったら、それもあるだ。

理屈だけをしゃべって、実行に移さないだなんて、かつこわるい。子供の思考は、無意味な疑問だって抱くことが出来る。

無鉄砲な行動が出来る。



その何が悪い。

誰ともしやべらない日々がつづいてしまい、自問自答で必死に自分が今ここにいるということを実感させる。

すぐそこに見えているところから質問し、自分に必死に頑張れつと応援させる。

だれもいつてくれないなら、自分で言えればいい。

最終的に意地だつてかまいやしない。

意地だとしても、目的にたどり着きたい。歩けばつくんだ。

今までの人生上、そんなこと簡単にわかることが出来た。

わかっていても、行動に移せないのが現状だが。

「もー足が動かないよお」

足が重くつて、ついしゃがんだら腰をあげることが出来なくなつてしまった。

一日中歩いたのと一緒になのだ。少しくらい休んだつて罰は当たらないだろう。もし当たるのならば、死んでも神を呪い、祟ってみせる。

「ほんと……何してるんだろう俺……」

曲げた膝のうえに肘を寄せ、その間に頭を埋めるようにしゃがみこみ、肘をまげて頭を覆った。

眠気は続き続けたせいか、真夜中よりは消し去っていつている。

おかげで精神的には歩いて行けるのだけれど。

「肉体的に……ねえ」

しゃがんだ拍子に伸びた筋肉が痛い。

いかにも「筋肉を異常に使いました」と、身体がヘルプを出しているのが見え見えだ。

「あともう少し……」

と自分に言い聞かせる。

でもこの時の俺には、大事なことを忘れていた。

この長い距離を歩いていくなら、帰りだって……。

日は東から昇って西に落ちる。

いまは、真つ赤な太陽が西にいる。

もうすでに一日が過ぎようとしていた。

夢を見たあと、何度も考えていた。今日、何かが変わるはずなんだ。と。

変わってはいけないものというものが必ずある。でも、自然の摂理というのか、変わってしまうことなんてある。

仕方のないことだろうけれど、人はそれを恨み、呪う。

例えるならば、数年前に起きた関東大震災。

だれもが興るだなんて思わなかった事態が、自然現象で起こり、人生を台無しにされる。

それを恨み呪った人は、少なくともたつて、一人はいるだろう。十人はいるだろう。

でも、呪ったところで人生は返してくれない。

ただ苦痛に耐え、助けを求めるしかない。

いま、そんなようなことが起きるような気がしてならない。

「寒くなる。何か上着をとってきてあげる」

「ほんと？　じゃあまっ……るって、お兄ちゃん！」

立ち上がり、家に戻ろうとしたところ、ギュツと服を掴まれる。

「なっなに？」

「あれ！」

振り向くなり、指を差した方向は、車どおり人通りの少ない、すぐその道路だ。

じつと見てみると、かすかだがふらつき、いまにでも倒れるんじゃないのかという、ヒト……をみつけた。

「本当にあれ、ヒトか？」

ふらふらしていて、ヒト……ではあるだろうが、正常ではない。なんだか、断食していて、まともな肉が付いていないような気がする。

ゆっくりと麻紀と共に砂場におり、道路に向かって恐る恐る足をすすめた。

ふらりふらりと歩く姿は、すごく惨めで、だらしないように見える。

近づけば、だんだん本当にヒトなんだと納得出来るようになってきた。

年はまだまだ若い。麻紀が俺くらい。もしくは、もう少ししくらいだろう。背を曲げ、長いとも短いとも言えない前髪が垂れ、きちんとした顔まではわからない。

身長はきつと、160くらい。悪くてもう少し低いだろうか、というところだ。

道路につながる、三段くらいの階段を下ってきた。

オレらが接触するまであと数歩というところで、いきなり前のめに倒れてきた。

反射的に受け止めるのではなく、二人して一歩ひく。

二歩ほど前へ足を出していればぶつかっていたかも。受け止められたかもしれないが、雰囲気怖くて避けてしまった。

しかし、下が砂だからといって、受け身をとらなかつたらさすがに痛いだろうに、そんなうめき声すら聞こえなかった。

起き上がるような様子はない。

このままにしておけば、砂によって窒息死してしまう。

ゆっくりと肩に手を触れ、グイッと仰向きにさせてやる。

決して汚い顔というわけではなかった。何かを成し遂げてやったというような、達成感を感じている清々しい顔に見えた。

きれいな顔だ。

ふとそう思えることが出来た。

口に出していたかもしれないが、あまり覚えちゃいなかった。  
そつとその男の子の口元に手を近付けてみる。  
息はしている。心のそこからホッと肩を落とす。

## 第7話

（着いた……着いたんだ……？）

きれいな海が見えた。

探し求めていた何かを見つけることが出来たような気がした。

答えが見つかったわけではないけれど、決めた目標に向かって行った自分を誉めなければいけない気がした。

誉めて育てろ。

その言葉を作った人に、愛を叫んだってかまわない。いや、ぜひ叫ばせていただきたく思っていた。

休むことはした。

でも、本能的に行いたいと思うことは、必死に耐えた。耐えなければならなかった。睡眠や食事。

やはり一番つらかったのは断食。つまり食事。

人間、水さえあれば三日は生きていられるといったが、水すら持たなかった自分、少しだけすごいと思えた。

途中からは、お腹が空きすぎて、「空腹」だということを多少忘れることが出来た。

眠くて眠すぎて、「眠い」ということを忘れることが出来た。

でも、海を見た瞬間、限界というものがあらわれたような気がした。

お腹が空きすぎて、本当に背中とお腹がくつつきそうだし、眠すぎて目蓋が１ミリとも開けることが出来なくなってしまうた。

疲れ切った身体は、筋肉が大声で泣きだして体を起こすことすら出来なくなつたし。

まず先になにをすればいい？

寝ればいい？

食事を取ればいい？

筋肉を解ほぐせばいい？

とりあえず、目蓋が開かないから、自然的に睡眠を取ればいいだろう。

「お兄ちゃん……この人眠りながらお腹がなってる」

「後で良い笑いにしちゃう」

「そだね。でも、この人なんなんだろう。（家に）あげてよかったのかな？」

「まあ、未来からやってきた。とか、過去から……云々（うんぬん）はないだろうけど、そんなこといつてきたら、即座に外に放り投げればいいだけさ」

「そだね。じゃあ、当分は起きないだろうけど、そのお腹に満たせられるようなもの用意しておくね」

立ち上がり、麻紀は部屋を出ていった。

それを目だけで見送り、再びベッドに寝ている男の子を見つめた。着ていた物は、洗濯機に放り込んで、反応を知りたいがために、真っ裸で布団のなかに放り込んでみた。

もちろんそのとき、麻紀は部屋の外で待機させておいた。

でも、脱がしたとき、足の裏には長距離歩いたような豆が出来ていた。いや、豆だけなら可愛かったかもしれないが、血豆すら出来ていたし、一つの豆なんか割れていた。

見ただけで痛々しいその足を治療してやったけれど、思い出しただけで痛みが移ってくるような気がした。

でも、頑張ったような足裏にしては、体格的に運動とは程遠そうな体付きをしていた。

していたとしても、学校の授業程度で、特別決まったスポーツはしていないだろう。

しかしどうしてここにたどり着いたのだろう。ここに来たければ、バスを使えばいい。といっても、回数が多いわけではないが。

もしこの人が追われ、逃げていたのなら、こんな足での疲れ具合はわかるとしても、あれ以来追っ手というのは、訪問してくるようなものはあらわれやなかった。

「まさかこいつ……本当にどこからかワープしてきたとか？ ……なあって、ワープなんてあったらもっと早くにワープしてくるだろうなあ」

わからないことがおおい。もっと単純で、すっきりわかることができることだったら喜んで手伝ってさっさと追い出せるのに。

「頼むから、目が覚めたら記憶がありませんだなんて状況になりませんように」

一番やつかいなのが、目を覚まして記憶がありません。という状況だ。そんなことになったら、さっさと救急車に運ばせてやる。

面倒だけはごめんだ。といいたいが、中にいれてしまった以上、面倒承知だということなんだろうけれど。

それから目を覚ますまで、だいたい二日もたっていた。

「今日目覚めなかったら、海にでも沈めてやるのか」

「そうだね……こんなに目が覚めないとか、いままで病院につれていかなくて悪かったかもだしね。死体になられたら、面倒だもんね」あれから何度お腹の空腹であるサインを聞いただろうか。

いつからこの人が寝ていないのかも気になるところだ。

どんな無茶してきているのか。

そんなことを考えているとき、急に彼の持ち物である携帯が鳴り響いた。

俺も麻紀も反射的にびくつき、ゆっくりとその携帯の方に顔を向ける。

「びつくりしたあ」

電話なのだろうか。一分もしないうちに切れはしたが、その後、五秒程度の着信音が鳴り響いた。

次はメールか。

電話に出ることは避けてやったのだから、本人のことを少しでも知る権利があるのだから、メールくらい読んでも罰は当たらないだろう。

何かが変わると思っていた二日前。本当に現実、いつもの平凡な長期休校が、少しだけ波をたてはじめている気がした。

「なんて書いてあるの？」

「えっと……いきなり電話してごめん。暇じゃなかったのかな？だとしたら、後でもいいから返事くれないかな？」

この前のこと謝りたくて。ごめん。急にあんなこといわれても、辻が困るだけだもんね。反省してるよ。

もしよかったら明日でも会えないかな？ 会いたくないようだったからしばらく連絡しなかったけど、もうそろそろ限界かも。

いつもみたいに三人でばか騒ぎしたいんだ。わがままだろうけど、聞いてくれるとすごくうれしい。

この前みたいなことは言わない。今までどおり、笑いあいたいから……

良い返事、まっています。



だつてよ」

「相手は男の人……かな？」

「っぽいな。泣つていうのはこいつのことだろう。んで、メールしてきた奴は……島？　なんて読むんだ？」

「どれ？」

持っていた携帯を、ゆつくり麻紀に手渡した。

「えっとお……木偏に午後の午？　んーわかんないや。あつ、アドレス帳見たらわかるんじゃないかな？」

あまり慣れない手つきで携帯をいじり、アドレス帳からその人のものを探しだしていた。

読めないぶん、ふりがな検索という楽な機能が使えずに、少しだけ苦難している様子だった。

「あつあつた。きしま……だつてさ」

「へえ杵島……ねえ」

一応日本人らしいし、日本に住んでいて、別に漂流してきたわけでもない。

やはり、どこからか歩いてきた。もしくは、走ってきたのだろう。

「いい加減、目を覚ましてくれないと病気が何にかかるぞ？　餓死とかはやめてくれよ」

強制的に起こそうと、多少乱暴に開いたままの携帯を麻紀から取り戻し、机においては、軽く回れ右をしてベッドの隣に立つ。

それを目で追いながら、ゆつくりと後を追う麻紀。

「ねえ、今どうして携帯、取り上げたの？」

「こちらと俺を見た後、ベッドに横になっっている彼に目をやった。この人、もう死んでたりして……」

「んー、一応息はしてるしなあ……麻紀、強制的に起こすから、この前用意したご飯、悪いけど温め直してくれないか？」

「了解」

出ていく麻紀を見送り、再び彼の方を振り向く。

すやすやと、死んでいるかのように眠っている。

寝相は悪くない。と言うか、本当に死んでいるかのように、身動き一つしない。それがまた、怖かった。

まわりを見回し、なにか起こせられるものがないかと探す。

安全なものを使うとすれば、いつの時代のものかすらわからないような、古ぼけ、誇りに埋まっているかのような雑誌だった。

きつと昔に母が読んでいたのだろう。それを丸く丸め、その目的である男のまえで、それを振り上げ、思いっきりそれを振り下ろす。

ベシッ……

という淋しい音をならしたまま、静けさは再び戻った。

「……っほぉー良い度胸してるなこいつ」

寝相はいいくせに、寝起きだけは悪いのか。

厄介な奴だなと思いながらも、何度もそいつの頭を叩きまくる。

バシバシと叩かれる夢を見ている。

ただ目を瞑っているだけのように暗く、自分の姿は見当たらない。ただ、頭を何かで叩かれているだけ。

夢を見ているという実感はない。本当に殴られているかのように……

いや、本当に殴られているのかもしれない。

（ああ、腹減ったあ……）

空きすぎて、体や頭が狂ってしまいそうだ。

（起きなきゃ……）

眠りが浅くなってきたのか、だんだん現実に戻っていく気がする。少しだけ重い目蓋を開ける。

そこには、丸く長いものが力一杯振り落とされる。一瞬、その、丸く長いものを持つている人が、あつと気付いたかのような顔を、したのを瞬間的に視界に入ったが、遠慮もなしにそれは頭に刺激を与えた。

「いいっ！」

「よお、起きたか」

「でもおにいちゃん、結構ひどい起こし方だけどね」

（お兄ちゃん？ 起こす？）

「仕方ないだろ。俺の妹にひどいことをした男なんだからな」  
睨み付けるように俺を見る。

いったいなんのことを言っていて、ここはどこで、どうしてここにいるのか。すべてを説明してほしかった。

でも、こんなようなことを一度体験したようなことがあった気がする。でも、確かあの時は誰もいなかった。

居て、状況を説明してほしいと思っていたかもしれない。でも、まさか居て、暴力を振るわれ、流れのわからない会話をされるなんて思わなかった。

「ひっひどいことって？」

「ひどい………忘れたとか言わないよね？」

もそもそと体を軽く揺すりながらも、チラチラつと何度か俺を見る。

ゆっくりと上半身を起こそうと、右腕に力をいれ、軽く頭を上げたとき、何かの異変に気付く。

（あれ………？ こんなに布団に触れてるものだったけ？）

少しだけ自分の体温で暖まった布団。いま、少しだけ隙間を空けたときに、その隙間から冷たい空気が入り込んできて体を直で冷やす。

体は足と腹筋の筋肉痛という重み以外、いやというほど軽かった。いつも絡みくるパジャマを着ていないかのようだ。しかし、ぱっと見、自宅ではない。着替えさせてくれて、違う服を着せられたのかもしれないけれど、にしては動きたいように動けてしまう。

かといって、ピッタリすぎるような窮屈感もない。

もしかして……と、だんだん血の気が失せてくる。

軽く布団をめくり、その中身を確認するなり瞬間的に固まった。

（服……着てない？）

「ひどい……本当に覚えてないの!？」

「えっあの……えっとお」

女性のほうが、信じられないというような悲鳴をあげ、ひどいといって両手で顔を隠し少しだけ下を向く。

まさか、してしまったのだろうか。でも、今まで歩いてきた記憶しかないし、この二人にあったのだって、初めてだと思う。

本当に記憶がないのならば、今の状況を納得する他ないのだろうか。

「ちょっと待った……状況を説明してくれないか？」

とりあえずそこからだと、男性……といっても、そんなに年齢差はないようにも見える方に聞く。

「そうだな。簡単に言えば、へろへろ歩いてきては急に倒れたのを拾った。だけど、深く言えば、倒れたおまえに悪戯したところかな？」

「いた……ずら？」

「そつ。お前、その布団の下どうなっているのかわかっているんだろつ？」

「あつ……ああ」

「それで、どういう反応するか試したってわけ」

そうネタばれをするなり、疲れたかのようにため息を吐き、多少前かがみになっていた体を起こす女性。

つまり、すべて楽しむために仕組まれた罠に、疑うことなくきれいに填まってしまったのだ。

「なっ……なんだよそれ……」

力が抜け、へなへなとベッドのうえに再び仰向けになった。

それならそうと、騙さずにはつきり言ってくればよかったのにも思いながらも、それじゃあ意味はないかと少しだけ思い返す。

その瞬間、緊張感が抜けたからか、力強いお腹の鳴き声が響き渡った。

## 第8話

着替えを渡し、服を着替えさせている間、麻紀にはご飯の用意をさせた。

その足で歩かせる気にはさすがにならず、準備が出来しだい、持ってきてもらえるように頼んだ。

その間にでも、俺はこの男に事情を聞いた。

「んーっと、ちょっと考え事がまとまらなくて、自棄になって飛び出してきたのは良いけど、片道ぎりぎりを選んだら、余計なところに使うお金がなくなっただ。でも、ここ……海を近くで見ないといけない気がして、駅から歩き通してここまで来たってわけ」

つまり、ただのバカ。

普通だったならそんなこはしないし、下手したら餓死をしていたかもしれない。しかも、それから二日間寝続けたのだ。今きちん意識があつて、こうやって話が出来るのもすごいかもしれない。

「無謀なことを」

「自分でもそう思うよ」

そういったあと、淋しそうにそうすることしか出来なかったといつた。

そんなに何かに追い詰められていたのだろうか。

ふとその時、電話とメールのことを思い出した。

「はい」

「え？」

机に置いておいた携帯を手渡すなり、少し不思議そうな声をあげる。

「電話とメール着てた。ていってもついさっきのことだけど」

「そっか。悪いな」

「え？」

「色々迷惑を掛けてしまっ

携帯を開くことをせず、じっと俺の方を見つめていつてくる。

迷いとか、照れとか恥ずかしさなんてなく、ただ真っすぐな瞳だった。

最初は、すごく憎み、意地悪ばかりをしてやろうかと思っていたというのに、そんなにも真っすぐだと、運がよかったと思う他ないだろう。

「はっ早くメール見てやれよ」

逆に恥ずかしくなっ

調子が狂う。

なにか、オレらに期待とかではなく、心の何かを許しているような感じがした。

「お待たせ」

扉を開け、良い匂いを漂わせながらも麻紀が入ってきた。

お盆をベッドの近くのテーブルに置く。

「これ……」

「寝ながらお腹なっ

「あっ……」

カアツと火照るその男の顔は、すごく子供み

でも、今でもメールを見ることはしてい

見たくないのか、何か心当たりがあるのか。

「ご飯を食べ、お風呂に入れた後は、適当に色々話した。

ここがどこなのかから、お互い何才なのかまで。

どこに住んでいるのかなど話したし、どんな学校に通っている

のかや、夏休みの過ごし方など、とにかくたくさん話をした。

話していくうちに、だんだんこの男には大きな害がないような気がしてきた。それとともに、不意にこの男になら麻紀を頼んでも大丈夫な気もした。

どうしてそんなことを考えてしまうのかはわからないが、俺が出来なかったことをこの男になら出来そうな勘が働くのだ。根拠があるわけではない。本当に感覚だ。

二日程前から何かが起きている気がする。

何かが変わると……。

きつと変わっていくきつかけはこいつ、辻と名乗るものの現れだ。変わったのはこれだけじゃない。これから、今まで知らなかったようなことが、次から次へと現われてくるのだろう。

今日は、まだ前兆でしかない。

これから起きること。すべてが理解できないことになるうとも、現実を見ずに逃避するような人間にはなりたくないし、なってはいけない気がする。

「さっ今日はもう寝たほうが良い」

「あっああ。『さっ今日でもう帰れ』って言われるのかと思った」と、すこし驚いたような表情でいった。

「そんなにひどい奴に見えるか？」

「いや、そうには見えねえけど……」

「けど？ 何か不安なの？」

「不安っていうか、どこの骨の輩かわかんないようなやつを、そう軽がる預かっているもんなのかなあって」

不安そうに見上げる辻を、今更放っておけないだろう。それに、まだまだ何かが変わるはず。

変わってほしくなくとも思っているけれど、なにか、変わらなければいけない気もしている、



感覚と思っていることが一致しない。きっとそれは、運命というものが交わっているのだろう。

「辻、年齢は俺と同じ。それだけ知ってるだけでも、十分だ」  
深入りはしない。

しなくてはいけない気がするなら、もうとつくの前にしているし、追っ払うなら、それこそ起きた時点で追いつ返している。いや、拾うことすらしなかっただろう。

それに、この男、辻に少し疑問点を持っている。

携帯のメールや電話を確認しないのか。

未だずっと一緒にいるが、携帯を見ないのかが疑問に感じられた。  
「拾われたのが、あなたの家で良かった」

軽くにっこりと、警戒心ゼロな笑顔を向けてきた。  
きつと憎めない存在。

向こうに親友二人を待たせているんだといった。でも、急いでその二人の元へ帰ろう。戻ろうという素振りはない。

二人との関係に距離を置いているように。昔の俺に似ていた。

「喜べ。そして心の底から麻紀に感謝しろよ」

「え？ 私？」

急に話を振られて、どう反応していいのかわからないかのように、自分自身に指を差し、キョロキョロと俺と辻を何度も見た。

その姿が可愛くて、ついクスツとほほえむと、釣られて辻も笑う。二人で笑っていると、麻紀は拗ねるようにプウツと頬を膨らませる。自分はシスコンと同じ分類にはいるといっても他言ではない。そうだとわかったのはいつたいつの頃だっただろうか。

「ありがとう。麻紀さん」

改めそうという辻に、赤面しながらコクンと頷く。

夢を見た。

懐かしく、カラフルで普通の夢。

あの真っ暗な部屋みたいな囲いの中にいて、訳が分からないまま呻いたり、寂しがったり罪悪感を感じる夢ではない。

真っ青な空を、杵島と麻紀に挟まれ、間に俺が座って見上げていた。

いるのは三人だけじゃない。

杵島の隣に立っているのは、髪がきれいで真っ黒で。前髪は短くて、サイドが少し長いかな？　くらいで、後ろだって長いとはいえない。眼鏡をかけていて、可愛らしく、男か女か迷うような容姿だ。甘えたがりなのか、麻紀の股のなかに入るかのように、小さく座って麻紀が頭を撫でている女の子もいた。

髪の色が少し薄くて、前髪は真ん中分け。ショートヘアで、人見知りが激しそうに、弱々しそうな表情をしていた。

五人。なんだか、この中にいたら、すごく気分が良くて落ち着く場所。

何かを捜し求めて草原にきたはいいが、気分が良すぎてここを動く気がしなくなってしまうみたいに。

会話することはなく、ただ風にあたり、草のにおいを嗅ぎ、心を落ち着かせていた。

そんな心とむ夢だった。でも、疑問点はある。

なぜそこに杵島はいて相澤がいないのか。

なぜ麻紀がいるのに、シスコンじみている兄貴がいないのか。

何かが、今まで考えていたような平凡な人生を変えようとしている。

死ぬまで色々なことがあって、頭を必死に使って考え、それでも分からないことがありながらも、必死に生きようとしている姿がある。

夢というのは怖い。

いつかこれが現実になるんじゃないかって、不安を募らせていく。

ゆっくりと目を覚ました場所は、寝る前と変わらなかった。  
さっきの夢は幸せな夢だったのだろうか。淋しい夢だったのだろうか。

はつきりと覚えている夢なのに、感情までは覚えてはいない。  
感じていなかったのかもしれないし、感じようとしてもしていなかったのかもしれない。なんだか、他人の行動を、なにとなく眺めているだけのよう。

まだ周りは暗い。

朝日も出ないうちに起きるだなんて、懐かしい。

枕元に置いてあるはずの携帯を、手探りする。

時間は四時。

前にもこんなことがあったか、そのときは確か二時だった。しかし、それは夢で起きたようなものだ。

「何の夢だったんだろう……」

（予知夢を見れるような力なんてないしなあ）

「あつてもいやだけど」

ため息混じりに独り言を終わらせ、軽く髪を掻き上げては布団に再び入りなおす。

眠れるだなんて期待はしていない。

三日間寝通していたらしいし、少しばかり考えていた所為で、頭が覚めてきた。

布団をきれいにめくりあげ、左足から降りていく。

着替えを準備してきたわけではないから、お兄さんが昨日準備してくれた服を有り難く使わせていただく。

少しばかりブカブカで、袖がだいぶ余る。

ちよっと悲しみを覚えながらも、ゆっくりと袖をおる。

カーテンをきちんとあけて、携帯をゆっくり開く。

あの二人が見たのか、来ていたというメールは新着として扱われていなかった。

危ないメールではないと思うが、キャンプの時の話だったら、さぞかし頭を傾がせただろう。

メールの内容は

「いきなり電話してごめん。暇じゃなかったのかな？　だとしたら、後でもいいから返事くれないかな？

この前のこと謝りたくて。ごめん。急にあんなこといわれても、辻が困るだけだもんな。反省してるよ。

もしよかったら明日でも会えないかな？　会いたくないようだったからしばらく連絡しなかったけど、もうそろそろ限界かも。

いつもみたいに三人ではか騒ぎしたいんだ。わがままだろうけど、聞いてくれるとすごくうれしい。

この前みたいなのは言わない。今までどおり、笑いあいたいから……

良い返事、まっています。……か。良い返事って言われてもなあ。

やっぱりこのメールは見ないでおいたほうが良かったかな」

会いたいというのは昨日か一昨日の話だろう。

いまさら返事をするのも変な気分させるだけかもしれないけれど、返事をしておいたほうが二人の為だろうか。返事がなくてもおかしい話ではないかもしれないが、返事をしないと心配するだろうか。

（しないよりは良いのかな？）

慣れない手つきでメールを返信画面にもっていく。

（電話にしようかな？）

ふと壁に書けてある時計の針を見る。

（非常識な時間だよな）

それに、なんだか口ではうまく言葉を選ぶことができないかもしれない。

「んーと……」

ピコピコとはならない携帯。

カタカタと小さく音を鳴らしながら、文字を打ったり、打ち直したり全部消したりしていた。

うまく言葉がまとまらない。なんといえば二人にうまく伝わってくれるのか、どうすれば今の自分名状況を伝えることができるのか。なんとなく、少しだけでも納得をいかせると、ゆっくりと送信ボタンを押した。

「パンはお嫌いかな？」

二人のどちらかが部屋から出てきて、リビングの方に行く音が聞こえる。

その時の時間は七時くらいだった。

もうお腹がペコペコで我慢がきかなくなってきた頃だ。釣られて起きるようにリビングに向かうと、オハヨウの次の台詞だった。

それに首を振る。

「朝ご飯、パンなんだ？ パン好きだよ」

起きていたのは妹の方だった。

どちらかといえば、お兄さんのほうが早く起きるようなイメージがあった。

「よく眠れました」

「あつはい。さすがに何日も寝たからか、朝は早く目覚めたかな」

「なら朝日を見た？　ここから見える朝日と夕日はきれいですよ」

「うん。朝日、きれいだった。今日は夕日見てみたいかな」

「うん。でも、帰らなくて平気なの？　友達……待ってるんじゃない？」

「あー……やつぱり見たんだ？」

「ええ」

うつすらとほほえみ、何も悪いとは思わないかのような笑みだ。

出されたパンを手に取り、口に含む。

パンは食パン。

ふわふわしていてやわらかい。ゆっくりと角度を変えるだけで、簡単に口に含むことができる。

「良いんだ。さっき返事を送った。できるだけ早く帰ろうとは思ってたけど……あつそうだ。一つ頼みがあるんだけど」

「なあに？」

「俺帰るとき……」

「なんだよ、おまえらもう起きてたのか」

「おはよう。お兄さん」

「お兄ちゃんおはよ」

パンを丁度食べ終えたとき、お兄さんが起きてきた。

「おまえにお兄さんって呼ばれる筋合いはねえよ」

こつんと音を鳴らすように叩き、クスリと微笑む。

「だって名前面倒な名前なんだもん」

「この俺の名前を面倒だと？ 失礼な」

なんて笑いあえる間、俺はまだここにいるという証でもあるんだ。ここにいていいのかときけば、居たいだけ居ればいいさと言ってくれたお兄さん。

ボーツとしていても文句を言わない妹の麻紀。

この場所は、とても居心地が良くて長居をしたくなるけれど、早くここからでなければ、何か大きな異変に巻き込まれるような予感がした。

帰らなければならない。

帰りたくないかない。

考えていることと感じていることが、うまく絡み合ってくれやしない。

「もし……もし俺が帰りたくないだなんていったら、君たちはどうする？」

「帰らなければ良いさ。俺たちはかまわない」

「邪魔だつたりしない？」

「しない。むしろ、おまえがいると、何だかこの先何かが起きるような気がするな」

淋しそうというより、清々しい感じ。その起こりそうな出来事を待っているような、迷いのない瞳をしていた。

## 第9話

「ここ、私の特等席なんだ」

誇らしげに自慢するようにそういう麻紀の隣に座る。

お兄さんがご飯を食べ終えた後、おれらは海岸に来ていた。海岸というより浜辺といったほうがあっているような気もする。

ゴツゴツとした岩場に座った麻紀は、すぐその場に溶けこんでいるような気がした。

長い間その場にとどまり、その場を愛していたように。

「すごい……綺麗で澄んでる……。こんなのテレビでしか見たことないし、沖縄以外にもこんなに綺麗な海してる場所なんてあるんだ……」

「あつ……それは。そうっだね」

少しだけ言っではいけないことを言ってしまったのか、少しばかり焦るような様子を見せる麻紀。

今になって、ごめんだなんて謝ることはできない。

もしかしたら、ただ返答に困っただけかもしれない。

「こんなに綺麗だったら、汚すわけにはいかないよね。なんだか、神の聖域みたい」

「たしかに、聖域かもな。にしても、おまえ………止って結構ロマンチックなのとか好きだろ？」

「良くわかってるじゃないかお兄さん」

なんだか今の会話、何かを思い出させる。

いつもこんなふうに話して、こんなふうに笑いあえて、一緒に居て幸せを感じさせるやつらを、俺は知っている。



今までだつて一緒に居たというのに、自分から突き放した奴ら。

「おまえさ、いざ誰か一人にしか会えなくなつた場合、誰を選ぶ？」

「えっなにを唐突に……そうだなあ。だれだろう……」

一人だけ選ぶだなんてできやしない。

あの人にもこの人にも……と言うわけではないが、選ぶ難しさを問われているような気がする。

実際、そんなことになつた場合、杵島にだって会いたいし、相澤にだって会いたい。このきょうだいにだって会いたい。

「一人にしか会えないなら、誰にも会わない。絶対に会わなきゃいけないなら、名前も知らない、赤髪の男の人に会いに行くかな」

「赤髪？」

「そつ。一回だけ会つたことがあるんだ。土砂降りの雨の日にと……気にしないで。俺もよくわかんないし気付いたら病院にいたし」

「お前……」

兄さんと麻紀は、少しだけ心当たりがあるかのように、じっと俺を見つめる。

少しだけ胸騒ぎがする胸と、何かを追い詰めるかのような瞳。どちらも痛いもの。苦しいものだった。

ゆっくりと麻紀は俺の右手に触れた。その瞬間、何かに反応したかのように体がびくついた。

そついえば、ここに来てから左手に熱を感じなくなった。というより、左手の熱が抑えをなくし、左腕全体を占めるかのように熱を伝え、熱くなるという感覚をマヒさせているようだ。

まだ右手には熱はいつていないはずだ。  
にしても、麻紀の手はすごく冷たい。何かで急激に冷やされたような冷たさだ。

確かにここはお世辞にも暖かいとは言えないけれど、適温のはずである右腕ですらすごく冷たく感じられた。

「冷た……寒いのか？」

あまりにも異常な冷たさだ。

冬、北海道に住んでいればこの冷たさも納得はいくのだけれど、そんなにも寒くはない。

それに、冷え性という冷たさを通り越してる。どこかで感じた異常な冷たさ。

あの時はこんなにも感じなかったが、あいつ……相澤と同じような冷たさ。

「水……」

「知ってるんだ？」

「あつと……」

「なにを知っている？ どこまで知ってるんだ？」

「わかんない。どの話をしているのか」

「そう……か」

少しだけ残念そうに言う兄さんの表情に、少しだけ何かの違いを感じた。

問い詰めようとはしない。素直に諦めてくれるこのやりとりが、少しだけ淋しかったけれど、うれしかった。

「私もね？ 似たような経験をしたんだ。青……というよりスカイブルーの髪した女性。実際そんなヒトがいたら変な人じゃない？」

でも、その人にはそれが当たり前のような気がした。しっかりとした表情で、私をじっと見つめてきた。その人には、私は何か懐かしいものを感じたんだ。あなた……辻さんにはそういう感じの人とは思わなかった？」

「その言い方だと、俺が会った人と、何か関連があるって言いたいのか？」

「うん。私はその人のことを知っているし、きっとあなたがいった人のこともわかる。知りたい？」

真剣な眼差し。

きつと麻紀に聞けば簡単にわかることのような気がした。

どんなに危ない人だって、どんなに人が恐れるようなものだって、

あそこにいた理由とはなした理由があるはずだ。

「いや。知りたくない」

首を横に振る自分。

本当は物凄く知りたくて、体がこれ以上ないくらいうずうずしているけれど、何となくわかった気もする。本当のことがどうかはわからないし、麻紀が言うなら、麻紀がいったほうが正解で確実なのかもしれないけれど、あえてそれを聞きたくなかった。

「そう」

「辻。いざとなったら麻紀を頼むな」

「え？」

「おっお兄ちゃん!？」

麻紀もそんなことをいつてくるだなんて思わなかったのか、二人揃って兄さんの方を見る。

俺には意味はわからないが、麻紀は少しだけ心当たりというのか、そういうお兄さんのほうが言いたい意味が多少でもわかったようで、それが確実にも、良い方向ではないようだ。

何かをお別れするかのように。

お兄さんは、特に淋しそうな表情を見せているわけではない。ただ、何かをすすきりさせたいかのような表情だった。

「……わかった。ただし、いざとなったらだ。普段はお兄さんが、必死にお守りするんだろう?」

「ああ。いざとなったらな。それまでは、俺が麻紀を護ってる」

麻紀を挟んでの会話。

麻紀のほうが内容を深く知っているようなのに、今の会話にはついていけないようだ。

でも、その時感じた。

左腕に熱がこもってきているのが。

正確には左手だ。

何かに反応している。確実にこの体に乗っ取るかのように、左手を燃やすかのように……。

火傷をする。なんて感覚はない。なんだか、左手の意志で熱をためているかのように。

ゆっくりと左手に目をやるが、異変を見ることなんてできやしない。

その眺めていた左手を、ゆっくりと麻紀の手に添える。

「あつ……」

何かに反応したような顔をした後、驚いた表情のままもう片方の手で俺の左手を包み込む。

「暖かい……」

（これを暖かいというのか。俺には、すごく熱いんだけどなあ）

その奥からも、身を乗り出した兄さんの右手が左手に触れた。

「不思議だな。俺は右手なのに、おまえは左手か。対になっているみたいだな」

「え？」

「おまえ、俺の手も冷たく感じるか？」

「いや……」

「同じくらいの温度同士では、熱いも冷たいも感じないだろう？」

「えっ？」

わけもわからなく、手をかえ右手で兄さんの右手に触れた。

（あつ……い）

「熱があるのか？」

「頼むから風邪を引いたのか？とかは聞かないでくれよ？」

「じゃあ……？」

「ここまで言えばわかってくれると思うんだが？」

手を離し、じっと二人を見つめる。

もしかしたら、この二人は杵島や相澤と同じ力を持っているとい

うのだろうか。

もしかしたら、俺もその同じような力を持っているかもしれない。もしかしたら、旅をはじめ、ここにたどり着いたのも、こうなると何かで決められているのだろうか。

（もしかして……駅に着いたときに感じた、行くのが当然な感覚はこの二人に会うため？）

「わかるよ。なんとなくだけど、俺も同じかもしれないってことだよね？」

「ああ」

「……俺がここにきたの、考え事があったからみたいなことだったろう？ それ、そのことなんだよ。メールみただろ？ あいつも、同じような力持ってて……」

「私は水だよ。辻さんのことだからどうせ、理解しようとしてあげなかったんでしょ？ こうやって力を見せられて動転した？」

そういつて両手を目の前にある海に向けて軽くのびし、何かを唱えるように静まった。と思った瞬間だった。

ザバーンと言うような大きな音を鳴らしながら、岩場よりも……おれらがどう必死に背伸びをしたって、どんな道具を使っただってうてい届かないくらいの水柱がのびたと思いきや、それは形を変えて空想の龍の形に似ていた。

それが自然現象じゃないことくらい考えなくったってわかった。

麻紀だ。

麻紀が今、オレらと向かい合っている龍を作り上げている。

「それとも、こんなの？」

次に口を開いたのは兄さんの方だった。

立ち上がった兄さんは、右腕をボールを投げるとき、軽く後ろに

降る腕のように振り上げ、一気に体重を前に持つていく。

ボールを無鉄砲に、力任せに投げるような振り方だった。

手は火玉に囲まれるようになったのも一瞬で、その火玉は形を変えて兄さんの目の前を力強い勢いで飛んでいく。

火玉は玉ではなく、同じように兄さんが火柱をたてたような形になるなり、龍というよりはもう少しからだがはつきりしているような、ドラゴンに似た姿になった。

それと麻紀の龍が絡み合い、仲がいいのを証明するように、一気に何とも言えない鳴き声に似たものを鳴らした。

ちらりと二人を見ると、麻紀は両手で、兄さんは右手だけであれらを操作しているようだった。

再び絡み合う龍たちを見るなり、今まで俺が悩んでいたことが、馬鹿馬鹿しく感じてきてしまう。

「でも……俺にはそんな力はない。ただ手が暖かいだけさ。その火を見ていると、懐かしい感じがするだけ。でも、俺には使えない」

「……おまえはガキか？」

「え？」

いきなり言ってきたのは、手をグーにしてドラゴンを握り消し、ため息を吐いて振り向く兄さん。

麻紀も手を下ろし、兄さんの方を見上げる。

「何度も試してみりゃいいんだよ。おまえに力があることは確実なんだよ」

「なっ何で言い切れるんだよ?!」

「今のこれを見ておまえはなにを感じた? 怖くて逃げようだなんて考えちゃいなかった。懐かしいと感じているようだし、叫ぶことすらしなかった」

「そっそれだけで?」

「それだけじゃない。俺が、なんだか主にあつたような感覚なんだ」「主?」

「人というのは、意識的にでも、無意識でも無自覚でも、権力や能

力が高い奴に集まる性質をもっているんだ。その無意識になったリーダー。それがおまえは、辻に感じたんだよ」

「俺が……リーダー？」

「……この力は、同じものが集まっただけじゃない。リーダーだけが集まったって意見が食い違い、まともに話し合いができなくて、争いはじめてしまう。そのためには力が必要となる。そしてその力が適わないと、自滅行為に走ってしまう。だから、同じものは消えてしまう。違う種類のものを集めなければいけないのさ」

「えっそれ……どう言うこと？」

震えた声で質問するのは麻紀だった。

何かを恐れているかのように、表情はすごく青ざめていた。

「麻紀には黙っていたんだけど、そういうとき。俺の主は辻さ。辻には未だ力は呼び出されていないみたいだけど、きつと目覚めたら俺は辻には適わない」

「もし、俺に力が目覚めたら……どうなるんだ？」

「きつと俺は、炎に食われる」

「そんな……！」

「辻……。おまえは目覚めるべきだ。おまえなら、何もかもを変えてくれそうな気がする。護りたいものをしっかりと近くに寄せておきな。力は、護りたいという思いの力に反応する」

食われることに恐れを持っていない目だ。

でも、俺の力が目覚めたって、兄さんが死ぬとは限らない。同じ力を必要とされないなら……。

「でも、兄さんが死ぬって言い切れるのか？ いなくなるべきは俺かもしれないだろ？」

「いや、わかるんだ……何となくだけど」

「……」

自信満々にいわれては言い返す言葉が見当たらなかった。  
護りたいものを傍に置く。

でも、もし今のことが本当なら、傍にいてくれないほうがいい。

護りたいほど誰にも気付かれない場所に隠しておきたい。近くに置いておいて、守り切れずに傷つけてしまうだなんていやだ。

だからなのだろうか。二人から離れた理由は、二人を危ない目に遭わせたくない。遭わせたくないから一緒にいることがつらかったのか。一緒にいたくないと思ったのか。

「……わかったよ。俺が二人から逃げてここにきた理由が」

「その理由はなんだ？ その二人を敵だとみなしたのか？」

「違う。二人が大事だから。すぐく失いたくない奴だったから、一緒に行動したくなかったんだ。だから考えるために来た」

「護るべきものが怖かったってことか？」

「……多分。これから危ない目に遭うかもしれないならよけいに」  
涙が出てきた。

杵島や相澤のことを考えると不安が舞い降りてきたようだ。

怖い。相澤が。

同時に兄さんと麻紀までも不安だった。



## 第10話

一人しか選べられないのなら、相澤はどうなるのだろうか。

どちらが食われる？

どちらが上か……。

こわかった。いずれはどちらかを失うのが。自分が失うよりも、麻紀か相澤、どちらかがいなくなってしまうのが。

どちらかなんて俺には選べられない。

麻紀や兄さんも大事に感じるから。

「悪いけど、俺、明日帰るよ」

「見つけたか？ 護りたいもの」

「違う。見つけていたんだ。でも、どちらと俺は選べられないから。兄さんが食われるなら俺が目覚めなければ、兄さんはそのままにいられるんだろう？」

「原理はたぶんあつてるだろうけど……」

「なあ、一つだけ聞いていいか？」

「なんだ？」

「その食われるって、そのリーダーと出くわさなければ、食われるとか……そういうのはないのか？」

「たぶん……でもそれははっきりと俺は知らないから、なんともこたえられないけど、会ってすぐに食われるわけじゃないみたいだし」「そっか……なら俺はやっぱ早く帰るべきみたいだ。早くあいつ

らと会って、できるだけ長く一緒にいるべきみたいだ」

「……なんとなくだけど、おまえが考えてること。わかったかもしれない」

「そうか」

伝わってくれて。わかってくれて素直にうれしい。

どちらとも失わないためには、会わない会わせないが一番いい。

もし会ってしまうのが運命ならば、それまでも、杵島や相澤の二人と長く一緒にいたい。

「辻さん……一つわかっていてほしいんだけど、そのリーダーっていうのは、もしかしたら特徴があると思うの」

「特徴が？」

「いやな話、私や辻さんには怪しい人があらわれたと思うの」  
怪しい人。赤髪のあの男の人

「あの人がリーダーの証なんじゃないかと思うの」

「それを証明するかのように、俺にはそれに値する人は現われなかった」

「あの人にも現われなかった」

「麻紀！」

意味ある言葉を麻紀が言った瞬間、兄はいきなり怒鳴った。

「いいから。ごめんねお兄ちゃん。ずっと私が立ち直れないでいるから、心配掛け続けたんだよね」

話が急に分からなくなった。

まったく分からないというわけではないけれど、なんとなく今までの会話上、一度誰かが何かの力に食われた。と知っている様子ではあった。

兄さんが、食われるだのなんだのって話をしていたとき、麻紀は何かつらそうに何も口を開かなかった。

でも、何かに区切りがついて、はつきりとしたかのように口を開いた。ということは、何かの覚悟を決めたのだろう。少なくとも俺にはそう見えた。

「お兄ちゃんには、二人で一人つてくらい、息ピッタリな親友がいた。私には、私もお兄ちゃんも愛してくれる彼氏がいた。って言うても同一人物で、私もお兄ちゃんもその人、優貴を愛した。」

でも、それは起きてはいけなことを起こした。

優貴は私と同じ力を持つて、すごく喜んでいた。でも、日々過ごすうちに優貴は私たちを必死に護る力が増した。そして力が安定するなり、その力は主である私よりも強くなってしまい消滅してしまった。その優貴にも現われなかったの」

「そして俺にも現われちゃいない。つまり、ここにいる主は二人」

「証が現われるのは、力を預かる前だと私は聞いた」

「誰に……？」

「その怪しい人に……」

その後俺は何ともいえなかった。

本当は何もなかったんじゃないのだろうか。

自分になんか力はなかったんじゃないか。

実際証拠なんてない。

力を発揮できたわけでも、発揮して良い気すらも消えてしまったのだから。

もし自意識過剰に感じたとして、自分が主だったら、兄さんをなくしてしまう。それだけはいやだと思ってしまうのだ。

力なんかなければ良い。力なんか目覚めなければ良い。

生きてはいけなと感じながら過ごした日々。どうして生まれてきてしまったのか。なんのために生きているのか。いったいいつ、俺には生きて良いという権利が生まれたのだろうか。

その後の話は、聞いていたが、ほとんどを聞き流してしまったような気がする。

明日、本当にに帰ることにした。そういつと、兄さんは少し淋しい顔をしていた。でも、その淋しい顔で言っただ。

「じゃあその帰る背中を眺めることができたら良いな」と。

その日、疲れた体を癒すように眠りに入った。

考え事をして眠れやしないだろうと思っていたというのに、そういう日に限って夢というものに急かされた。

いつのまにか夢の俺は、目をぱっちりあけて、今までにないような力強そうな炎に囲まれていた。

久しぶりだった。炎に囲まれる夢を見るのが。

いつもとは少し違う。そんな部分がありすぎる。

炎の恐怖を呼び起こすような大きさ、自分の体温があがっていくのがリアルな感覚に陥られる具合。しかし、一つだけ消えてはいけないものが、きれいに消えていったものがあつた。

罪悪感。

罪悪感というものの自体を忘れてしまったかのようにだ。

ただ茫然と炎を見つめる。

(なに……してたんだっけ?)

増えていくのは疑問ばかり。

「助けるよ……俺を」

(なに言ってるんだ?)

呪われた。あるいは操られたかのように、声は炎のなかにのまれていく。

『正気以外のおまえと話す気になれないな』

（正気？）

「……そうかよ」

そつと目蓋を閉じたと思えば、すぐに視界は自分の物にもどつた。  
「なにが……どうなってるんだよ？」

あまりにも今までとは違いすぎていて、夢のなかまでも混乱してしまう。

違う自分が居たことは確かだ。何となくそんな気はするけれど、あんなにもにらみつけるような瞳、力強い姿勢に力強い口調を出せるなんて。

ふと、小さい頃のことを思い出した。

近所にどうしようもないガキ大将がいた。

運悪く一人でいるときにそのガキ大将に目を付けられては、ああだこうだとわけのわからないようなことをいわれた。

なにをいわれたかなんて覚えていないが、馬鹿馬鹿しく思えてきて、何も反論しないでにらみつけたことがあつた。その時にいわれたショツクな言葉を、今でも覚えていた。

『おまえの目なんか怖くねえんだよ！』

子供の心の強がりだったのかも知れないけれど、自分には誰にも勝るものなかなかつたんだと思ひ知らされた気がした。

なのに、自分じゃない自分にはあんな顔ができるなんて……。

（力がほしい）

自分じゃない自分が羨ましかった。

だから、はじめてそう思えた。

力を貰ってどうするつもりなのかなんてものはわからない。でも、今みたいに自分じゃない自分が強いなんて許すことができない。

「なあ、正気な俺には力を貸してくれるのか？」

『貸すだ何ていっていない。正気じゃないおまえとは話す気になれなかったただけだ』

（屁理屈……）

「なら、一先ず話そう。貴方はなにもので、呼び起こすというのはなに？」

『話すというより質問攻めだな……。名前は教えられない。自然におまえが生み出すものだ』

「それは、俺が作っていいってこと？ 山田太郎とか田中勇作とか

……」

『さあな。いつかわかるさ。で？ 次の質問は、呼び起こすことか？ 俺を呼び起こせ』

（なんかてきとうな人だなあ……）

「どうやって？」

『心と名だ』

「こころとなだ？」

『……面倒な奴だな。心と名前だ』

ため息をつきながらも、こいつは馬鹿かというように額に手を当て、疲れ果てている様子が手に取るようにわかる。

「ああ。心ね……っていうか、名前って、教えてくれないとわからんって。結局質問、循環するばかりじゃないか」

ため息混じりに出たその言葉は、結果的な答えを導きだすための言葉にはなりそうもなかった。

会話として成り立っているのかも不安な会話でもあった。

『おまえは力がほしいか?』

その質問に、おれはぎゅっと唇を噛む。

ほしいというほど欲しがっている自分がない。

いらないうとはつきり言える自分もない。

(俺が力を得れば兄さんは……)

貰えるなら貰いたい。でも、誰かを犠牲にするくらいならいいし、使い道がない。

杵島や相澤をその力で守ることができれば頂いておきたい。  
「今の俺にはまだ決められない。誰かを犠牲にってしまうなら余計に。まだ、ただけど、その力はいらない。いつかは必要となるだろうから、しばらく保留ってことにしちゃダメかな?」

『タイミングをつかんだときに、また呼べ』

「うん。貴方は俺が話したいときによく出てくるもんね」  
それは途中で気付いた。

どうしてタイミングよく来てくれるのかを考えたとき、感付いた。  
なんとなく、自分はこの人を必要としているのかもしれないと……。  
護りたいものが増えた。

だから、そのすべてを護るためには、目覚める前に、今まで通りの生活に戻ればよい。

麻紀と相澤をあわせてはいけない。

どうなってしまうのかがわかっているのなら、それを超えるだけ。  
そんな簡単なことじゃなくなっちゃって、時期をのばすことはできるはずだ。

「じゃあ。ありがとうな麻紀さんに昌之さんまさゆき」

「ええ、約束を守れてよかったわ」

「約束？ なに？ おまえらなにコソコソと約束してたんだよ」

（そういえば、あの時いなかったんだっけ？）

予知夢じみたリアル感あるカラフルな夢を見た日の朝だった。

下に降りたら麻紀さんが朝ご飯の準備をしていた。

お兄さんはまだ起きていなく、二人きりになったときだった。帰りの時の話をしたとき、少しばかり頼み事をした。

「約束というより頼みごとだけだね。また空腹で倒れないためにも、おにぎりをね。頼んだんだよ」

「って言っても、結局寝ないんだったら倒れるだろ」

呆れるように昌之がそういった。でも、口元は、少しだけ頬笑んでいるような気がした。

「電車の中で倒れてるさ」

「乗り過ぎすなよ」

「……気を付けます。じゃ、気合い入れていつてきます」

「おう」

「気を付けて……」

歩きだしていた俺は、振り向かず片手をあげて別れを告げた。

金をやるからバスで行けといわれたが、お金を返しに来なくなるから、それだけは避けておきたかった。

でも一つだけ言葉を違えていたことに俺は気付かなかった。

「いつてきますってことは……また、来てくれるかな？」  
「だな」

（あいつのことだ……気にせず言った言葉なんだろうな。バカな奴）

ずっと再び頬笑んだその笑みは、誰も見ることはなかった。





## 第11話

（お金は余分に持っていくっていうのを学習したな……）

早朝に出たおかげか、終電にのることができ、家に着いたのは深夜だった。

母さんはもうすでに眠っており、玄関以外は真っ暗だった。

母の優しさだろう。

もともと休み中は自由だった。学校にいつて、問題さえ起こさなければそんなに文句を言わない、大雑把にできた家族だからこそ成せる遠出だった。

家の匂い。

家の床。

家具の配置。

なんだが、何十年も家に帰っていなかったかのような懐かしさを感じさせられる。

夏休みも、もうそろそろ終わりに近づいてきている。

その前には杵島達と話をしたい。

ぼんやりそんなことを思いながらソファに腰を下ろした。

「ただいま……我が家」

背もたれにだらしなく頭を乗せて天井を見る。

（短い期間にいろいろあると、その期間がすごく長く感じられるんだな……）

すごく眠くてすごく疲れた一日は、疲れすぎて、眠すぎてなにかすれば良いのかつかめない。

寝ればいいのかお風呂に入るべきか。

「風呂だな」

風呂ならば寝れるし休める。

と思い、風呂の様子を見に風呂場に行くなり……。

「……つめてえ」

風呂を追い焚きにする気もなく、ため息を吐いて部屋に入って布団に潜り込んだ。

約束どおり、今度は俺から杵島に連絡を取った。

『こっちに帰ってきたから、約束どおりメールします』

約束というのは、向こうにいるときに来たメールの返事だった。

「心の整理をするために遠出しています。帰ったらこっちから連絡します。それまで、待ってくれると嬉しいです」という約束。

わかってくれたのか、返事が来なかった。

『しばらく連絡を切ってごめん。心の整理がはつきりした……。つてはつきり言えるわけじゃないけど、旅先で色々あって、色々な人に出会って……』

杵島や相澤が力を持ったことには素直にびっくりしてて、別人になったような気がしてたけど、やっぱり杵島は杵島で、相澤は相澤であることはかわりないんだよね。

実際、二人の力は怖いよ？ でも、何かを守る力になるってことを考えたら、いい力なのかもって思ったら、俺にもほしくなってきた。

あの時、二人は俺にも力があるようなことだった気がするけど、本当に自分にはそんな力はないんだ。

でももし、俺が努力すれば手に入れられるものだったら、俺は頑張るから……だから、まだ俺には二人と話したり遊んだりできるかな？』

すつと目蓋を閉じ、そこまで打って、送信ボタンを押すのをためらった。

本当にこんな文でおかしくはないのだろうか。

力がほしいというのは、もっぱら嘘ではない。

でも、力を手に入れることには少しばかりためらいがある。

そんな心でこの文を送ってしまったていいのだろうか。

グチャグチャ考えているうちに、また旅に飛び出してしまいたい衝動が舞い起きる。

でも……。

（もう逃げたくない）

勇気を持って送信ボタンを押した。

一息着くなり、服を寝巻からいつもの私服に着替えた。

夏休みもあともう少し。その間に仲直りしておきたい。しておかなきゃいけないような気がする。

携帯をベッドに放置しておきながら部屋を出ようと、ドアノブに手を掛けたとき、ベッドに放置されていた携帯がバイブ音とともに初期設定である“着信音1”が鳴り響いた。

一瞬携帯以外のすべての時間がとまったような気がした。

振り向くこともできず、ただじつと携帯に背を向けたままの自分がいた。

はつと我に返ったときは、鳴ってから数秒たっていた。

すぐに回れ右をしてベッドに振り向いたと共に駆け出し、携帯をキャッチしたと同時にだらしなくベッドにダイブしていた。すぐに携帯を開いて通話に出る。

「……もしもし？」

『俺だけど、沁？　だよな』  
「うっうん」

この声は、相澤だった。

さつきは杵島にメールをしたはずなのに、どうして相澤が電話を  
寄越してきた。

しかし、携帯の画面を見るかぎり、携帯は杵島の物ではあるみた  
いだ。

『旅の感想、聞かせてくれないか？』

意外な言葉が飛んできて、素直に目を見開かせた。

「うん。でもその前にさ、今杵島もいるんだろう？ 電話じゃ料金  
もかかるからそっち行って話さない？ いや……二人に会いたいか  
ら行きたい。どこにいるか教えてくれない？」

『杵島んちきてる』

「そつか。なら、今から自転車で行く。途中でお菓子買っていくよ」  
『わかった。待ってる』

プチッと電話を切るなり、少しだけホッとするとともに、全財産  
を旅に費やしてお菓子を買い、お金がないことを思い出してしまった。  
電車片道4,950円。往復して残るお金は、100円。もとも  
と入っていた十円玉を足すと、120円のジュースが一本買えて、  
少しおつりが出る程度。

その料金から買えるお菓子を捜し出さなければいけない。

（つことは、お菓子一個程度か……）

少しがっかりしながらも、その価値のない財布を持って部屋を出  
た。

家を出たのはそれから数分後。

洗面所で、顔や歯のお手入れしたあとだった。

結局、普段自転車で二十分のところ、三十分かけて杵島の家に向  
かった。

途中、雲行きが怪しく、雨が降るんじゃないかと不安になる雲行  
きがつづいていた。

（そういえば、あの時も雨降ってたな）

ゆっくり指を伸ばし、呼び鈴をならそうとした瞬間、いきなり玄関の戸が開く。

驚いて目を見開いたまま目があったのは、杵島と、その奥にいる相澤だった。

「あつ……窓からくるの見えたから……そんなに驚かれるとは思わなかった」

「ああそつか。杵島の部屋道路側だっけ」

「ああ。とりあえず入って」

「うん」

（よかった。いつもの杵島だ）

もともと落ち着いている奴だからか、あまり動転動揺する姿を見かけない。

さすがに俺が驚いたのはびっくりした様子だ。

未だ一回二回程度しか来たことがないぶん、驚いて当然だ。

「相変わらず大きい家だよなあ」

「無駄にねえ。大きくて得したものは特にないな」

「損もないだろ？」

「まあな」

ほほえんで聞いた言葉に、やさしく笑みを浮かべて返してくれる杵島。

両親が、政治家や資産家だったり、大手企業会社の社長だったりする特別な仕事に就いているわけでもない。仕事の要領が良いらしく、社長や課長のように上の人に認められ、給料が高いらしく、太っ腹に大きな家を建てたらしい。

外見だけではなく、内部もいい素材の物を使っているが、特別金持ちだと言つの見せないような、控えめに整われた家具。

もともとはかなりの貧乏な家に育ったらしい両親は、それなりに節約方法を使っているらしい。

見栄を張らないのが、憎いや羨ましいという感情を出させない。いや、羨ましいには羨ましいが、皮肉さを持たせないというのか。階段を上り、杵島の部屋に入る。

三人くらい入っても、狭いとは思わなかった。

「あつそだ。これ、買ってきたお菓子……っっていつでも旅で使い果たしたお金でかったから、いいもんじゃないけど」

ガサガサッとビニール袋をならしながらも、杵島達にさしだした。「あまりにも良いものだったらもつたいなくて食べられないよ」なんてクスリと杵島が微笑んだ。

新しく持つてきていたコップに、杵島や相澤と同じ飲み物を相澤が注いでくれて、はいつと手渡される。

につこり頬笑んで、受け取った。

相澤は何度か来ているのか、何だかこの家になれているような様子だった。

「旅の話をしてくれないか？」

さつそくと、相澤が口を再び開いた。

「そうだね」

突発的に家を飛び出したこと。

電車に長い間揺られたこと。

計画性を持たなかった所為で、歩いて、何キロもある海に向かったこと。

ぶつ倒れたことに、その時出会ったキョウダイの事。

能力のことを抜き、あったことを事細かに説明した。

「途中で、すぐく二人に会いたくなかった。ホームシックって言うのかな？ 自分の居場所はどこなんだなって、しみじみ思わされた。

でも、それもまた嬉しかった。

メールが来たとき、まだ二人の傍にいても、許されるのかな？ っっておもって……だから帰ってきた。きっと、メールがこなかった

ら、二人のもとに帰ってくるのも、もう少し遅かったと思うんだ。  
すぐく、嬉しかった……。俺、まだ二人の傍にいても、許される  
のかな？」

すべて話し終わると、相澤達は、少しだけ嬉しそうな。それでも、  
少しだけ驚いたような瞳を見せていた。

ずっと頬笑み、二人はそっと近づいてきた。そして、挟むように  
俺を間にしてギュッと抱き締めてきた。

『当たり前だろ』

「もう、辻と連絡とれなくなるんじゃないかって不安だったんだぜ  
？」

「メールが返ってくるまで、何だか生きた心地がなかった。メー  
ルが返ってきて、本当に安心したんだから」

「生きた心地って……大げさな」

「大げさなんかじゃねえよ。俺たちはおまえが大事なんだってまぢ  
で」

相澤は、照れる様子も、格好つける様子もなしに言ってくる。

それは力に関係するのだろう。もしかしたら、二人が守りたいも  
のも、俺たち三人が関わってきているのかもしれない。

「二人はどうして力を手に入れたの？ なにが目的なのか……聞い  
てもいいか？」

『この関係を守るため』

「それ以外に理由なんて、あとからついてくると思う」

「辻は、この関係、いやか？」

相澤は、そう不安そうな顔になる。

「いやなんかじゃねえよ。俺だって、ずっとこのままいきたい」  
でも、いやな胸騒ぎばかりが騒めいて、落ち着きをなくしてしま  
いそうだ。

あの時夢に見た、平原に並ぶオレら。

その中に、杵島はいても、関係を保ちたいと主張する相澤が、存  
在していなかった。



もしその場に麻紀がいなくとも、相澤はやっぱりいいような気がする。

麻紀たちが言った言葉が本当ならば、その証というものが麻紀に  
いることにはかわりはないし、それがいるかぎり、その力を持った  
他の者は食われてしまう。否応なしに、相澤が麻紀にあった時点で、  
相澤は……。

それが怖くてこの二人のことを、あのキョウダイに伝えることは  
できなかった。それとともに、この二人に、キョウダイのことを伝  
えることはできなかった。

「辻。おまえは今、なにを恐れているんだ？」

ボーツと手前のテールブルの足一点だけを見つめていた俺に、杵島  
がやさしく聞いてくる。

この二人だつて、何も恐れていないわけがない。

「証……」

「え？」

「二人には、“証” って言葉だけで、なにが思いつく？」

それを聞いて、一番に反応したのは杵島だった。

ピクツと眉を一瞬ばかり揺らし、じつと見つめてくる。

「……辻。おまえは、旅をしてきて何を得たんだ？」

「先に質問したのは俺だよ？」

息をつく余裕も作らせない早さで、俺はきちんと言い直した。

もし杵島なら、話をナチュラルにずらすうとするだろうという予  
感はしていた。

でも、自分から話を振っておいて、この話をしてしまうと、自分  
に何かを確信してしまうようで不安になる。

じつと見つめあう状況で、最初に音を立てたのは杵島の喉だった。  
唾を飲み込む音。

何か覚悟を決めたんだろう。

「力の話をしても？」

「かまわない」

「証と言うのかどうかもわからないし、実際相澤にはいないらしいから違うとは思うんだが、俺たちの力には象徴があるんだと思うんだ。それがいつてる証のことかはわからない。実際関係ないかもしれないけど、その象徴は道しるべでもある。」

自分が、今何を聞きたいのか。今、何を知ろうと必死なのかを、聞かずともわかってくれて、自然と答えを出して、自分で開こうと手招きしてくれる奴が俺にはいる。

それが何の証なのかはわからないけど、排除しなければいけないものではないと言うのは確かだと思うんだ」

そこまで言くと、まだ言いたげなだけでも、悩んでいてはつきり言えないものがあるかのように、杵島の表情には迷いがあった。あまりそういうのを顔に出すタイプではないのに、こんなにもはつきり悩んで、迷っている杵島は新鮮だった。

とまった口は、たまに開いたり閉じたりが繰り返され、言葉は出てこない。少しだけ、テーブルに軽く乗せていたては、急かされているように、絡ませ無闇に遊ばされている。

いきなりその手が離れると、杵島は自分の頭を抱え込んだ。

「わかんないんだ。どうして相澤にいないものが、俺には存在しているのか」

そのことは、相澤も知っていたのか、特別驚いた様子はなく、ただじっと、俺でも杵島でもないどこか低めの一点を見つめていた。

杵島はきつと、はつきりとした何かがわかっていないだけであつて、なにとなくと言う想像はついている。断言できるわけではないが、ついていないようすではない。しかし、それをまだ、相澤に相談するしないかを迷いつつも、いまに至ってしまったかのようにだ。相談すべきではない。

直感的にそう思ったただけだが。

「杵島は、その存在するそれを恐れたり、敵視したりしてるか？」

「あ？ いや。それはないな。怖くもないし、敵っているのだって

……まあ、最初はさすがに……なあ？」

誰に聞くわけでもないその問い掛けに、戸惑う人はいない。

「でも、会った瞬間から、“怖い”っていう分類がある事すら吹き飛んでたな。怖いかって、今言われて思い出したような感じだからな」

きつと、俺が見た怪しい人と、杵島の言っているその人とは、違う人だというのはいわれなくてもなんとなくわかった。

でも、きつと種類は同じだろう。

いつものこの三人が、一人一人違うけれど、“人”と言う分類では同じ事だ。それと同じで、きつと杵島には証がついている。それを本人は、“怖い”ということを忘れていられるくらいに楽にしていられている。

そりや迷ったり悩んだりしたかもしれないが、きちんとそれに向き合って生活しているように見える。なのに俺はどうだ。

恐がっていないかのように見せておいて、内心ではかなりビクビクして、落ち着きというものを忘れかけてしまいそうになる。

受け入れることをせず、必死になってそれから解放されようとしている。自分の都合のいいように、事を進めていこうとする。でもそんなことはそう簡単にはできっこない。

何一つ受け入れることをせず、逃げてばかりで手に入るものなんて何一つない。あつて良いものではない。それはわかっているのだけれど、この三人の關係に、何かの邪魔が入ってきているような胸騒ぎがつづいている。

はつきりしたものではないから余計に怖いものだ。

## 第12話　スタート地点

恐れと恐怖が交ざりこみ、一気に何もかもを胸のどこかに入り込んできたような感覚が、ずっとしているのだ。

さっきの杵島の言葉に、嘘はまったくないだろう。

「あいつを“怖い”って言うちゃうと、自分のこの力まで“怖い”ってことになるんじゃないかな？」

「……杵島の言ってることはわかるよ。わかりすぎて怖い。……、相澤は、相澤はオレらと三人で居たいっておもう？」

杵島と肩をぶつけるように座って、俺とは向かい合っている状態で、いきなり話を振られて、少しばかりキョトンとしていた。でもそんな間抜けな顔はすぐに戻り、にやりと口元をあげて話に入る。

「俺が思わないとでも思うか？」

「この先どんな障害があったとしても？」

「障害なら乗り越えるなり耐えるなりできるだろ？」

「どれだけよじ登ったって、乗り越えられない壁なら？！」

色々と出てくる想像と妄想で、相澤を攻めていく。

相澤に麻紀を会わせなければいい。ただそれだけ。“それだけ”

が“こんなに”に。“ただ”が消え語尾の“も”になったとしても、どうにか耐え、どうにかして生きていこうとするそれがないかぎり、一緒に居ては危ないから。

今はまだ、“ただそれだけ”で済む話。でも、相澤のことも杵島のことも話していないからこそ、色々事情があってこっちにあの二人が会いに来てくれたら？ “こんなに”大変なことはないと思ってしまうかもしれない。

（こんなことになるなら、話しておくんだっただろうか……でも）

でも、キョウダイと二人が会うということは、もちろんその場に俺がいるかもしれない。

ということは、互いが互いに危ない状況に追い込まれる。

はつきりはまだしていないが、炎だろう俺の力と、キョウダイの兄の炎はきつと同じだ。

もし、会うときに俺が力を手に入れていたら？

相澤を失い兄を失う。

麻紀は、大事な人を失うのを体験してしまい、同時に違う近くの人も失う。同じく、俺は一気に大事な人を二人失うことになる。

そうなると思ったことではないだろうが、いつかはなってしまうというのが怖かった。

もしそうなったとすれば、麻紀は大事な人を失い、一人にさせてしまう。

そうなった場合、麻紀はどうなるのだろう。

（でも、まだ俺が炎だと。証を持っているとははつきり言えないよね？）

あれからあの人が夢に出てこない。

というか、夢自体を見なくなっていた。

「んーまあ、その時はそんな時考えるしかないんだろうけど、良い方向にもつてくよう努力でもチャレンジだって、なんだって命かけて頑張って乗り越えてみせるさ」

につこり笑って、優しく。でも、どこかに力を入れて語っていた。強い。

（やっぱり二人にはかなわないなあ）

つられたかのように、俺もにつこり笑って言う。

「うん。二人はやっぱ強いなあ。俺も置いてかれたくない。俺だって、二人みたいな力ないかもしれないけど、ないなりに頑張れることは人一倍頑張るよ」

まだ俺に力があるなんて決まったわけじゃない。

と言い張りたいのだが、いつだかに見た夢で俺は力が本当にあるんだらうという確信を持たされる夢をみていた。

俺じゃない“辻”が、必死に力ほしさにしがみついていた。

でもあれも、きっと俺のどこかの心なんだらう。

『うん』

杵島も相澤も、につこりと笑って頷いた。

「……って何でこいつと息ぴったりに一つ返事してんだらう俺……」  
「ったく。この空気ですれを言うか？　少しは場の空気を読んで、グツと我慢しろ。俺だっておまえと息が合うなんて最悪な気分なんだよ」

ケツと文句を遠慮なしに言う相澤と、冷静にそれを同意しながらも、いやそうな口を叩く杵島。

相変わらずで少しホツとした。

（そっか……。俺ももう覚悟を決めなきゃなんだな）

心のどこかで何度も思っていたことも、もう最後になってしまふ。家に着いた俺は、暗くなっていた部屋に電気を着けて、上着を脱いでベッドにダイブした。

仰向けになって左手を見る。

熱くなることが、たまにある。ということから、しょっちゅうあ

るようになり、いまに至っては熱くないときの体温を忘れるくらいだ。

だからこそ余計に、異変というものを感じてこなくなっていた。でもわかる。

頬に手を乗せると、左手だけが異様に熱い。手の中で発火しているかのように、あたたかいのだ。

「手の中で……」

ソツと離して両手を見つめる。

外側は、誰と大きな違いもない、細胞と筋肉、骨と皮でできた、やわらかいとも言いがたい男の手。

「うん……わかった。今の俺には何もできない。自分を知ることがらがスタート地点だったんだ」

きつとそれを知るために、キャンプに行き、突発的に旅に出た。

この変哲もない“辻”という皮を羽織った自分を、より良く知るために。

でも俺はその機会を見失っていた。すぐそこにある答えすら、見つけだせないほど、視界を自分で縮めていたんだ。

そしてきつと最後の猶豫を、神だか仏さんだかが与えてくれて、漸く見つけることが出来た。

杵島や相澤によって出来た、俺のスタート地点。

### 第13話

「おはよう」

「おう」

「あれ？ 杵島は？ 寝坊かな……」

珍しく杵島が朝の待ち合わせ場所にいない。

今日から学校があるというのに、初日から寝坊もしくは遅刻だろうか。

寝坊や遅れ自体杵島にはめずらしかった。いつもそれらをやるのは俺が相澤くらいだった。

「なんか不吉な予感が……」

そうゲッソリした顔で言うと、相澤もそれに倣うかのように、俺も同意してきた。

「なんか雨降りそうだな」

今は晴天夏日和。こんな日に言ってしまうのは、杵島が休んだせい。

『日頃のバカがいきなり天才になったときは雨が降る』きつとその真逆だってありえる事だろう。

日頃の天才が、いきなりバカになる。それとイコールで繋がってしまうのではと。

「何不吉そうな顔してんだバカもん」

「そうじゃなくて、してるんだよって……」

「杵島！」

「よう！ 遅れてわりいな」

なんて、なんでもなかったかのような顔をしているが、俺にはわかった。

遅れてきたのは、寝坊なんかじゃない。違うなにかがあっただと。

「まあ、間に合わないわけじゃねえし大丈夫だよ。早くいこー」



「ああ」

歩きだすとき、ちらりと杵島を見た。

先頭切って歩いている相澤の後ろ姿を、じっと淋しそうな顔で見つめている。

この顔を知っている。

この顔は、俺が旅先で出会った麻紀に、“証”の話を聞いたとき、海に反射して見えた自分の顔だ。

「杵島。今日の夜電話していいか？」

相澤に聞こえないように、ボソボソと杵島の耳元でそうつぶやく。

少し驚いた様子で振り返った顔は、助けがあつたかのように、半分安心したかのようなあいまいな表情だった。

放課後。

言つたとおり本当に雨が降ってきた。

これはただの偶然か。もしくは、本当に不吉な予感があつたのか。

「なんか前にもこんなことあつたよな」

「あつ？ ああ」

窓を開け、外をじっと眺めていった相澤に、動揺した声で答える杵島。

風もなく、まっすぐに力強く地面を叩きつける雨は、二人の声を俺の耳から遠ざけた。なんだか、テレビドラマのように、囲われた声を聞いているみたいだった。

これも何も考え事のせいだ。

「相澤今日は傘持ってきてないのか？」

「んなもんもってこねえよ。降るって知らないかぎり」

「こつという話良いかどうかわかんないけど、相澤の力で全部送り返

せないかな？ 空に」

不意にそんな提案を出してみるが、他の人から言わせてみれば、ただの怪奇現象だ。

「あつ。なら、オレらの周りにだけ水の膜張ろつか？ 地面から」

「ばあか。変に目立つぞ」

『杵島可愛げねえ！』

「んなもんいらねえつつかなんでだよ！」

相澤と息を合わせて言うなり、呆れたように杵島がそれに答える。確かに傘もささずに濡れないのは、ただの悪目立ちかもしれない。

「なら、三人で相合傘する？」

『きつつう』

俺の提案に二人して却下を出す。

（速答って……）

「んじゃ買いに行くかな」

よつこらせとオジサン臭く立ち上がる杵島に、相澤とともに立ち上がる。

「こういう時って、売店儲かるよな」

「確かに……」

結局別れるところまで来たら雨は止んだ。

水溜まりを避けながら家に着き、夕飯を待った。

電話をするのは、夕飯がおわったらと、一応迷惑にならない時間を目指すのがいつもの約束だった。なのにいま、いきなり電話が鳴った。

「はい？」

『ごめん。こんな時間に。今平気か？』

相手は杵島だ。

電話をするといったのは俺の方なのに、向こうから電話がくるのは、予想外だった。

「うん大丈夫だけど、どうかしたのか？」

『どうしたっていうか、電話するって辻がいつてたから、気になって待てなかったから。今話せるなら、気になるしダメかな？』

「うん。そっちが良い言うなら。うんとさ。あの時、相澤をじっと見つめてたから。至極淋しそうだったから、何か知ったのかな？  
って」

実際夕飯までに、その聞く質問の仕方をじっくり考えようと思っていたから、聞きたいことを聞かずに過ごしてしまいそうだった。

『あつたのかじゃなくて、知ったのか……か。ってことは、もしかしてオレらよりも辻のほうの色々知ってたりして』

「あつ……えつと……。二人がどんなことまで知ってるのかわかんなくって」

ベッドにきちんと座りなおし、少しだけ前かがみになり、膝に肘を乗せ、話に集中する。

『辻はどこまで知ってるの？』

「……杵島らしくないね。最初に質問したのは俺だ」

クスツと軽く聞こえるように微笑み、自分を主張する。

『そう、だったね。昨日の夢でね、カリフォンスって言うやつに会ったんだ。そいつは、“俺”の証なんだけど、そいつが言ったんだ。

「相澤は、偽の選ばれし者だ」って』

（偽の……選択者？）

麻紀と話していても、そんな単語は聞き覚えがなかった。

『もともと、辻のことは教えてくれたとしても、相澤のことは頑固に口を開かなかったんだ』

そこで杵島の言葉は途切れた。これは口を開いても良いぞ、という証拠なのだろうか。

今の杵島は少しだけ動揺し、微かに落ち着きがないだろう。すごく“偽の選択者”ということばがきになるが、今直球で聞くのは避

けたほうが良さそうだ。

「で、淋しそうな顔は、どうしてだったの？」

『……偽の選択者は、落とされるんだ。そうカリフォンスは言ったんだ』

「落とされる？」

『ああ。願ってもいない世界に、落とされ苦しみながら永遠なる命と戦うんだって』

（永遠なる命……戦う？）

もしかしたら、それは証を持たなかった者が行く末のことを言っているのだろうか。

麻紀の話にあった、優貴の話。

（世界へ行くって……“食われた”後の世界……！　じゃあ、偽の選択者って言うのは、証の現われなかったもののことか）

「んな話……聞いてないぞ」

電話中だというのも忘れて、つついそう呟いてしまった。

『なに？』

「あついや……」

『質問していいよな？　沝の知ってる話を聞きたい』

「うん。えっと……その、杵島達の力はダブっていることがある。

でも、その力同士集まっではいけない。ヒトは権力を争いはじめてしまうから。自分のほうが強いと……それと同じで、能力同士が強さを求め合ってしまう。それで中にはリーダーがいる。そのリーダーには、特別な“証”が手に入る。その証が現われるのは、力が手に入る前らしい。ってところかな？　でも一部はあいまいで本当のところはわからない。でも、一部は本当のことらしい」

麻紀から聞いた言葉を、少しばかり言い換えた形で説明した。

少しばかりの無言がつづく。

『沝には現われたのか？』

「……実際わからない。そのことを言っているのか、ただの一般人なのか。杵島が言ってたカリフォンスっていうのはだれ？」

『力の源。そいつ……カリフォンスの力が俺の力とイコールで繋ぐことができる存在。うるさいやつだけどね』

うれしそうな声。

力が手に入ったことについての喜びではなく、カリフォンスに執着していて、そのことについて喜びを覚えているみたいだ。

『だいたい俺の情報は、そいつ……カリフォンスから聞いた情報だ。辻が言う証つてのは、たぶんカリフォンスのことだと思う。で、その証（だろっ人）とその媒体……つまり、俺みたいに使う側は、力を使うとき、一心同体になくなる。意思や意気が合わないかぎり、“力”をうまく発揮・コントロールすることは難しい』

一心同体。意思・意気。

その言葉が思考を回した。

一番に今までのことを思い出したのは、俺が俺じゃないけれど、あれは俺である姿を見た夢。あの時の俺を、強いと思った。弱い自分なんて蚊帳の外に放り投げた。

だんだん思い出してきた。

あいつ……あの人は、話したいときにあらわれてくる、幻想・幻覚みたいな雰囲気醸し出している人。いや、声をしていた。

自分の都合よくしゃべってくれるんじゃないかと、解釈してしまっ  
いそうになる。

名前だって、山田太郎や、田中勇作などではなく、俺が名付ける  
といった。力を獲るにも名前が必要だといった。

「じゃあ、そのカリフォンスっていうのは、どうやって名を付けた  
？」

そう聞くと、耳元……電話の向こうで何かを置く音がした。その  
あと、ズズズッと飲み物を啜る音が聞こえてきた。

何か飲み物を飲んでるのだろう。

一呼吸おいてから、返事が来た。

『覚えてない。でも、教えてもらったわけでも、俺のセンスでもな  
い。そうだなあ……いうなら、不意に脳裏を走ったって感じかな

？』

「脳裏を？　ならそれを待つしかないのか……」

時間が掛かるかはわからない。

どれくらいの状態でそれがおきて、不意に聞き漏らしているかもしれない。でも、脳裏を走るものというのも、今は思い出せない。

『急ごうとしないで、辻。辻の言う“証”ってやつと、仲良くやっていけばいい。問題は、どちらが早く打ち解けるかだ。あとは、辻が打ち解ければいいのか、向こうが打ち解けるだけなのかだ。お互いをお互いに知り合うのがいいと思う』

「俺とあいつが……？　そっか。頑張ってみる。いや、心得ておくよ」

『うん。知りたいことや、わかんないところがあったら、できるだけ教えたいとは思ってるからさ』

「ありがとう」

『ああ。じゃあまた明日な』

そっいつて電話は切れた。

この会話を聞かれていても知らずに。

何もかも変わってしまったのは、夏休み前の、ある雨の日。

不意に降ってきた雨に、杵島と相合傘をした傘。相澤は予備の傘を持ってきていて、折畳み傘を女々ちゃんと名付けた。

（そっいえば、相澤はあの時持っていた傘……）

いったいどうしたのだろう。

今日は持つてこなかったし、今日だってあの日だって、雨が降る予兆はなかった。なのに、降るってわかっていないのにと相澤は言った。

なら、あの時はわかっていたのだろうか。降るということ。それともただの偶然か。

「偶然……だよな」

そう思い込み、すっかり忘れかけてしまった。

『報告します。あいつには、まだ力は宿っていない。むしろ、名前すらわかっていないようです』

『そうか』

籠もった声の主が、薄暗く、必要ある場所だけ、黄色に近い光で照らされながら答えた。

置かれている家具類は、ふるく、よく音を響かせる鉄のような素材でできていて、あまり目立たせないようになっていて。

この場に人がいるのは、籠もった声の主と、その主を守るもの数人のみ。

籠もった声の主のすぐ手前には、数量の水が入った入れ物。声はそこから報告をしていた。

『何か特別なことを？』

『いや……様子をみたいところだが、そうだな。おまえの意見を聴かせてくれないか？』

『私の……ですか？　そうですね。私の命もそう長くはつづきません。なので、今、少しでも自分達が危険な状況にあるということを示してみても？　まだあいつは力を得てはいない。しかし、力の使い道や、その力そのもののお手本を見えています。もしかしたら、状況を把握したとき、何かおもしろいことが起きるかもしれないと思うのですが』

『おもしろいことが……おまえは、あいつが覚醒したら、強いと思うか？』

『弱いと思います。もしくは、見かけ倒し……というんでしょうかね？　バカでかい能力があっても、それ相応の威力はないでしょう。あいつは、人を傷つけることなんかできない』

『そうか。あとはおまえに任せた。何かあつたらまたこちらから連絡を入れる』

『御意』

ぷつんと連絡は切れた。

その場には、籠もった声のみが響く。

『あいつには“証”をあつめることはできない……絶対に』

世界はだんだんと変わっていく。

どちらが間違いか、どちらが祝福できるか。

そんなこともまともに判断することが困難になるくらいに、団体と団体が別々の……対立する……曲がりくねった人間関係になりつつあった。

なにを滅ぼすためか。

なにを正当化するためか。

なにを覆すためか。

いったい誰がリーダーとなるべきなのか。

人と人が裏切り合い、人と人が信頼し合う。しかし、信頼して味方と思ってしまうても、片方は敵に繋がっているかもしれない。そこには信頼関係があり、裏切りを知らないかもしれない。しかし違うところに繋がった裏切りもあるかもしれない。

どこでどう繋がっていくのかわからないから世界は繋がりに、離れていつている。



## 第14話

それから日にちは、一日二日が過ぎたある日、ようやく覚悟というものがついたような気がした。

特に変わった何かがあつたわけではないが、じつと考えた末の覚悟だった。

相談できる相手には相談したし、あとは自分の勇氣と自信しだい。こんなに悩んだというのに、能力が備わっていなかったらと思うと、今までの自分に自信が無くなってくる。

「一つ問題が、名前なんだよなあ」

そのことを考えるたびに、冷たく重いため息が、口から出される。まったく良いものが出てこないし、杵島がいうには、名前は付けるものではないらしい。しかしあいつは教えてはくれないし、思いつきも閃きもしない。

ということは、とことんどうでもいいから質問攻めし、ほんの少しでもあの男のことを知る必要がある。知っておいて損することはないだろうし、暇つぶしにもなる。

「じゃあさつさと寝よ……」

ゴソゴソと布団のなかに潜り込み、枕元のリモコンで電気を消した。

余韻<sup>よいん</sup>として残っている電気の光が目に残る。

いざ寝ようとするときに限って、睡魔はまったく現れやしない。

ゴロゴロと、あつちをむいたりこつちをむいたり、質問事項を色々整理しながら、目を瞑った。

『呼び出しておきながらなにを考えている』

「えっ……ああ。あんたに恋人いるのかなあって、当初の質問から脱線してた」

なんだか、どうでも良いことも質問しようという考えがでてきては、色々考えた末、恋人まで脱線していた。

「で？ 恋人いるの？」

「いいから呼び出した理由は？」

「なんだよ。怒らなくったって……。じゃあ聞くけど、あなた、男だよな？ っていうか、名前を知るまであんたで通すの面倒だからさ、仮名として、山田くんって言わせてもらっよ？」

偽名でも仮名でも、何か呼び方がないと、呼ぶのに苦労する。

たぶん一応年上だろうし。

「山田くんさ、性別は男であってるの？」

床という床はないが、今立っているのだろう態勢から、ゆっくりと座り込んだ。

「ああ」

「……」

「……？」

「えっそれだけ？」

「なにがだ？」

「なんかもつと付け足してくれるとかいう親切心はないわけ？ 聞き返すとかさ」

「訛。性別は男。趣味は寝ること。特技は人を振り回すこと。好きなものは、とりあえず不思議なもの。嫌いなものは、不思議なものに関われないこと。大体こういうことは知っているんだ。なにを聞き返せというんだ？」

すらすらと何も関心がないような口調で言う。

もともと干渉するタイプではないのだろうか。

「何でそこまで知ってるんだよ」

「いつも俺はおまえを見ている」

「ストーリー？」

「……」

ため息混じりの無言。

呆れていることなんて、改めて聞かなくなつたつてわかつたものだ。  
「いったい山田くんは、何者なの？俺の何？」

『俺はおまえの証』

“証”。麻紀や、お兄ちゃんが言っていた証。でも、その証の意味が、今まで考えていたような意味とは異なっているような気がする。

能力の“証”と俺の“証”。

「俺の……？」

『他に聞きたいことは？』

意味を答えないかのように、次へと話を変えようとする。

これは、きつと辻である俺が、知っていないといけないものなのだろう。

「あの雨の日、家の前に現れたのは、お前？」

『ああ』

「どうしてあんなところにいた？ どうして……雨が降った？」  
不思議すぎた。

テレビでは、快晴。雨が降るような様子はないと、笑顔で言っていた。それと、あんなことを言った相澤が傘を持っていた。

『あそこにいたのは、今おまえが危険な状態にいるのを気付かせるためだった。しかし、あの雨は誤算だった。きつと何者かが邪魔をした』

「何者か……？」

『そこまで突き止めることはできなかったが』

鈍く重い声質。この声でわかる。

今この人は、すごく悔しいんだ。

「どうして？」

『……炎は何に弱いかわかるか？』

「……水……雨か！」

『……力が足りなすぎた』

悔しいのは、自分の無力さ。

きつと誰のせいにすることも、できない、しない生き方をしていたのだろう。

誰のせいにもできないことは多くある。明らかに自分のせいだったり、そうなる運命だということわかっていたりすること。

自分ではどうしようもできない苦しさを、ずっと苦しんでいるのだろうか。

「だったら、こうやって夢のなかに現れればよかった」

『夢を見ているとき、おまえが落ち着いているときに、一度でもあったか？』

「……」

『直接会うことで、おまえは俺のことを気にするようになる。違つか？』

「うん。きつと、夢だったら、所詮夢だって流していたかも。もしかして、俺が倒れたのも……あんたのせいじゃなくて、雨……」

『そうだ』

別にこの人のせいにすべてしていたわけではないが、関係しているのではないかとは思っていた。しかしそれは、直接的に俺に関わっていた。

しかし誤算といった。あの時、いきなり雨が降った。なのに、相澤は傘を持ってきた。降ることを知っていたかのように……。

雨を降らせるといふ自然現象に関係するようなことまでもやってしまえるのだろうか。

「あなたと俺は、同体？」

『ああ』

「俺が怪我をしたとき、おまえも同じような傷がある？」

『ああ』

「じゃあどうして姿は違う？ どうして姿を現さない？」

『おまえは俺の姿を見ようとはしていない』

「……」

別に見えないならそれで良いと、諦めることをするまえに、願う

ことすらしなかった。

姿を見せてはくれないものだとおもっていたから。

「うん。そうだね。今は俺、まだ顔をあわせたくないのかもしれない」

『知ってる』

「山田くん、本当に何でも知ってるんだね？」

『団体だからな』

「知ってる？ 感情までわかつちやえるのは、一心団体っていうんだよ？」

『……知ってる』

目を覚ましたときは、目覚ましになる前だった。

まだ寝ていたいという余韻は残ってはいない。目覚めは、まあまあいい気分だ。

名前を知ったわけではない。ただ、最初にしては順調に話が進んだ気がする。

一心団体。

今考えていることも、何もかも気付かれていたなら話は早い。いつかは、何かをわかりあえるかもしれない。

（でも一心団体って、意見の相違はないのかな？）

一心団体といったって、相違があっては一心団体とはいわないのではないのだろうか。

今はまだ相違はないかもしれないが、これからあるかもしれない。でも、向こうは俺のことをわかっていても、こっちは向こうのことを何一つわかっていないといえるようなものだし、考えているこ

となどまったくだ。

一心同体というよりは、向こうが俺のことを一方的に感じ取れるだけなのではないのだろうか。

一心同体といったのは俺だ。でも、違うのかもしれないと気付いてしまった。

きっと俺があの人、山田くんを見ようとしないと同じように、山田くんの心までを見ようとはしていないのだろうか。

きっと知ろうとすれば、知ることができるのかもしれない。

考え込んでいるとき、いきなり携帯から音楽が流れた。

目覚ました。

鳴る前に起きてしまったのだから、鳴って当たり前だというのに、肩がびくつとびくつした。

携帯に手を伸ばし、恐る恐る目覚ましを止めた。

（準備するか）

着替えようと、まずはじめにカーテンをあけた。しかし、次に進むことなく、俺はその状態で固まった。

「……雨？」

『……炎は何に弱いかわかるか？』

そう聞かれたとき、俺は、水・雨と答えた。

（雨に中のは極力避けたほうが良いな……）

この前みたいに倒れるとは考えにくいが、あとであの山田くんに何かを言われるのもいやだ。

でも、雨なんかに負けていたら、今までの風呂はどうだったのだろうか。

（故意的な雨しか効かないとかだったら良いのに）

傘さえあれば、雨はたいてい防ぐことはできる。

もし、乱闘することになったら、俺は反射的に傘を選ぶだろうか。  
(存在を忘れてるだろうな)

雨が降れば、一面は傘でうめられるか、水溜まり、もしくはまったく人気がなくなってしまう。

人が多ければ、傘が重なり合い、すごく歩きにくいという状態になり、人と人との間があく。進むスピードも遅くなり、いらいらしてくる。

そして足取りが少なくなるのを待つかのように、雨宿りを口実にカフェや喫茶店に入る。

もしかしたら、そこで何かの出会いが起きるかもしれない。

もしかしたら、自分と同じように立ち寄った人に出会えるかもしれないと感じた放課後だった。

一人で放課後フラフラ歩くのは慣れない。

なんだか、杵島と相澤は、二人で話したいことがあるらしく、先に帰ってくれといわれてしまった。

どちらかといえば、杵島から誘ったような様子が見当たれた。

(仲間外れかあ)

こんなことは今までなかった。

二人で話していたり会っていたりすることはあっても、放課後まで一人にさせられるのは初めてだ。

「暇くさいなあ」

暇覚悟で喫茶店に入ったけれど、まさかこんなにもはっきり暇になるのは淋しい。

頼んで出されたオレンジジュースにストローを刺す。

“刺した”というような手応えが感じられないのも無理はない。

刺したまま回してみても、カラカラと氷が重なり、ガラスのコップと擦れ合う音が響く。

それだけだ。

ストローをくわえてなかのものを吸い上げる。

甘酸っぱい味が口のなかに広がっていく。

それもすべて当たり前なこと。

当たり前なことが当たり前前に過ぎていく。だからこそ当たり前なのだ。

なのに俺の中には、“俺の中に”いて当たり前なものがある。

その“当たり前”は、誰が言ったのだろうか。

そつと目蓋をおろす。

このまま眠ってしまったら、その“当たり前”の存在に出会うことができる。

すぐそこにある窓の向こうには、大粒の雨がコンクリートにむかって叩くように降っている。音も聞こえる。

止む様子はまだ見当たらない。むしろ、余計に強くなってきているような気がする。その反面、人の混み具合は、それなり減ってきてはいた。

この喫茶店に向かい合うかのように、国道を挟んである眼鏡屋。

よくCMで見かける有名な眼鏡店だ。

眼鏡の女王。

フレームの柄的にも、女性が多く利用し、好評である。

海外のほうにも出店しているという噂が流れているが、本来のところはわからない。

わかるうとしない。

窓とは逆の腕の肘を乗せ、立たせてはその手のひらに頬を乗せ、窓の外を眺めるふりをする。

そのまま、ゆっくりと目蓋をおろす。

（山田くん……）

眠っていないけど、現われてくれるだろうか。願いながら暗やみを探した。

知りたいけどわかってうとしない。聞こうとしない。

知って損をするのを恐れている。その反面、好奇心は遠慮せずに



あらわれる。

知らないで損をするのを恐れて、知って損をするのを恐れている。

矛盾。

山田くんのことを知らない。知って、何かを抱えてしまったり、崩れてしまうのを恐れている。

『知りたいなら聞けばいい。知って後悔するなら、知らないふりをすればいい』

「あつ山田くん……山田くんは卑怯だ」

『は？』

「聞かなくても答えをくれる」

『今の答えか？』

いつもどおりの暗やみ。

（だんだんここが安心するような場所となっていく）

「変なの」

『いいことじゃないのか？』

くすつと微笑んで言ったその言葉にそう答える。

「口に出してないことに答えないで貰いたいな」

『それはすまない』

心がわかるというのも、いいものなのか悪いものなのか。

「もつと謝れよ」

『なにを考えているのかはわかるんだ。一人で悩んでないで、俺にでも言えばいい。だから呼んだんだろ？』

「うん。一人じゃ淋しいや」

相澤や杵島においてかれるのは慣れない。

『それだけか？』

「だめ？ でも変だよねえ。前に一人で旅に出たっていうのに、いまさら一人が淋しいんだよ？ バカみたい」

『寂しがってなにが悪い？ 人は淋しがる動物だろう？』

「淋しがる動物は兎だよーサーギー！」

「人が淋しがるのはいけないことか？」

「いつ……いけなくはないけどさー」

何だかテンポが狂う。

人間だろくに、スイッチがONになりたてのロボットのような……

……いや、生まれた赤ちゃんが、いきなり大人になってしまつて、基本的なことを知らない人みたいだ。

「調子狂う」

調子が狂う？

いや、違う。

（頭痛がする）

だ。

「俺は何ともないが？」

「あーもー無意味に心を読むな！」

不安だ。すぐく。

一心同体だとかめかしたが、まったくの別人にしか感じられなくなつてきた。

ゆつくりと目蓋を瞑る。

目蓋を開いても真つ暗に近いが、その暗さを余計に暗くし、自分の世界に入るように……。

感じ取る。

目には見えていないものを、目で見ようだなんて思う人は少ないし、目には見えていないものを信じる人は少ない。それに、その存在を知らないものもある。でも、今の俺には感じ取り、知らなければならぬものがある。

大きい大事なものから逃げるには、何か計画を立てなければいけない。

大事なものは、警察だつて人生だつてなんだつていい。逃げ切らなければならぬものは、その逃げ切る方法を考えなければならぬ。

そしてその方法や計画の一つの項目には、逃げ切る期間も必要とすれば尚善いだろう。

だから今の俺にも期間を作らなければいけない。

自分の気持ちから逃げ続ける期間を。

逃げ切つてはいけない。逃げ隠れしてはいけない。

逃げ続けなければいけなかった。

でも、いつかは自分の気持ちと向かい合わなければいけない。

『なにを考えている？』

不意に黙っていた山田くんが口を開いた。いや、閉じていたのかもわからないが。

「山田くんにはわからないこと」

聞いてくるということはわからないのだろう。

今の気持ちは、自分にしかわからないことだから。

覚悟と勇気と自信。

思い描く。自分の目の前に人があらわれるシルエットを。

今はまだ、山田くんの姿がわからない。名前も、まったくわからない。

だから、わからないといけない。知らないといけない。いや、知らなければならぬ。

「山田くんはさ」

『なんだ？』

「俺が呼んでないときはなにをしているの？ 暇じゃ、ないの？」

『なに……っ』

不意に聞かれた質問を答えるかのように、ぴたりと言葉が消えた。何か聞いてはいけないことを聞いてしまったのかと不安になる、

長い沈黙が流れていく。

「もしかして、何もしなさすぎて、答えられなかったりして」

冗談混じりに、笑いながらそういつてやると、しみじみとした返

事が帰ってくる。

『ああそうなのかもしれない。よく、覚えていない』

「え……」

『おまえがなにをしたのかは覚えてはいるが、自分のこととなると全然』

「まっまじかよ……」

そんなことを言われると、正直困る。

「あなたに過去はあった？」

記憶の片隅にでもいい。なにか、俺以外の記憶というものが、一つでもあつてほしい。

どうしてかなんて、わからないが。

『いや……そうだな。ないに等しいが、これは言っておこう。与えられた宿命……いや、使命は覚えている。もつといえば、使命の下で生きている』

「使命……そう聞くと、縛られて息苦しいイメージだな」

『いや、そんなことはないが？』

「でもその使命って誰が下したの？」

『誰が？ それは必要なのか？』

「は？」

その質問の意味を、理解することができずに、裏返る声をだしてしまった。

『おまえが生まれたときに俺は存在した。その時から必然的に持っていた使命だ。いや、やっぱり宿命のような言葉がしっくりくる』

自分一人で納得されても、俺にはわからない。

宿命と使命の違いがわからない。

どちらも縛られ、窮屈なことには変わりが無い。

「その使命の内容は？」

『辻を育てることだ。身も、心も』

「そつ育てるって……証なんだよね？ だったら、証としてのなにか、目標とか目的とかはないわけ？」

『そんなものが必要なのか？ 目標が必要ならば、おまえが作ればいい。おまえが、その目標に向かって頑張らせればいい』

「うっわ……他人事お」

『そうか？』

「うん。でもいいや」

『？』

「それこそ山田くんらしいしね」

『いい加減、その山田くんっていうのはやめにしないか？』

「ん？ そうだね」

そういつて、なぜか自然と口元がゆるみ、ほほ笑みがこぼれた。

「じゃあ、田中くん！」

『……はあー……』

「ちよっ何その重っ苦しいため息！」

ひどいとブーブー子供みたいに、口を尖らせては、不安を口にす  
る。

はじめてみたときのこの人の姿を思い浮べた。

赤い髪で、長くて肩辺りというくらい。少しチャラチャラしていてもおかしくない容姿なのに、少しもチャラチャラしてなくて。怖いイメージを与える目付きだけど、何だか淋しそうで。

身長は高くて、なぞを深めるマントをまいていて。

贅肉は無さそうに見えるけど、ガリガリ体質でもなさそうで理想的な体型。

ゆっくりと目蓋を閉じるようにして、再び目を開く。そこに、田中くんがいるのを願って。

「ようやく見れた」

『ついに見られた？』

「一回会ってるからかな？」

『かもな』

目を閉じ、うっすらと微笑むそのやさしい口元。

その人の名は、まだ呼ぶことを認められない気がした。

だからまだ呼ばない。まだ。

## 第15話

「ま……お客様」

遠いところからすぐ近くへ寄ってきたかのような声に、ハッと目が覚めた。

「あ……」

「お客様具合でも？」

顔を上げれば、名前も顔も知らない店員が、心配そうな顔をしていた。

「いえ、すみませんボーツと考え事をしてたら寝てしまっていたみたいで」

必死に言い訳を作りながらも、急いで店を出た。

激しい雨が降っていたことをすっかり忘れていて、急いで傘をさす。

（真っすぐ帰ろう……）

そもそも、なぜ寄り道なんかしてまであの人を呼び出したのだろうか。

家に帰り、のんびり寝てしまおうという選択肢は無かったのだろうか。

「俺って……バカ？」

「これ……」

のぎざか あゆむ  
乃木坂歩。15才。中学三年。

髪が黒くて、耳辺りのサイドは多少長い。といつても、肩にはあたらなくらいの後ろ髪。眼鏡を掛けていて、まだすこし幼い顔つき。

性格、生意気とよく言われる。

生意気だという自覚はまったく無い。と思ひこもつとしている。思っていることを、素直に口に出しているだけであつて、周りの言葉に惑わされる人は、ただのお人好しだという性格をしている。

そんな歩が、夏休みが明けたある雨の日の学校帰り。道端で、きれいなエメラルドグリーンのネックレスを見つけた。

ただ、何だかそのネックレスが、見覚えがあるネックレスのような気がしてならない。しかも、とても大切な。大事なものだという記憶があつた。でも、どこで見たことがあるのか、誰が持っていたのかという記憶は、まったくなかった。

しゃがんで右手で拾つてみても、まったく思い出せずに。

「交番に届けたほうがいいのか？」

このままもう一度あつた場所に置いておくという選択肢はない。

あるのは、自分のポケットにしまつていいのかだ。

雨にあたつて濡れているものを右ポケットにしまつたとき、少しだけポケットが重く感じた。

立ち上がつて止みそうもない空を見た。

「あつ。虹だよお兄ちゃん」

海岸の岩場に座っている女の子は、晴天の空を見上げてその見えた虹を指差す。



返ってくる返事はない。

いつもと変わらないしおの匂い。

波は穏やかに流れる。

「お兄ちゃん、今ごろあの人、なにしてるんだろっ?」

それでも返事は返ってこない。

「こっちは、特別かわったことはないですよー」

透き通る声が、誰も聞いてくれない海へと響いていった。

「梓あぶない」

という声が聞こえた瞬間、ドテツとベシヤツという、思いつきり水溜まりに転んだ音がした。

足を止め、聞こえたほうをむく。そこには、髪の色素が少し抜けたショートヘアーの女の子が、ベツチャリ濡れた制服とともに起き上がるうとしていた。

「あああべちゃべちゃ……」

さっき叫んだ声と同じ声。

起き上がる手伝いをしているのは、染めましたという茶髪のショート。転んだ子と同じ制服を着ていた。

「どうしょおー」

なんて、いまにでも泣きだしそうなその転んだ女の子。どこかで見たことがある気がする。

現実にはない。かといって、写真やテレビとかではないと思うのだ。

（どこでだったっけ?）

じっとその子を見つめていると、不意に目が合ってしまった。

（この目だ）

この、甘えるのが上手そうな瞳。

その、助けている子ではない女の子と一緒に居たというイメージがある。

思い出せない不安感。

見られたのが恥ずかしいと思ったのか、スッと顔を背けた。助けた子は特に何も気付かなかったのか、急いでハンカチが何かで拭いて上げていた。

とても仲が良い様子。

面倒見の良い友達と、おっちょこちょいな女の子。対でいるから、息が合う。

「羨ましいかもな」

三人でいるのがつまらないとか、いやだというわけではない。ただ、たまに疎外感がある。

「それを、不満というのか」

どうしても思い出せなかった。

どこで、あの子をみたのか。

もう一度、女の子はこっちをみた。次は、俺から目をそらした。

「辻！」

「え？」

後ろから杵島の声がした。

後ろを振り向くと、杵島が不思議そうな顔をしていた。

「先に帰ってたんじゃないかったのか？ それとも迷った？」

（そっか……こっちは杵島の帰るほうか）

「迷ったって……子供じゃないってば」

「じゃあどこに行く気だったんだ？」

「あっ……」

ニヤニヤしている杵島の口元が、すごく相澤のなにか企んでいるような口元にすごく似ていた。

確かに、今自宅に帰ろうとしていた。

考え事をしていたから、帰る方向を間違えてしまった。

「うっ……」

何という言い訳も思い浮かばなく、ソロツと先ほど女子高生が転んでいたほうに視線を向けた。

すると、不意に目に入ってきたチカツと光ったものが落ちていた。ゆっくりと足をすすめる。

「止？」

近づいてしゃがんでみると、そこにはきれいなエメラルドグリーンのネックレスが落ちていた。

「ネックレス？」

「さっき女の子がここで転んでてさ、その子のかな？」

「どうする？」

「んー放っておく。どこの学校かわかんなかったから、届けようないし、もし無いのに気付いたら戻ってくるだろうし」

「ふうん」

体を起こし、杵島と別れて家に帰る。

なんだか、ネックレスをみた瞬間、やっぱりあの女子高生をどこかでみた記憶があるというのが頭から余計に離れなくなってしまった。

「これ……やっぱり青山梓か」

家に帰り、ポケットにいれたネックレスを取出し、昔のアルバムを開く。

自分と同じ顔をした男の子の隣に、甘えたようにべったりくっつく女の姿。その女の首に下がっているものは、今手元にあるのと同じネックレスだった。

青山梓。

従姉だ。一個上で、甘えん坊で。一人にさせては不安なイメージを持たせる女。

歩の、大っ嫌いなタイプだった。

でも……。

「ちくしょうー！！ ちくしょうちくしょうちくしょうー！！」

思いつきり叫びながら、手に持っていたネックレスを壁にむかつて投げつけた。

「ちくしょう……わたる渉……」

家に帰り、すぐに着替えてベッドに仰向けになった。

（思い出せ……どこで見たことがある？）

歩いていても、そればかり考えていた。

「あー！ 脳の小ささが憎いー！ 記憶力こんなに無いのかよーだ  
れか脳みそ割って、過去を読んでくれないかなあ？」

（俺の脳よー働けえ）

「ん？ 記憶？ 読む？」

何か違うことを思い出せそうな予感がする。何か頼りになる……。  
「あつー！！」

思い起こせた一つ。

あのなぞの山田くんが言っていた。『おまえがなにをしたのかは  
覚えてはいるが……』ということば。

「お！ なら覚えていてくれるのかな？」

だんだん楽しくなってきた。

目を瞑り、山田くんを呼び起こす。

『なんだ？』

「なんだ？ って……どうせわかってるくせに」

『まあな』

「むかつくー！」

『わけわからん』

「なんだか、言わなくてもわかられてしまうというのが、悔しくてたまらない。」

「で、覚えてる？ あの女の子、どこで見たことがあるのか」

『……いや、ない。一つだけ言うておくが、俺はおまえが独自に見る“夢”は、俺が見せようとする夢以外、俺の記憶には刻まれないだから、夢で出会ったとか、ただの思い過しとか。もしくは、一目惚れでもしたのではないか？』

「ひっ一目惚れはないけど……。そっかぁ、夢は覚えてくれてないのか。でも、最近夢自体見ないんだよね」

『なら思い過しだろう？』

「思い過しだったら良いけどって……、さっき、なんていった？」

『思い過しだろう』

「その前くらい！」

『一目惚れでもしたのではないか？』

「もつと前！」

『どこだ？』

「俺が見せようとする夢だか何だかって言っただとところ！ どういう意味？」

夢というのは、見せることができるものだっただろうか。

そもそも、夢はどうやってみることができるのか。夢の原理がわからない。

『覚えているだろう？ おまえが毎日同じような夢を見ること』

「あああの日の……そっいやぁ最近見てないな」

『あれは、一応俺が見せていたようなものだ』

「ようなつて……え！？ それ本当？」

『ああ』

「そっかぁ。でも、何で最近は見なくなっただんだ？」

『もう必要性が無いからな』

「どういうこと？」

『おまえはもう、俺の存在を知ったからだ』

「あれは知らせるためだったの？」

『そんなものだ』

「あいまいな返事だなあ」

『まあ、理由は色々あるからな』

「あーもう気になる言い方だなあ!!」

だだをこねるように、両手両足バタバタと暴れてみせた。

「どうしたんだろう……波が騒いでる。サフィン、何か感じる？」

『かすかに……』

一人しか居ないその海岸に、その子にしか聞こえない返事が聞こえた。

「いやな予感がある。どうすればいい？」

『……』

「そう……」

『報告します』

不気味な薄暗さに囲まれている一部屋に声が響き渡る。

『今日、片割れと話しました。いま、この世界で何が起きているの』

か。なんのために私たちみたいに、力を持った人が現れてきたのか。しかも、証を持たないものが現れるのか』

『結論は』

『……私たちにもわからない。でした』

『役立たず』

『もっもっしわけありません！ でも、知る手立てがありません』  
暗き部屋に、パリーンと響くガラスの音。

ガラスが擦り合いながら落ちる音と、水滴の音。

『もういい。他に報告は』

『えっと、“あいつ”の精神状態が、だんだんと落ち着いてきていること。ですね』

『落ち着いてきているだと？』

『はい。いままで不思議がっていた感情や、不安感がだんだんと薄れてきています』

『……この前言っていたよな』

『はい？』

『危険な状態であることを感じさせるだったか何だったか』

『はっはあ……』

『すぐに……いや、明日からだ。明日、必ず“あのガキ”の精神状態を崩せ』

『御意』

パリーン！

「あっちゃあ……」

お碗が割れる音。

ご飯を注ぐと茶碗を出したときだった。ついつい手が滑って落としてしまったのだ。

「転ぶわ割るわ……まだ何か起きそうで怖いよー」

しゃがんで跳んだ破片を軽く集めようとした。

「あれ？」

いつもなら、チャラツと音が鳴り、首から一つのネックレスが邪魔をする。それが、鳴らないのだ。

無いはずが無いと、首の周りを触ってみる。

「ない……ない！」

いくら探しても、外した記憶の無いネックレスが無い。

「最悪ー！！……今日絶対厄日だ！どこではずれたんだろう……」

必死に今日起きたことを思い出してみる。

「転んだときかな……」

お碗を片付けるのを放り投げ、急いで家を飛び出す。

雨が降っていることなんて気にせず、雨に濡れながらも足をすめる。

水溜まりが足に掛かる。そんなことも気になんて掛けない。ただ、失ったエメラルドグリーンのネックレスだけを求めて走った。

「……許せない……」

投げたネックレスをつかみなおし、傘を持って家を飛び出す。

溜まった水溜まりを避けるように走りながらも、丁度来たバスに乗る。

向かう先は、渉の場所。

「ない……ない……ないよお……」



水溜まりに座り込み、地面に手を付ける。

「どうしよう……ごめんね、ごめん……」

頬を流れる水滴。すでに雨が涙かわからなくなってきた。

ただ周りは、静かに雨が地面にあたるだけ。

「ねえ、どうすれば良いと思う？ ……うん。そうだね、知らせ

に行かなきゃいけないよね……ありがとう」

独り言のようなことを言いながら、体を起こし立ち上がる。

雨を気にせず再び走り出す。

涙と雨に濡らした全身を余計に濡らしながら。

## 第16話

「なあ、俺のすべきことって何だと思う」

返事の帰ってこない、雨の墓場。

「どうするべきだったんだろう……ごめんね渉」

耳元には、傘に当たる雨の音がうるさく響いていた。

止む様子も見当たらない、力強い雨。それと、水溜まりを走る足音。その音は、次第にゆつくりとなって、ぴたりと止まった。

「歩……ちゃん」

女の声。

ゆつくりと向いてみれば、雨に濡れた女の姿。

「渉は優しいから。怒らないと思う……渉は。ね」

チャラツとチェーンが擦れる音を鳴らしながらネックレスを見せ  
てみる。

「あつ……それ」

目的のネックレスが、不意に目の前に現われて、思わず手を伸ばす。

しかし、それはまだ届く位置ではなかった。

「雨に濡れてでも探したかった？」

「大事なものだもん……」

「なのに捨てるんだ？」

「捨てたんじゃないもん……転んじやって」

「そうやって、ドジな所を装うのはなに？　そうやって男引っ掛けるつもり？　渉の時みたいに」

「ちがつ！　装ってるわけじゃ……！」

必死に抵抗しようと思ったが、歩が目を逸らしたことにより、その言葉を繋げることができなかった。

「渉はさ、俺が殺した」

「ちつちがつ」

「違うない！……俺が殺したんだ。おまえは何も知らない。何も知らないから……！」

「じゃあ教えてよ。何があったの？　どれだけ調べても死因は不明。しかも、死体は左腕しかなかったんでしょ？　近くには歩ちゃんもいたけど、意識不明の重体。病院に運ばれて……」

「うるさい！　俺は……俺は渉を助けられなかった。助けられるのは俺しかいなかったのに。俺さえ生まれてこなかったら……俺さえ生まれてこなかったら渉は生きていたんだ」

「歩ちゃ……歩ちゃん！　変なこといわないでよ……それ、渉くんに失礼だよ」

「失礼？　どうして？　渉は生きるべきだった！　俺が代わりに死ぬべきだったんだ！」

怒鳴り付けるように叫ぶ。

渉が消えたときを思い出す。

あの日も、晴天とは言い難い曇りの日だった。雨が降りそうで降らない、肌寒い空気のかな。歩と渉は、向かう先を決めずにただ散歩感覚で歩いていったときだった。

何気ない話をして、たまに店に寄って。何気ない一日が過ぎようとした夕方だった。

町の外れまで行って、森のなかへと入っていた。

そこは、小さい頃からよく遊んでいる森で、庭のようにあちこちを知り尽くしていたつもりだった。

しかし、ついたときには、いままで家に帰ろうとする時間で、薄暗く、足元が危ういことはお互いわかっていた。だから、奥には行かずに、途中にある石段に座ってただのんびりと夕日を眺めていた。

昔から見慣れた景色。隣には、自分と同じ顔の男の子。身長も、声質も。すべて同じ。

でも、昔よりも町の光は強くなっていて、町を挟んだ向こうにある山が見え、星は町の光に負けてしまっていた。

「歩。僕らはずっと一緒だよな？」

「当たり前だろ？ 一緒じゃないといやだね」

ベーツと舌を出し、子供っぽく渉に甘えてみせた。

いつも一緒だった。

周りと違うことをしたとしても、片割れと違うことはしない。いつも一緒。同じ服を着て、同じ時間くらいに起きて。片方が早く起きてしまえば片方を起こして強制起床。同じ時間に寝て同じご飯を食べて。

「でも渉、何か隠してるでしょ？」

歩はわかっていた。

渉は秘密主義者だと。でも、歩には話していたし、歩も渉にしか話さないことばかりだった。

でも、隠し事をしていることを、いつだったからか気付いていた。

「あーやっぱりばれてたか」

「隠し事するとき、渉、苦しそうだもん」

「苦しそうだった？」

「うん。申し訳ないっていう顔してた」

「そっかぁ……歩は昔から鋭かったもんな」

なんて苦笑いを見せる渉は、ゆっくりと両手を胸の前で合わせた。ちらりと歩の方を見ると、見ててと言った。

一瞬、どこを見ていれば良いのかと疑問におもったが、すぐにその合わせた両手のことだと気付いた。

一瞬合わせた両手に力が込められたと思えば、すぐにそれは離されてゆく。その間には、カチカチに冷えて固まった氷があらわれてきた。

両手から生えるように、所々飛び出している氷の柱が、横に。

渉の肩幅くらいになると、離すのを止め、縦に柱をたてて上の手を離し、片手でそのきれいに透き通った氷の柱を乗せていた。

「どう？」

「……どうって」

何といえは良いのかわからなかった。

何といえは渉を傷つけないのかも。

「変だと思う？」

「うん。でも怖いとは思わない」

どういう表情をすれば良いのだろう。

笑えばいい？

不思議がればいい？

驚けばいい？

わからなすぎて、ただ茫然とするしかなくなってしまった。

「そう」

「いつからできるように？」

「二カ月前くらい前から」

たしか、隠し事に気付いたのは、一カ月前くらいだったから、結構気付いてあげられなかったのだろう。

「そっか……それ、どういう原理なの？」

「僕にもわからないんだよね。いつのまにか、こう……想像するっていうの？　こうなってるほしいって形になるんだよね」

体のなかから？　氷が？

「どうして黙っていたの？」

「嫌がったり怖がると思ったから」

「嫌がりも恐れもしないけど……そっか」

それからおとなしく家に帰ろうとした。

もう、あの空気に耐えられなくなって。

いつも歩き慣れていたはずの獣道。転がっている枝や石に足が引

っ掛かりながらも、森から抜けようとした。

「あっ」

そう言葉を出したのは渉だった。

ピタリと足を止め、昔に大きな木があった方を見ていた。

「ああ。そういえば小さい頃向こうに秘密基地作ってたっけ？ 大きな木が目印で……でもあの大きな木、どうして無くなったんだっけ？」

いつだったか、何かの理由で刈られたと聞いていたが、その理由が思い出せられない。

久しぶりに見てみたくて、大きな木があったほうに足をすすめた。

「あっ待って歩ー！」

あわてた様子で渉が腕をつかんできた。

「なに？」

「そっちは……」

「なに？ 怖いのか？ じゃあちょっと待ってなよ俺だけ行ってみるから」

笑いながら言い、腕を優しく振り払って背を向けて駆けて行った。後ろから渉が何かを叫んでいたが、さっきの渉のことを考えていたため、耳には入ってこなかった。

しかし、渉の言ったことを聞かなかったからこそ事故は起きた。

少しだけ駆け足になっていた足は、不意に飛び出している木の根に足を引っ掛けた。逆の足で体を支えようとしたが、その足はなぜか空振り、上体が前に倒れてゆく。

その時不意に思い出した。

どうして大きな木が刈られたのかということ。

数年前に少し大きな地震と大雨が重なったことがあった。その時に、地盤が悪くなり土砂崩れが起きた。

運がよかったことに、麓の住民達に怪我也被害もなかった。そのことに対して、こういうことかと問題になった。

奇跡的に被害が無かった。不思議なことに崩れた土砂は、どこに

消えたのかもわからない。そんな不可解なことが起きた。

だからそこは、きれいに消えてしまった

「歩……！」

茫然とそんなことを思い出していると、渉の声がすぐそこから聞こえてきた。

宙に浮いた体は、力強くかたく冷たいものにぶつかり、どちらを向いているのかもわからない状態に陥ってしまった。

「歩……！」

「わ……たる？」

気付けば渉に頭を抱えるように抱き締められていた。

冷たいものはどこにももうない。

いつのまにか地に横になっていた。

「歩……よかった無事で」

「渉……助けてくれたのか？」

「うん」

「ありがとう……」

そういつて上体を起こし、ゆっくりと渉の左手をつかんだ。

「ううん。歩が無事で本当によかった。それだけでよかった本当に」

そういつて、ホッと安心そうにほほえむ渉。その渉の左手は冷たくなってゆく。氷のように。

体から光り輝く透明な光が、空へと向かって輝く。

「わた……る？」

違和感に気付くのが遅かった。

だんだんと渉の姿が消えてゆくとき、今生きている人生に、渉の存在が消えることに気付いてしまう。

「渉！ いやだわたるー！」

しがみつくように、左手から左腕の付け根を抱き締める。

パアッと目もあけられなくなるほどの光に、ギュッと目を瞑ってしまふ。

瞑った目の前は真っ暗。ふらりと体は平行感覚を失い、どこかへ

とぶつかるのがわかった。  
ない。そんな気がした。

目を開けられない。 目を開けてはなら



## 第17話

「歩ちゃん？」

黙りこくってしまった歩に、女の子、青山梓は声をかけた。

「……どうして渉は俺を生かしたんだろう」

「さっきから何を言っているの？ さっぱりわからないよ……」

「わからなくていい。あんたは知るべき人ではないんだ」

（何を話してるんだ……俺は。あの時のことなんて俺だけ知っていればいい。あの時の話だけはするな……俺！）

「知りたい！ 知ってるんでしょ？ 歩ちゃんはあの時何があったのか……」

「知らない知らない知らない知らない！！」

頭がパニックになる。

知っていることを教えてはいけない。

今までだって警察の人にも親にも、断固として口を開くことすらしなかった事件。

警察の人も医者も、ショックで口がきけなくなったとか、思い出したくないのだらうとか、終いには思い出してパニックに陥らせると大変だとかまで言われた。しかし、訂正することもなく、ただだんまりを続けた。

その間も、なんだかこの梓が様子を見に来てはいた。

渉を好きだった梓にとって、渉の不可解な死は、辛く淋しかったであろう。

親も泣いた。

クラスメイトも泣いた。きっと、生意気でガキっぽい俺のことであれば、泣かれることもなく鼻で笑われていただろう。

親戚も、先生も近所の人たちも泣いた。

ただ、俺だけが泣くことができずに。

「歩ちゃん。どうしてそんなに黙っているの？ 何があったのか、歩ちゃんは誰にも言わないつもり？ そうやって、一人で抱え込むの？」

刈られたと思った大きな木は、刈られたのではなく、土砂災害で崩れてしまったのだ。そんなことを思い出すのが遅れ、渉を亡きものとしてしまった。

渉を殺したのは、渉を最愛していた俺自身だと知ったら、きっと世界のみんなは俺を恨み、憎み続けるだろう。でも、そんなのは怖くない。なんだか、言ってしまったら渉にまでも嫌われてしまう気がした。

あとは、どうしてあんなところで、左腕をつかみ、倒れていたのかだ。

崖に落ちたというには、崖のうえであり。ギリギリにいるというわけではなかった。

だから一時、何者かに襲われ、バラバラに切り刻まれたのでは？ という問題になった。

意識不明で倒れていた俺については、黙らせるために薬物を使われたという意見もでたのだが、身体から薬物反応がでることもなかった。それに、切り刻まれたという証拠となるようなものも不十分だった。なにせ、そこに血が出た形跡がないのだ。

切断面には、きちんと血管も通っていて、骨もあり肉もあった。

ただ、血管の切断面は、出ないよう絞めて閉じたような形になっていた。肉も崩れることもなく。

不気味だったらしい。

何より不気味だったのは、意識のない俺が、その左腕を強制的に離させないかぎり、手放さなかったのと、その腕が奇妙にも俺と引き剥がすまで、生きているかのように脈打っていたことだった。

俺と引き剥がした瞬間、その腕が脈打つことはなくなった。それと比列するかのように……。

「歩ちゃんが考えてること……全然分かんない……」

「分からないでいい……」

「どうして!？」

「自分にも分からない自分のことを他人が知る必要はないだろう? じゃあな」

ネックレスは返してやらない。

右手でしっかりポケットに入れたのを確認し、肩に乗せていた傘をしっかり持ちなおして家へと向かおうとした。

「待って! お願い! 涉くんがどうして死んじゃったのか……教えて!」

振り向かずにピタリと足を止めた。

理由を知りたがる梓にとって、涉というものは好きな人や、掛け替えのないものという大事な人なのだろう。だから知りたがる。

「涉のこと、神様も好んでしまった。でも俺は嫌われ者だから……涉だけをつれていった」

あの力は神様が授けたものなのだろう。

なのに、俺なんか莫大な力を使っちゃったから、怒って自分だけのものにしかかったんだ。

「神様……?」

「そう。神様。だから真理は知らないほうがいいんだ」

「そんな……歩ちゃん、神様なんて信じてたっけ? 一番に神様なんてって言いだしたのは、歩ちゃんじゃない! むしろ涉くんのほうが神様を信じてた」

「だから神様は涉を好んだんだ! だから涉をつれていった! それ以上のことは知らない……わからないんだよ」

そう言い捨てて、俺は走った。

泥が跳ねようが雨に濡れようが、そんなことを気にする余裕もないくらい、必死に駆け出した。

目的を失ってしまった犬のように。

気付けば、見慣れない土地にたどり着いてしまった。

いや、がむしゃらに。無鉄砲に走りだして、どこに出たのか頭が  
追いついていないだけ。

建物の一つ一つに見覚えはあった。

「……ばっかみたい。俺……」

数代の車が、横を通り過ぎる。

水溜まりが撥ねる音。

タイヤが回る音。

車内の音楽が漏れる音。

すべてが耳に入ってくる。

「何が神様だよ」

再び車が横を走る。

「神様なんて信じてないくせに」

バイクも大型自動車も、数台俺を避けて横切っていく。

「俺は神様を信じてはいけ……だめなのに……歩は信じてはい  
ないんだから」

そう自分に言い聞かせる。

自分は涉とは違うと。

でも、違うところを見つけると淋しい。すべて同じでいたい。だ  
から、これからは涉のために神様を信じても良いのではないか。

神様を信じてあげることが出来る涉の代わりに、俺が神様を信じ  
てあげればいい。

もしかしたら、今涉は昇格して神様の一人になっているかもしれ  
ない。だったら、涉を信じるのと一緒に、神様も信じるべきなのだ  
ろうか。

誰かが言っていた。

神様は信じたものの心に存在すると。  
「心なんて信用ならない」

「相澤……」

「おつ……おうおはよう。どうかしたのかよ？ すっげえだるそう  
だぞ」

「うん……」

眠い体を必死に集合場所まで運ばせた俺は、目を擦りながら必死  
に返事をしてみせた。

「夜更かしでもしたのか？」

「いや……うん。したのかな……？」

「何だその曖昧な返事？」

「いや……なんていうか夜中までメールしてた気分」

「気分かよ」

別に本当にメールをしていたわけではない。

ずっと山田ちゃんと話をしていたのだ。身体は眠っていることには  
なっているらしいが、頭はきちんと起きていることになるらしいこ  
とが、体験でわかった。

すごく、つらい。

身体は寝ていてくれたから限はできなかったからよかったものの、  
精神的眠さは学生にとって、強敵だ。

杵島を待っていると、不意に相澤の足が進んだ。

「あつ相澤！？ 杵島待たねえのかよ」

「あ？ 聞いてねえの？ 俺には今日休むってメール来たけど」  
振り向いて、不思議そうな顔をする。どちらといえば、不思議そ

うな顔をするのは俺の方はずだ。

一度携帯を開き、メールの受信ボックスを確認しても、問い合わせをしても、メールが来ている様子はなかった。

「ちえー！俺にはメール無しかよ」

「ははっ。どっちか知ってれば良いだらって手え抜いたんだろ。どうでもいいけど早く行かねえと遅刻だぞ？」

「それはやばい！」

いやな予感がする。

本当に杵島は相澤にメールをしたのだろうか。

前、確か夏休みが明けた最初の登校日。あの日も、杵島は少し遅れてきた。

（そっだ……確かあの日、違う何かがあった気がしたような……）  
なんだっただろうかと、必死に考え、思い出そうとするが、こういうときに限って思い出せない。

学校に着くと、色々な場所に生徒が固まり、期待と好奇心の瞳で何か楽しそうな話していた。

じっくり聞いてみると、会話はたった一つの話題だった。

転校生がくるらしい。

どんな子かとか、髪は長いとか、学年は何年かとか。

聞けば女子らしいが。

「転校生ねえ」

相澤がぼそりと興味がないかのようにこぼした。

「へえ、相澤めずらしく興味ないの？」

教室につき、カバンを机に乗せる。

「なに？ 辻は興味あるのか？」

「そりゃあまあ、多少は」

「珍しい」

「相澤だつたらもつと騒ぐと思ったんだけどなあ」

「なに？ 転校生くること知ってたのか？」

少し驚いた顔で言われるものだから、逆に驚いて首を横に振る。

「まっさかあ」

「じゃあ俺も驚くから辻も驚けよ？」

「おーけー。せーの……」

『わー』

もちろん心の籠もらない驚きだ。

驚かないのは、最近色々あつて、そのことに対して驚くことが多かったから、いまさら転校生なんかで驚かなくなってしまった。

きつと相澤もそうなのだろうと、勝手に解釈していた。

噂の転校生は、同じ学年で隣のクラスに転入した。

クラスが違えば、接点がない。そうおもっていた。

授業が始まる前に送った杵島へのメールが返ってこないまま、昼休みが過ぎ放課後となってしまった。

不安は募り、相澤の目を盗んでもう一度メールを送った。

「辻」

「ん？」

「悪いけど先帰っててもらえるか？」

「んーいいけど……待ってようか？」

「いや、もしかしたら長引くかもしれないから」

「そっか」

また、一人で帰らないとまらないのか。そう思うと、最近の相澤と杵島の行動に不信感を覚えてしまう。

昨日だって、先に帰させられたし。なにか、内緒事でもしているようだった。

（そりゃあ人間だし、内緒事の一つや二つあってもおかしくないけどさあ）

あからさまにその話題に俺を入れないようにされている気分になる。

教室を出てから、一人になる。

一人になっても、何だか一人ではない気がする。

山田くんのせいだ。いや、いまはおかげといったほうがいいのかもしれない。

いつものように廊下の角を曲がると、いきなり人があらわれたような錯覚を覚え、反射的に数歩下がった。

「あつごめんなさい。少しよそ見をしていて……」  
見たこともない子だった。

クラスもそれなりにあつて、人数もいる学校だから、知らない生徒がいてもおかしくはないが、見ることはあつた。でも、この人は見たことがなかった。

髪は長くて、少し天然ではないだろうパーマが入っているようだった。クルクルというイメージを持つ。

顔も、化粧でくつきり二重に、真ん丸な瞳に見える。

身長は高くも低くもない、162cm程度。

「あついや俺の方こそごめん」

「ねえ、今からかえるの？」

（何いきなり）

「そのつもりだけど……」

「もしよかったら校内案内してくれない？」

「もしかして、君今日の噂の転校生？」



「恭恵<sup>やすえ</sup>。よろしく」

人懐っこいからか、そう名前を名乗り、手を出してきた。

「辻。よろしく」

（まだ案内するって言ってないんだけどなあ）

手を差し出し、握手をしようかとおもったが、何だか差し出す勇氣がなかった。

ここで差し出してしまつては、未来の何かが崩れてしまいそうな恐ろしさがあった。

「どこから案内してほしい？」

「握手は苦手？」

「異性に触るのが苦手なんだ」

もともと異性と話さないから、『人と』というより、『異性と』のほうが好都合だった。

「そう。損な性分ね」

「まあね」

「じゃあ図書室教えてもらおうかな？」

「本好きなんだ？」

「まあね」

それから俺は、恭恵が納得するまで校内をさまよった。

「あの女の子……恭恵だっけ？　なんだったとおもう？」

『しるか……でも、触らなかつたのは正解だっただろうな』

「へ？　なんで？」

『なんでって……いやな予感したんだろ？』

「うん……でも、あれは勘だよ？」

『反射的な勘こそ信じる』

「何その命令形！」

『悪かったな』

「謝る気ないだろ？」

家に帰るなり、すぐにベッドに横になり、報告する必要がないくせに、山田くんに報告した。

振り回されることになるとは思わなかった口をこぼすといつてもおかしくはない。

『それより、杵島というものからメール、返ってこなかったな』

「……あつ！ そういえば」

振り回されていたせいで、確認するのをすっかり忘れていた。意識を戻して目を覚ました。

耳元に放り投げていた携帯を開き、メールを確認する。

「来てない……どうしたんだろう」

不安は募るばかりで、再び同じようなメールを送った。

数分待ってもメールが返ってくる様子がないものだから、俺は財布と携帯をポケットにつっこみ、家を出ようとしたが、その時メールが返ってきた。『大丈夫だよ』と。

でもなんだか大丈夫じゃないことはわかりきっていたから。急いで家を飛び出した。

## 第18話

薄暗い地下牢。

吊されている両手両足を少し動かせば、接合されているチェーンが擦られ、カチャカチャと室内に響き渡る。

「あいつも悪趣味だなあ……」

苦笑するしかなかった。

まさか、友人に監禁されることになるとは思わなかったから。しかし、その友人を恨むことはない。

「だーれーかー」

「いるわけがないだろう。おまえも案外バカだなあ」

（おまえにだけは言われたくないかなあ）

「ああ！？　なんでだよ！　このこ捕まったのも、おまえの失態だろ！」

（だからその考えの足りない思考がまだ子供だつて）  
はあと深いため息を吐く。

「なんだとー！」

（カリフォンス！うるさい）

「外に聞こえてないんだからいいだろうー」

目蓋を閉じれば、14才くらいで薄紫色の髪が軽く外に撥ねていて、つり目でムツとした表情をしている男の子が現れる。

その反抗的な瞳が可愛くて、ついプツと吹き出してしまう。

「笑ったな！」

「あんまりにもガキくさくつてさ」

「なっ………！」

「つたく……寝ないようにしてたのに」

『べつに監禁されてるんだから寝ようが何しようか勝手だろ?』

「まあそうなんだけどね」

二度目のため息を吐いてしまった。

監禁されているだけというのもつまらないものだ。

『でもなんでわざわざつかまってやったんだよ』

「友人の頼みだったから」

『はあ?』

『悪いけど……ちょっと話したいことあるから、いまでてくれるか?』

『電話じゃ……今じゃダメなのか?』

『話にくい』

『わかったよ……』

三度目のため息を吐いた瞬間、胸ポケットに入れておいていた携帯が震えた。

メールだ。

数時間前までは、一時間ほど置きになっていた携帯だが、だいた放課後くらいになると、まったく携帯はなかったが、不意になって驚いた。

数時間前までは、辻だろつという勘が働いたが、数時間置いたのと、返事を送らなかったからもうこないだろうという勘で、違う

人だろうという予感が働いた。

メールが鳴ったおかげで目が覚めた。

しかし誰だろうか。

「もしかして辻も捕まっていたりして……？　だっただけでえゆるさねえからな……」

『おまえ、腹黒いだろ』

「そうでもねえぜ？」

『あつそお……』

「激しい独り言だな」

「……帰ってきたのか」

コツコツとわざとらしく足音をならしてきたのは、ここに連れてきた友人だ。

「おとなしくしてたか？」

牢屋の鍵を開けずに、扉ごしに会話をする。

姿は見える。でも、背を向け、こちらを見る気はないらしい。

「おとなしくするしかないだろう？　ところで、辻は元気か？」

「ああ。元気そうだ。相変わらずな」

「今どこに？」

「さあ？」

「質問くらい、答えてくれないんじゃないのか？　さっきからメールが来てるんだ。返事を返したい」

「……一回だけだ」

「サンキュー」

「だけど、手は自由にさせない。余計なことを言わせないために、文面は俺が打つ。文句は？」

「あるけど……しゃあないっておもってやるよ」

少し警戒しながらも、鍵を開けて中に入ってくる。

指定した場所から携帯を取り出し、中を見る。

「あいつもまめだな。未開封はすべてあいつだ」

憎っただらいいかのような、嫌味混じりのほほえみ方。

「中を見せる」

「古いほうからな」

といって、すべてみせてもらった。

辻ではないだろうと思われた最後のメールも、辻からだった。

メールの返事を言うのと、薄情だなといわれた。

しかし、それでよかった。

きつと辻は、その一文でわかってくれるだろう。

『ほんと。薄情だな。めずらしいじゃねえか。いつもならもっと

……』

（本当おまえはガキだな）

『なっ！　なんでだよ！』

（めずらしいんだろ？）

『あっ？　ああ……あ？』

まったくわからないかのように、素っ頓狂な声を上げた。

メールを打ち、送信し終わると、すぐに牢屋から出て鍵を掛けた。

それから何を言うこともなく、その場から離れていった。

（カリフォンス……。俺はおまえを信じるからな）

『あ？　ああ？』

「うう……いないわけないんだろうけどなあ」

必死に呼び鈴を鳴らすか、誰かがいるような様子はない。

訪れたのは、杵島の自宅。

お見舞いという名を称した安全確認。

あのメールがどうしても引つ掛かる。

どうして返事が遅かったのか。

病院にいたのだろうかという疑問もあったが、にしては長いよう

な気がした。でも、返事が返ってきたということは、もう病院にはいないはず。

もう一度、呼び鈴を鳴らそうとしたとき。

「辻？」

不意に後ろから呼び止められる。

「あ……相澤？ どうしたの？」

振り向くと、そこには相澤がいた。

「おまえこそ」

「お見舞いに……」

「お見舞？ あいつ、帰ってきてないだろ」

当たり前かのように言う相澤の声に、だんだんと不安感を覚える。

「なんで？」

「あいつ、入院か、しばらく様子見で病院ベッドらしいし」

「そんなにひどいの！？」

「高熱が続くんだったよ」

「……どの病院？」

「さ、さあ？ そこまでは……」

「知ってるんでしょ？ 相澤」

「……」

「杵島が入院するのはわかった。でも、なんでメールが返ってきたの？」

「メール？ さあ？ 屋上でも出たんだろ？」

「なんで？ 入院までいった高熱者が、屋上に行くこと許される？」

「……」

「どこにつれていったの？」

「どうして疑うんだよ」

目付きがかわった。

眉間に皺が寄り、ジッと睨み付けてくる。

「だって、最近の相澤おかしすぎる」

「どんな風に？」

「前みたいな楽しさが消えて、すごくピリピリしてる。なにかに追い込まれてるみたいに」

左手が熱い。

すごく懐かしい現象。

昔はよくあったのに、最近になってまったくなかった。

でもいま、左手が熱くなる理由がわかった。

それは、例外はあるものの、規則というものがあるみたいだ。一つは、今みたいに感情的になったときだ。

「ピリピリなんか……」

「じゃあ言い方を変えるよ。最近の相澤は、あからさまに隠し事をしているって顔してる」

「なっ……」

「ねえ相澤。杵島になんかあったら、ただじゃおかないよ？」

「そっ……そうやっていつも俺をのけ者にするのか？」

「あ？」

「いつもお前は杵島贔屓だよな」

「なにいつて……」

「いつもそうやって杵島杵島って……。そうだったのも、おまえがどっか遠くに行ってからだ！」

「あれは！」

「しかも、二人で電話で相談して言いたい放題言いやがって……」

（電話？）

いったい何のことを言っているのか。

確かに、杵島とは電話はするが、それを相澤に知られることはないはずだ。

（もしかして杵島が言ったとか……）

そういう奴でもないはずだ。

「相澤……確かに杵島とは電話をした。でもなんでそれを知っている？　そういえば、最近の杵島と二人で話すことが多かったよなお前……お前だって人のこと言えるのかよ」



「何で知っているのか？ 忘れたのか？ 俺は水を操れるんだぜ？」

「忘れてはいないけど……それとこれと何が関係して……」

「あの日は雨が降った。杵島が飲み物を飲んだ。それを言えばわかるか？」

「え……」

確かに、杵島は電話中に何か飲み物を飲んでいたし、あの日本当に雨が降った。

前は持つてきていた折り畳み傘を、相澤は持つてきているはずがないといっていた。知らなかったと。でも、いつだったか、天気予報でも晴。雨が降る様子もまったくないのに、いきなり土砂ぶりの雨が降ったとき、相澤は折り畳み傘をもつてきていて、俺と杵島で相合傘をしたことがあった。

「……でもあれは、相澤も知らなかったって……じゃあその前は故意的に……？」

「どっちも故意的にやったさ。最初は、朝から降らせるつもりだったから持つてきた。でも、電話の日はあいつが遅れてきた。そこでこそこそ話してるのがきになって、その時雨を降らせることを決めた。だから傘なんて準備はしなかった。とりあえず、その雨におまえらをあてたかったからな」

「でも、雨にあたつてどうやって会話を？」

「雨を通じて盗聴。簡単なことさ。でも、水には流れがある。乾いてしまつたら終わり。だから、杵島の準備した飲み物に寄生した。杵島に付着した雨の水滴を落として飲み物に増幅。わかるか？」

「そんなことまで……」

できてしまうのか。といったかったが、あまりにもショックで口が開かない。

裏切られた一心。

会話を覗かれた恐怖。

いったいいつからそんなことまでできるようになっていたのか。確かに、傘については疑問に思ったことがあった。

偶然だと思い込み、すっかり忘れていた。

「裏切ったの……？」

「裏切った？ ……まあ、裏切ったことになるのか」

なんてしらばっくれようとした表情。

淋しそうな表情が一瞬みえたが、すぐに堂々とした表情へとかわる。

「じゃあ、杵島とふたりつきりで話してた理由は？ 俺に内緒で」

「特にない。目的は、お前を一人にすることかな」

「杵島をどこかに連れていったのも……おまえが？」

「まあね……」

「杵島をどうするつもり？」

「さあ？ どうしようかはこっちの勝手。教える義務はない」

こついうとき、山田くんとはなせたら。眠らなくなつたって、会話をすることができれば。

そう思つのと反面、それでも山田くんは、いい案を出さない気がした。

「連れて行ってよ。杵島のところに」

「……それはできない」

「どうして？」

どうして、急に弱そうな表情をするのか。

まだ、何か大事なことを隠している。そんな気がする。

「どうしてもだ」

「……明日、学校には来るんだよね」

「さあな」

「どうして？ なんでそんななつちやつたの！？ 相澤、誰かに

頼まれたの？ 首謀者はだれ」

「知る必要はない」

「必要はないって……知る必要があるから聞いてるんだ！ 俺のダチ連れていかれて、はいそうですかっとおとなしくしてると思っ！？」  
「おとなしくしているのが懸命だ」

なんといおうが、冷静さを保とうとする相澤が醜く見える。

できることなら、相澤が首謀者ではなく、操られていたり脅されてやっていることだったりしてほしい。

脅されているなら助けてやりたい。

杵島だから助けるのではない。親友の一人だから助ける。だから、相澤も助けたい。

「俺さー、常識とかー力のこととか……、相澤や杵島達よりも知識がないのは自覚してる。でも、それに親友を助けることは関係ないと思わないか？ 今大事な人が、自分の知らない場所で、どんなことをされていてどんなことを考えているのかすごく気になる。俺たちが尋常じゃないのは自覚した。だからこそ、俺もかわりたい」「かわってどうするつもりだ？ 力を使うことのできないお前は、ただの杵島のお荷物にしかないかもしれないぞ？」

「力がないものは力がないなりに。力がないからこそできることを探すことだろう？」

実際、力がないものが、力のあるものに歯向かおうとしたって無理なことなのかもしれない。でも、力のないものでも、力のあるものの近くにいて、何か役に立つサポートをするのは、力のないものの重要な役割ではないのか。

その中でどうにかして力を付ければいい。たったそれだけだ。

ニヤリとほえんでやった。

力があるうがなかるうが、今、この相澤に負ける気がしなかった。顔を歪ませ、軽く舌打ちをした。

ようやく顔を崩した。

あの、冷静さを保とうとしていた表情はどこにもなくなった。

「頼むから……」

弱々しい声を出したあと、足をすすめてきては、両肩をやさしく捕まれ、ピタッと体が相澤とくっつく。

身長の違いで、額がかかる相澤の右肩に触れた。

耳元に声が聞こえた。

どんなに耳を澄ませても、この微かな距離で微かに聞こえる、いまにでも消えてなくなりそうな声。

それを聞いた瞬間、腹部に勢いのある、ずしりとした衝撃がかかってきた。視界は傾いた太陽で暗くなってくる暗やみではなく、一瞬にして目の前に星が散らばったような感覚。

今何をしていたのか。何をされたのか……。

グラリと体は揺れ、ガシツとしっかりした頼りがいのある力強い腕に支えられてわかった。

殴られた。と。

しかし、それ以上のことを考えることはできなくなってしまった。

## 第19話

「また、お客さんが増えたわね」

「……お前か」

辻を杵島と同じ空間に吊してきた。

杵島は辻を中にいれるとき、数時間目が覚めない程度の軽い睡眠薬を飲ませた。

視界にお互いを映さない場所に。

その空間を出たとき。相澤にとって面倒な女が、壁に寄り掛かり、腕を組んで立っていたことに、ついついため息混じりに口が開いた。

「お前かつて……なあに？ 私じゃあなにか文句でも？」

「……別に」

「……まあいいわ。でも、まさかあの坊やまで連れてくるなんて思わなかった」

「坊やも何も、お前と同じ年だろう」

「ほんと。同じ年には見えないわ」

ため息混じりに言うこの女を。じろりと睨み付ける。

「手を出すなよ」

「あら、それはどっちに？」

「……」

「フフ。安心して、力ではどっちにも適わないの」

薄くほほ笑みながら、壁から背を離し、不意に手を触ってきた。  
「だろうな」

そう答えたあと、反応が遅れて手を振り払った。

舌打ちが響く。

「裏切りの相澤。可愛そうに真相を知らない子供は、守られているのか敵視されているのか理解できていない」

「うるさい。勝手に心を読むな。」

触れられた場所を、ごしごし汚れを取るように擦り取るうとする。

「なにもつけてないわよ」

「学校とは性格かわりすぎ」

「裏表があるほうが好まれるわ。でもあの小さいほうは、警戒心あるわね」

「え？」

「放課後、ぶつかったように見せて少し話したのよ。運悪くぶつかった時間は短すぎたわ。しかもそれから触れようとしな。まったく、誰に仕込まれたんだか」

ひどく悔しかったようで、親指の赤く塗られたマニキュアの爪先を、ガリツと前歯で噛む。

「接触したのか」

「ええ。何か問題でも？」

「……何かわかったか？」

「言ったでしょ？ 時間が短かったって」

「……」

「上にはどう報告するつもり？」

「何も話しませんでした」

「うつそくさ……」

「お互い秘密を持つのが、公平な相談ができるってものでしょ？」

「……つてえ」

夢から目が覚めたように、不意に目が覚めた。

覚めた場所は、はじめてみる光景だった。

薄暗くて、地下というイメージをもたらし、声の響きそうな鉄の

壁。いや、コンクリートだろうか。

両手両足は何かで壁に括られている感がある。

「どこ……ここ……腹イテエ……」

ずしりとした痛み。

今ならはつきりわかる。あの時、殴られたのだと。

「誰かーいないのー？」

いつだったかも、目が覚めれば知らぬ土地であったことがあった。しかし、あの時にはこんな不安感は感じなかった。むしろ、ホッと少しだけ安心していった気もする。

あの時と大きく違うのは、今の状態を説明してくれる人がいないこと。

目が覚めたとき、誰かがいてくれるというのは、安心できる。今は、すごく不安。ただ、目を閉じれば山田くんがいてくれる。あの時にはなかったことだ。

「その声……泣か！？」

「え……あ、杵島！？」

思ったとおり声は響く。

本当に杵島のところに連れてきてくれたのか。でも、俺のところから、杵島の姿は見えなかった。

「なぜ泣がここに？」

「杵島だって……ってそうじゃなくて、杵島無事！？怪我とか……」

「大丈夫大丈夫。なんにもされてないよ。泣こそ……なんか脅されたり暴力ふるわれたりしたんじゃない？」

「脅されてない。俺が杵島のところに連れて行っていった。でも拒まれ」

「拒まれた？」

「うん。で、駄々をこねたら腹殴られて気付けば、ここ」

「……」

「でも拒む理由は何？ あいつは何を考えてここに閉じ込めてるわけ？」

「さあな。それがわかんねえんだよ。とくに暴力で何かを言わせようとかが、何かを盾に脅してこねえから手の付けようがない。だから向こうの欲求がわからない」

「なら、ただ解放されるのを待つことしかできないってこと？」

「いまのところな」

「そっかあ」

相澤の思考がわからない。

それは、杵島も同じこと。

「杵島はさ、どうやってここに連れてこられたわけ？」

「相談したいことがある。ここや電話では話しにくい。ついてきてもらえないか」

「え！？ それにノコノコついてきたっていうのか！？」

杵島にしては、あまりにも考えが浅はかすぎる気がした。

「お前に言われる筋合いはない。俺の場合は、相澤が何かを隠して真相を明らかにしたいから来たんだ。畏にわざと引っ掛かっていることくらいあいつにだって気付けることだ。だから、あいつを通じてでもお前に気付いてほしいから、あんなにも薄情だと責められるメールを送ったんだ。お前なら、あのバカをストーカーしてでもここにこっそり来てくれるかと思った」

「……」

呆れた口調で話す杵島の言葉で、その手があったと納得してしまった。

実際特別な考えがあったわけではなかった。でも、どうにかしてでも、助けたかった。杵島も、相澤も。

実際、ここまでこっそりこれたとしても、杵島の手錠はどうする？  
今の自分の手を括っているものすら外せれないと言うのに、他人のなんて無茶だ。

カギがあるわけでもなく。

「杵島、肩凝らない？」

「話を変えたな？ 凝るさ。凝って血液すら回らなくなりそうだよ」



「どうすればとれるのかな？」

「力ギだな。欲を言えば……」

「言えば？」

「……力だよ」

「腕力！？」

「ばあか！ そんなの、俺でダメだったらお前も無理だろ」

「ひっひどっ！」

わかっていた。

杵島が言う力というものは、俺たちに特別備わった、“力”のことであるということが。

「ちよつと眠いし、悪いけど少し休むね」

「おまえこん……いや、今のうちに休んでおきなさい辻ちゃん」

「山田くん。最初の大仕事、頑張ろうとは思わない？」

『大仕事……か』

「うん。眠れる獅子になろうとおもって」

山田くんも呆れていた。

そんなの覚悟のうえだ。

深紅の髪が、ふわりとゆれた。

風ではない。ふらりと山田くんがうごいたからだ。

『ここで力を出したら、眠れる獅子ではないぞ？』

「おつやあ？ 山田くんにか勘違いをしているよ？」

『……そのしゃべりかた、気持ち悪いからやめてもらいたい』

「ちえっ。わかったよ」

『で？ 間違いつて？』

「眠れる獅子はね、仲間がピンチな時に目が覚めるんだよ？」

『ピンチも何も、今はお前がピンチなんだろうが』

説教じみている事を言っているくせに、表情はめずらしく、やわらかに楽しそうだった。

鉄は極度の高熱で溶けるらしい。

力を使ったことのない俺に、そこまでの熱を放出する自信はない。でも、できるできないと、自信とでは話がかわってくる。

そんな気がする。

その中でも、目を瞑った。

やり方は知らない。山田くんの本名も知らない。力を使ったあと、お兄さんがどうなるのかわからない。でも、今すぐそこにいる親友すら助けられないで、兄さんがどうのこうのといっただけならいい。昔に見た炎の夢。その炎を見つめていると、文字にかわってゆく。

「山田くん……いや、ラスティカ。一つ助言をしていただきたい」

『助言を？ ふん。そんなのいらないだろう？ 今のお前には』

「今の俺には？」

『お前は、一度レベルの高いものを身近で見ているはずだ』

「あ……えっそれだけ！？」

『ん？ 自信ないか？』

「自信はない。でも、できる気がする……」

『それで十分。力に理屈なんて必要ない』

「……不親切！」

『ありがとう』

「誉めてない！」

あの日、麻紀と兄の力を見た。

自分の持っている力の手をかけたあの姿。

再び目を閉じると、俺ではない違う人の呼吸が聞こえる。いや、感じ取れる。

ゆっくりと、その呼吸にあわせていくと、重い何か左手にこめられてゆく。

いつもとは違う熱さが、左手に感じられ、一緒に括られている右手にもその左手の放出した熱が感じる。

（熱い……）

考えてみれば、鉄を溶かすほどの高熱を、普通の人体にもかけるということとは、かなりの負担だ。

骨も溶け、使い物にならなくなってしまったらどうするか。

『余計なことを考えるな！』

その言葉に、ビクツと体が震えた。

『俺を信じろ……』

「らっ……ラスティカを……？ うん……」

きつと、この力はラスティカだろう。

ラスティカであれば、きつと俺が深く傷つくことをしない。もし、使い物にならない体になるようなことだとわかった時点で、止めて、力を貸してくれることはなかっただろう。

「うん。ごめんラスティカ」

方法を変えた。

太い手錠を壁とつないでいる鎖を、器用につかむ。

先ずは左側から。

鎖は、手錠よりも細い分、すぐに溶けるような気がした。

握っている鎖が、だんだんと薄く、細くなっていくなのかわかる。

だんだんと細くなり、左手がついに宙を泳ぐ。

肩の力が抜け、そのまま重力に負けてぶらりと下を向く。

（熱い……）

からだすべてが、熱にやられて汗だくになる。

相澤がくる前に、すべてを解く必要がある。

少なくとも、自分だけでも。

運がいいことに、足は地面スレスレ。落ちることになっても、問題はないだろう。

足は、手首に付いている、太い手錠のような鉄が、壁にぴったりとくっついている。根元を溶かせばどうにかなるだろう。

少しだけやすんでから、右手首をつなげている鎖を溶かす。

しかし、まだ溶かしきれていない今、不意にあることを思っ止めた。

（ヤバイ……）

両手を自由にはいけないことに気付いてしまった。

それは、両手が自由になることで、ぴったりと壁にくっついている状態の両足に負担がかかるし、しゃがむことができないとなると、足首に触れることはできない。

まさか、ここで大きな壁にぶち当たるとは思わなかった。

（どうすればいい……）

兄みたいに、炎を放出することさえできれば、片手を手錠にかけてバランスをとりながら可能だが、離れた場所でそれほどの熱を放熱することは、いろいろとリスクが高い。

もし外してしまえば、火事にもなりかねない。

（どうすればいい……）

ギョツと目を瞑り、ラスティカを呼ぶ。

『この建物は、コンクリートでできている。木造ではない。それとお前の熱はお前自身には熱いと感じても、それなりの耐性がある。鉄を溶かす程度の熱で火傷はしないだろう』

「うん……わかった」

『ただ、問題がある』

「え？」

『放出するには、それ相応の振りが必要だ』

「振り？」

『あのきょうだいがやっていたのを覚えているか？』

「うん」

『もともと放出は慣れが必要だ。初心者にしてみれば難易度は高い。大きいものを出すのと同時に、それ相応の大きな振りが必要』

そうだ。

あの時、二人はそれぞれの振り方で炎を出していた。

イメージするなら、遠心力を使ったように。

「なら、何度も高温の熱を振らなきゃいけないわけ？」

『そういうことになるが、経験を積みめば、放出した炎をあの二人のように操作することもできるかもしれない。だが、今のお前に経験を積みさせる程の時間はない』

「うん」

『二つ、三つの難易度の高いものを、初心者いきなりやらせることが不安だが』

「やってみるさ……やらないで無理だなんていえる時間はない」

再び左手に集中し、ラスティカの呼吸を確かめる。

手に絡み付く炎。

きっと普通の人に触ると熱いのだろうが、今の俺の左手には、熱くは感じられなかった。

温度なんてわからない。

ただ、がむしゃらに近い感情のまま、その炎を足首と壁のかすかな隙間を狙って投げた。

しかし、うまくはいかない。

振った瞬間、少し離れた火がすぐに消えてなくなった。

でも諦めることはしたくはない。

何度も何度も繰り返す。

何百メートルも、全速力で駆け抜けている気分で、すぐに息はあがってしまう。

(くそっ……)

落ち着け。落ち着け落ちつけ落ち着け……。

そういう声が聞こえてきた気がする。

いったん手を止め、いきを整える。

汗がダラダラと流れているのを拭き取ることもしない。

あの時、あのきょうだいはどうしてたか。自由自在に操り、楽しそうだった。

いま、自分に足りないものはなんだろうか。

楽しくすること？ しかし、今の自分には、楽しがれるような気分ではない。

汗にも似た涙が頬を流れる。

「ちつくしゅう……」

なにもできないのか。ここで落ちぶれてしまうのか。

人一人助けることができないくらい、自分はひ弱な存在だったのか……。

## 第20話

「吐……もういい……」

「まだだよ……左手は外したんだ」

頑張っていることに気付いたのだろう杵島が、そう慰めてくれる。でも、まだ見つかったわけではない。

あの兄弟にできたことだから、俺もいつかできる日がくるかもしれない。その日を、ぜひ今日にしてみたいという、好奇心もあった。でも……」

「大丈夫！ まだ見つかったわけじゃないんだ」

「……そうか。すまない」

すまないと謝る杵島に、むしろ俺から詫びを入れたいと言いつつになったのを口閉じたときガチャリと言う音がした。

誰かがこの空間に入ってきたのだろう。

コツコツと床を靴がたたく音がする。その音は確実に近づいてきている。

無駄にでもごまかそうと、ぶらりとぶら下げていた左手を右手の後ろに重ね、あたかも括られている振りをしてみせた。

足音は、目の前にとまる。姿は、相澤だった。

「具合はどう？」

「ボチボチかな」

「そう」

「相澤。出来れば杵島の姿が見たい」

「仲がよろしいことで」

「だってオレらの仲だし」

少しだけ嫌味っぽく口を開いてみた。すると、そこに何を突っ込むこともなく、視線は俺の両手首へと向かっていた。

「……一応努力はしたんだ？ 力、開放しちゃったんだ」

「ダチがピンチだし」

「自分が来たいっていったのに」

「来ても杵島もお前も助けられないんじゃない意味がない」

「じゃあ帰してあげようか？」

「杵島もお前も帰るなら帰る。俺だけ帰ることはできない」

「それは無理」

「なんで」

直球的に言い合う言葉は、その俺の質問にピタリととまった。

「時間がないんだ」

「時間？」

聞き返すと、答えることもせずに、牢の力ギを開け、すぐそこまで近づいてきた。

力ギを取り出し、両足を自由にし、すぐに右手首も自由にする。

「あつ相澤？」

解放した俺を、殴られる前にピタリと体を近付けた。

そして、あの時のように、いまにでも消えてなくなりそうな声を耳に残した。

気付けば、目を覚ませばいつもみる景色。自室だった。

あれは夢だったのだろうか。

どこから、夢だったのだろうか。



夢であつても、経験したことすべて、覚えている。

はじめにバカ野郎と囁いて、最後にごめんといった相澤の言葉。あれらがすべて嘘だとは思えない。

体を起こし、携帯電話を探す。

その時不意に気付いた。

布団にはかぶらず、あの時の服のままだ。ということは、あのまま相澤がここまで運んできたということだろうか。

杵島をどうするつもりか。

あそこはどこにある場所だったのか。

相澤の目的は何か。

結局何も聞けずにここに戻ってしまった。

朝日が眩しい。

母さんはどうしたのだろうか。

夜おそくまで帰ってこなかったはずの俺を怒るだろうか。

とりあえず服を着替えて階段を下りていく。

母さんはいるだろうか。

特にテレビの音や、料理をしているような音も何も聞こえてこない。

カチャリと戸を開けても、誰かがいる様子がない。

台所のテーブルに、何か紙切れがあるのに気付いた。

とても見つけやすい位置で、いつも母さんが夜いないときに置いている紙に似ている。

少し急いで近づいてみるとこうかかれていた。

「親戚の家に行ってきます。帰りは明後日になるから」と。

一昨日は置かれていなかった。

昨日の朝は母さんがいたし、帰ってきてからはここに立っていない。

昨日のうちにしかけたということは、帰ってくるのは明日。今日なくなつて問題はないみたいだ。

でも、杵島がいる場所がわからない。

メールも誰かから来ている様子もなかった。

「とりあえず学校……かな？」

行ってみれば、どうした？と笑って迎えてくれる二人がいてくれたりして。

きつといまごろ、ラストイカは、馬鹿馬鹿しいと笑っているのだらう。

（助けようとしてるのは悪いことなのかな？）

いつもの待ち合わせ場所まで行くと、相澤だと思われし者が立っていた。

思われし者。

昨日とは姿が違う。

「相澤……？」

もし、今の相澤の姿ではなければ、杵島をあんな状態にしている相澤を無視して学校にいかうとした。

でも相澤は親友だ。

この、親友の顔に、湿布だろう者が右頬に。左頬の口元には絆創膏がはられていた。

昨日はこんな姿ではなかった。

よく見てもれば口元も切れている。

「……声かけてくるなんて思わなかった」

「かけるつもりはなかった」

学校に行くつもりではあるのだろう。

いつもどおり制服だった。

「そうか」

相澤は一切こっちを見ない。

よく考えれば顔を合わせにくい。悪く考えれば、合わせるつもりがない。

「その怪我、どうしたんだよ」

「お前には関係ない」

相澤はかわりすぎた。

今までの相澤は、こんな冷たい口調は使わなかった。

こんな相澤にしたのは誰だ。

もしかしたら、今まで無理をさせていたのだろうか。

「関係ならあるね。俺はお前の親友だ」

「親友？ 昨日、あんなことした奴を親友なんて呼ぶのか？ お前は」

「あんなこと？」

「お前を殴ったし牢屋に入れた」

「何かあったんでしょ？ それに、俺は帰してくれた。あの時点で俺を帰すのは結構リスクがあったはずだよ。俺が誰か、助けを呼んでいたら？ 騒ぎを大きくされたら、相澤だって動きにくくなる。」

どうして俺を帰した？」

「学校に行こう。遅刻する」

「……」

答えにくいのか。

何もいわずに足を進めた俺の、一歩後ろを歩いてくる。

「で？ その傷は杵島にでもやられたの？」

「いや」

「杵島はどうしてあそこに閉じ込められているのかわかってるの？」

「知らないはずだ」

「……」

知らないでつれていかれた杵島に、少しだけ同情。

「えっとお……確か記憶があってれば、この駅で降りれば着くはずなんだけどお」

ある紙を見ては、駅の出口付近でまわりを見る。

こんなにも建物に囲まれた土地なんて、本当に何年ぶりだろうか。ましてや一人だなんて。

「えっと、今の時間なら学校だよ。えっと、学校の場所は……」

紙を裏側にすると、地図が書かれている。

「近くまで行ってみよう」

慣れない土地に来て、慣れない道を通って、少しだけ恐れながらまわりを見回して。

あと何分で着くのか、あと何歩歩けばいいのか。

「あの人も、こんな気分だったのかなあ」

不安だけどちょっと楽しい。

都会の匂いは、地元に流れる香りとは程遠い。

「サフィン。ここがあの人の子供が生まれている場所だよ」

白い雲のうえに青い空が覆いかぶさっている。

「空はかわらないねえ」

『麻紀。あんまりうえ向いて歩くと転ぶよ』

「大丈夫だよ」

行き先は決まっている。ただ、連絡の取りようがないから、いきなり来た感じになってしまう。

私の兄はもういない。

だから、一つの重みが消えたと思ってほしい。

あの海はきれいなまを保ち続けてるよ。だから、安心してあそこから離れたよ。

すべてあなたのおかげで、悩むことも苦しむこともなくて済んだよ。

だから。だから、次はあなたの近くにいさせてもらえませんか？私にできることは何でも致します。

そう、言いに来た。

調べた学校の位置と、今いる位置は間違いない。

確か、近くに公園があるはず。

授業がおわる時間まで、あと一時間ほどある。

歩き疲れもしているし、座る場所がほしい。

「あつた」

公園をみつけ、ブランコに腰を下ろした。

子供の頃、数回だけ記憶にあるブランコ。

あまりブランコや滑り台等に興味を持たない、大人にとっては面倒な子供だっただろう。

つながっている鎖をつかみ、両足をのばして下を見る。

子供用なのか、小さい頃に座ったブランコよりも地面に近い気がした。

不意に自分が影に入る。

「こんなところで何してるんすか」

聞き覚えのある声が、頭上から聞こえてくる。

すつと顔を上げてみれば、そこには見覚えのある顔。そして、探していた顔だった。

少し、息を切らしている。走ってきたのだろうか。しかしいった

いなぜ？

「辻くん！ どうして……」

思ってた時間より全然早いものだから、話したい言葉がまとまらない。

「どうしてはこっちの台詞です！ でも、久しぶりに会えてうれしい。麻紀さん」

うつすらとほほえみ、隣のブランコに腰を下ろし、一息ついていった。

「大丈夫？ 走ってきたの？」

「ちよつと逃げてて……でも、麻紀さんがいれば逃げなくてすむかな」

「逃げるって、何から！？」

「友人を拉致った友人」

「は？」

「まあ、もうおってはこないだろうけど。それよりさ、元気にした？」

なんだか、辻の印象がかわった気がした。

前はもつと、何かに追い込まれていて、それに精一杯で、他に手を付けられる余裕がない印象を持っていた。でも今は、その追い込まれているものが、もつと違う何かにかわったかのように、すっきりした表情をしてる。

「ええ、おかげさまで」

「そう。よかった。えつと……お兄さんは？」

「お兄ちゃんはまだもういないよ。辻によろしくっていつて消えていつちゃった。あんなに清々しい顔をしてたお兄ちゃん、久しぶりにみたよ。何の後悔もなかったみたい。辻がいるから、私を置いていつても安心できるーって、言って私のところから消えちゃった」

「……そっか」

「うん。不思議と怖くなかった。優貴を失ったときはあんなにも怖くて、苦しかったのに、どうしてだろう。全然怖くなかった。たぶ

んそれは、あなたがこの世界のどこかにいるって、わかってるから……」

「そんな……オレが何かしてあげたみたいな言い方するなよ。寧ろ、麻紀たちがオレを支えて、助けてくれていたんだ。何かしてあげたいほどに」

「なにか、してくれるの？」

「ああ。してあげたい」

「だったら、お願いしてもいいかな？」

「なに？」

お願いしたいこと。

いっぱいあつた。大きく分けて三つ。

笑顔でいてほしい。

一緒にいさせてほしい。

そして、不穏な動きをしている人を、共に止めたい。

不穏な動きを感じたのは、だいたい辻が私たちの前から姿を消したあとくらいだった。

お兄ちゃんには、何を心配することもなく、私の近くにいてほしかったから何も言わないでいた。

感じ取ってくれたのは、私の故郷にある海たちだった。

あの海には、何にも汚されなくなかったから、私の水が少々含まれている。だから、お友達みたいなものだった。その、海が教えてくれた。だからここに来た。

その話を辻にすると、ピタリと動作を止め、驚いた様子で私をみていた。

「その話、本当だと思っていいんだよね？」

「ええ」

「今、すごく麻紀が来てくれて安心している。あと、その話をしてくれたのも」

うれしそうな表情。

少しだけホツとした。なんだか、無事でいてくれたんだなって、いまさら安心している。

「なにかあったの？」

「オレの親友が、閉じ込められてる。しかも、オレの親友に」

「え？」

「前に、二人こっちにおいて来たっていった二人。どうしてもはわからないんだけど」

以前、私たちのところにいたときだ。

「あいつらって言うって人たちね？」

「ああ。一度オレも捕まっただが、何があったのかオレだけ帰してくれた。もともとオレを捕まえる気は、あいつにはなかったらしい。逃げろってさっき言われた」

「だから早かったの？」

「うん。でも、何で逃げないといけないのか。何が起きているのか教えてはくれなかった。逃げろといわれたって逃げる場所は、麻紀たちのところしかないんだけど、そんなお金、既にななし」

「……ねえ、その捕まったお友達、もしかして証を持つ者？」

「う、うん」

「あなたが捕まったとき、そのお友達が捕まっている場所と同じだった？」

「うん。でも姿は見えなかった。どこかの地下みたいで、牢屋みたいに囲まれてて。見えない位置にいたけど会話はできた」

「他の人は？」

「いたのかな？ 声も何も聞こえなかったから。潜んでいたことがないかぎりはないと思う」

「そう……その、捕まえたお友達は力を持っているの？」

「あ……それは、うんまあ、力は持っているけど証はないみたい」



「何の力が聞いても？」

「うん……水のはず」

「そう、私と一緒にね」

「うん。でもあいつは卑怯だ。力を使って盗聴した」

「水で!？」

「うん。雨を降らし、オレらに付着させて電話を盗聴。飲み物で水蒸気となり乾く前のかすかな水で増幅させてとかなんとか……」

（そ、そんなことまで可能な!？）

私はあまり窮地に立たされたわけではないから、そのような実戦的に使われる力を使用したことはなかったし、思いつきもしなかった。

証を持っていないものの、応用術。私にそのような力がなかったただだろうか。

「そう……裏に誰がいる可能性もあるわね」

「誰か？」

「ええ。その友達と、裏で命令してる人の意見が一致して、メリツトのある行動を。でも、辻さんが帰ることを許されたのはわからないわ。捕まえるつもりがないにしても、きつと上の人にとっては、辻さんもいずれ捕まえるって言われているのかも」

「だから逃げろって？ その人とながつてるのに？ もしそうだとしても、逃げ続けるわけにはいかないんだ。友達……杵島が捕まってる。助けに行きたいんだ」

気持ちちは分かるけれど、きつとその捕まえたほうのお友達と、裏で命令している人との力の差は大きいだろう。

だから辻さんだけでも助けたかったのかも。三人の間に何があるのか分からない私から言わせてもらえば、その人は、辻さんを助けたいのもかもしれない。

今、辻さんがその捕まっている友達を助けに行くのは危ない。捕

まえた側の友達の行為を無駄にすることもかもしれない。

「だから辻さんは逃げて？ 私はまだ顔は知れていないはず。まずは私がその捕まったお友達を助けに行くわ」

「どうやって！」

「捕まえたそのお友達と接触したいわ。その友達の顔を教えてもらえないかな？」

「でも、麻紀を危険な目に遭わせたくない」

「戦闘態勢にはならないように努力する」

言ったことに悔いることはしない。

成功するかどうかは分からないけれど、危険は数ヶ所だけ。争いになる計画だけは立てたくはない。

力を使うことにはなるけれど、お互い怪我をさせたくはない。

「でもどうやって？」

「それは、さっきあなたが教えてくれたことを私が実行するだけよ」

「教えた……？」

「大丈夫。捕まった人を無事につれてくるわ」

名前は相澤。

性別は男。

身長は高め、髪を伸ばすことはない。

写真とみれば、すぐにわかるらしい。

登下校路を教えてもらい、できるだけ不審がられない程度に、周りを何度か見回す。

もしかしたら、捕まった、杵島という友達のところについてしまい、その道にはいない可能性もある。

杵島というのは、以前、辻さんが目を覚まさないうちにメールが

来て、兄が勝手に見てしまった時の人だったはずだ。

辻さんが捕まったのは、その杵島という男の自宅前だから、またそこにいるかもしれないということで、その位置も印してもらった。「ここからそんなに離れてるわけじゃなさそうね」

今のところ、下校中の相澤という男は見つからない。今から行ってみたほうが無駄足にはならない。寄り道をしているかもしれないし、真つすぐ捕まえた場所に行ったのかもしれない。

回れ右をするように、クルリと後ろを振り向くと、いつのまにやらその写真の男、相澤が見下すように立っていた。

「俺に何か用ですか？」

見下した状態で、微笑むその顔は、恐ろしく、口を開くことはできても、言葉が発せなかった。

## 第21話

あれから学校には行っていない。

怪しまれないように、一応家を出て、いつもの帰宅時間には家に帰る。でも、私服で歩き回る。

そんな日が続いた。

学校に行くと、あの女に会うから。という理由ではない。学校自体違うから、会うことはないのだが。

歩き回っていれば、何かが分かるかもしれないなんて、甘い考え。滅多に行かない道や、確実道に迷っているだろうと自覚しても、焦ることなく思うがまま足をすすめる。

そんなある日、丁度変な空気の場合に出くわした。といっても、当事者たちには気付かれてはいないのは運がよかった。

少しだけ立派な家の前で、男二人が言い合っている。

つつい身身を隠せる場所に隠れてしまふ自分の気の弱さ。

「どこにつれていったの？」

と睨み付けるように、背の低い、黒髪で、色々なところに友達いっぱいいますといわんばかりな、友達には困らないだろうタイプの男の子。いや、少なくとも俺よりは年上だろう。

「どうして疑うんだよ」

と、比べれば身長が高いほうで、少なくともいじめられるタイプではない、チャラチャラしていてもおかしくない容姿の男性。

高校生だろう。睨み付けてきている背の低いほうの2、3歳上だろう。

「だって、最近の相澤おかしすぎる」

「どんな風に？」

「前みたいなのが消えて、すごくピリピリしてる。なにかに追い込まれてるみたいに」

「ピリピリなんか……」

「じゃあ言い方を変えるよ。最近の相澤は、あからさまに隠し事をしているって顔してる」

「なっ……」

「ねえ相澤。杵島になんかあったら、ただじゃおかないよ？」

きつと、話的に、背の高いほうが相澤で、つれて行ったただか連れていかれただかした人は、杵島というのだろう。

「そっ……そうやっていっつも俺をのけ者にするのか？」

「あ？」

「いっつもお前は杵島贔屓だよな」

「なにいつて……」

「いっつもそうやって杵島杵島って……。そうなったのも、おまえがどっか遠くに行っってからだ！」

「あれは！」

「しかも、二人で電話で相談して言いたい放題言いやがって……」

「相澤……確かに杵島とは電話をした。でもなんでそれを知っている？　そういえば、最近の杵島と二人で話すことが多かったよなお前……お前だって人のこと言えるのかよ」

「何で知っているのか？　忘れたのか？　俺は水を操れるんだぜ？」

（操れる！？　どういうことだ）

「忘れてはいないけど……それとこれと何が関係して……」

「あの日は雨が降った。杵島が飲み物を飲んだ。それを言えばわかるか？」

「え……」

「……でもあれは、相澤も知らなかったって……じゃあその前は故意的に……？」

「どっちも故意的にやったさ。最初は、朝から降らせるつまりだったから持ってきた。でも、

電話の日はあいつが遅れてきた。そこでこそ話してるのがきに

なつて、その時雨を降らせることを決めた。だから傘なんて準備はしなかった。とりあえず、その雨におまえらをあてたかったからな」「でも、雨にあたつてどうやって会話を？」

「雨を通じて盗聴。簡単なことさ。でも、水には流れがある。乾いてしまつたら終わり。だから、杵島の準備した飲み物に寄生した。杵島に付着した雨の水滴を落として飲み物に増幅。わかるか？」

「そんなことまで……」

（もしかして、こいつも涉みたいに……？）

水を操るだとか寄生だとか、なにを現実離れしたことを行っているのか。

もしかしたら、この人たちなら涉の力のこともわかるのではないか。涉が帰ってくる、その理由を。

「裏切つたの……？」

「裏切つた？ ……まあ、裏切つたことになるのか」

「じゃあ、杵島とふたりつきりで話してた理由は？ 俺に内緒で」

「特にない。目的は、お前を一人にすることかな」

「杵島をどこかに連れていったのも……おまえが？」

「まあね……」

「杵島をどうするつもり？」

「さあ？ どうしようかはこっちの勝手。教える義務はない」

「連れていってよ。杵島のところに」

「……それはできない」

「どうして？」

「どうしてもだ」

「……明日、学校には来るんだよね」

「さあな」

「どうして？ なんでそんなになつちやつたの！？」 相澤、誰

かに頼まれたの？ 首謀者はだれ」

「知る必要はない」

（あれ？ 途中から、目を見てない……）

いつからかは気付かなかったが、すごく苦しそうな表情をして、必死に言葉をつないでいるように見えてきた。

相澤という男のほうだ。

強気でいた頃は、視線をあまり外さずに話していたというのに、なにかきまづい会話になったかのようだ。

「必要はないって……知る必要があるから聞いてるんだ！ 俺のダチ連れていかれて、はいそうですかっとおとなしくしてると思う！？」

「おとなしくしているのが懸命だ」

「俺さー、常識とかー力のこととか……、相澤や杵島達よりも知識がないのは自覚してる。でも、それに親友を助けることとは関係ないと思わないか？ 今大事な人が、自分の知らない場所で、どんなことをされていてどんなことを考えているのかすごく気になる。

俺たちが尋常じゃないのは自覚した。だからこそ、俺もかわりた  
い」

「かわってどうするつもりだ？ 力を使うことのできないお前は、ただの杵島のお荷物にしかないかもしれないぞ？」

「力がないものは力がないなりに。力がないからこそできることを探すことだろう？」

（違う……）

力がないなら、引っ込んでいいのがいい。

もし、涉とこの人たちが言っている力が同じであれば、力がないものは無理をする意味はない。

無理をすれば、力あるものが、力無き者をかばい、失ってしまう

かもしれない。

渉のように……。

「頼むから……」

相澤という男が、弱々しい声を出したあと、小さい人のほうに足をすすめてきては、両肩をやさしく捕み、ピタツと体がくっつく。

小さい人との身長差で、額がかかるく相澤の右肩に触れている。

（耳元で何かをしゃべった？）

さすがに何をしゃべったのかまではまったく聞こえなかったが、確かに何か話した気がする。

それを確認した瞬間、相澤の片腕が、ずしりとした衝撃をかけるように小さい人の腹に食い込むように見えた。

衝撃で気絶したのか、グラリと体は揺れた身体は、ガシツとしっかりした相澤の腕に納まった。

その時の、相澤という男の表情は、すごく苦しそうで、なにか悔やんでいるようにも見えた。

そっとお姫さま抱っこをするなり、どこかへ連れていこうとしている。

会話を聞いてしまった手前、このまま家に帰ることはできず、気付けばその男を尾行していた。

男一人担いで、街中を歩けるわけではない。

できるだけ人通りがないところを歩こうとしているのか、もともと、人通りのないところに目的地があるのか。人通りが少ないというよりも、人とすれ違うことなく、相澤はある一つの店に入って行った。

目立つ飾りもなく、近くまで行かなければ店だとは分からないじみなお店だった。

少しだけ中を覗いてみると、じみな割にお客さんだけは豊富らしい。この中に雑ざってしまえば、探すのは一苦労。



喫茶店ではなく、クラブみたいな作りで、座るような椅子はなく、丸い背丈にあうような小さめのテーブルが等間隔に並べられている。さすがに、中に入る勇氣はなかった。

ただでさえ、俺の容姿は中学生。入りにくいことこのうえない。

「帰るか」

特に助けてやれそうもない。

深追いしすぎて、自分が危ない目に会うのもいやだ。それに、もしかしたら助けてほしいとは思ってもいないし、助けられないほうがいいと思っているのかもしれない。

へたに手を出して、ゴメンナサイで済まされる雰囲気でもなかった。

回れ右をして、来た道を戻ろうかと振り向いた瞬間。

「わつと……ごめんなさい」

真後ろに人が居たことに気付かず、ぶつかるところだった。

女の人。

髪は長くて、軽くパーマが入っているようだった。クルクルというイメージを持つ。

顔もくつきり二重で、真ん丸な瞳に見える。

身長は高くも低くもない、160cmを超えているだろう程度で、この店に来慣れている様子だった。

「いいえ。中に入らないの?」

「あつ……はい。すみません」

こんなドア口で話し込むわけにも、不思議がられるわけにもいかなかった。

ずっと、女の人を横切り、自宅だろう方向でも、迷うだろう違う方向でもどちらでもよかったから、とりあえずその場から離れることだけに集中した。

その女の人が、その後どうしたのかは分からない。中に入ったのか、その場に離れたのかは。

「こ……怖かったあ」

家に無事着くと、玄関で座り込んでしまい、今まで言うに言えなかったことを口にした。

別にそんな特別なことをしたわけではないのに、何かに緊張していて爆発しそうだったのを必死に抑えていたけれど。

「もう限界……」

（何で関わりそうだったんだろう……）

『関わらなければ楽なのに』

「え？」

不意にやさしい声が耳元。いや、頭のなかに直接響いてきた。姿の見えない何かが。

でも、俺の声に似ていた。

「渉……？」

『ワタル……？ ああ、おまえの片割れか』

「誰だよおまえ……どこにいる……？」

辺りを見回したが、どこかにいるという気配はしなかった。

「やべえ……俺相当きてるな」

額に手を当て、熱があるのかと不安になってみる。

『おまえ意外とバカなのな』

「あーハイハイバカですよ。やばいよ俺、ついにおかしくなってきたのか……自分の声が自分に話し掛けてきてる」

あまりにも自分の声。いや、正確に言えば渉の声。

俺と渉の声は、特別違うところがない。だから、自分の声か渉の

声かは、録音しただけでは違いが分からない。それくらいわからない。

何も考えないようにしながら、上着を脱いで放り投げ、自室へ入ってベッドにダイブした。

（明日もこんな感じだったら病院行こう）

目を瞑り、そのまま夢の中へと落ちていく。

「わたし……る？」

『だったらうれしかった？』

「……微妙」

『へえ、意外』

「さつきから意外意外うるさい」

声の持ち主は、俺の夢にまで現れた。まったく、不謹慎この上ない。

姿は、渉そのものだった。声から姿まで渉だなんて。

ただニコニコとほえむ姿の渉。

『怒りやすいっぽいのは知っていたけどな』

「だからうるさいって！ 姿や声は渉でも、性格はまったく違ってありがたい」

『感謝しろよ』

「でも、姿や声が似てるのは許せないな」

『知っている』

「なに？ 知ってる知ってるってさつきから！ 俺の何を知ってるっていうんだよ」

『すべてだよ』

ただ微笑んでいた渉の顔が、少しだけゆるみ、なにかを企んでいるような意味ありげなほほ笑みへとかわった。

そのほほ笑みは、背筋をゾクツと寒気で震わせ、一歩退わせた。

「どうして？」

『ずっと一緒だったからだよ』

「……そう」

『驚かないんだ？』

驚くべきなのだろうけれど、なぜか納得させられた。

あと一つ理由を述べよというならば。

「所詮夢だ。夢なんかに驚いてたまるか。どうせ目が覚めたら全部忘れてる」

『それは悲しいことで』

「泣いても胸は貸してやらねえぜ？」

『違うよ？』

「……は？」

にっこり笑顔で首を振る。

何がどう違うのかと、ついに思考が停止した。

『悲しいのは君だよ』

「はあ？ てめえなにいつて……おい！？」

渉の姿が、どんどん遠くに離れていく。

足は重たくて動かない。

必死に右腕をのばしても、伸ばし切れていないような間隔に囚われ、もつともつと奥にと、必死に伸ばす。

「いやだ……いやだわたるー！」

## 第22話

怒鳴った瞬間、自分の声に驚いて目が覚める。

俺は、必死に天井に向かって右手を伸ばし、頬には涙が流れていた。

伸ばした手をゆっくり自分のもとに戻し、力なき声で言う。

「ほら……何の夢だったのか忘れちったよ」

戻した右手で、グイッと涙を拭いとる。

「……渉……」

それから数日もしないうち、再び道に迷った俺がいる。

特別何を考えることもなく歩くのは好きだ。だから自分の名前も嫌いじゃない。

俺と渉の名前の由来は、『すべての困難も、二人一緒に涉り歩く』だそうだ。つまり、今の俺にはどんな困難も、涉り歩くことができる。

渉がいないから。

もともと、『わたりあるく』は、『渡り歩く』と書く。しかし、親は『交渉』の方を持ってきた。子供の頃に聞いた理由は、難しく理解はできなかった。

今は、意味はわかってても理解はできなかった。

『世の中は、交渉して成り立っている。不成立したものは必要ない。だから、繋ぎ歩くだけじゃなくて、ちゃんと話し合って、二人に不利益のない方法で歩んでほしい』

という母の言葉は、小さい俺には理解できない。

今の俺は、話し合いなんかで世の中がうまく進むわけがない。そう考える捻くれものになってしまった。

「俺に何か用ですか？」

不意に耳に飛び込んできた。

そんなに張り上げた声を出した感じではない。ただ低く、顔は笑顔だが、心の奥底では煮え繰り返りそうな怒りを見せている。そんな声だった。

もう少し軽い感じであれば、いつだかに聞き覚えのある声だ。

この角を曲がれば、その声の持ち主にあえる。

ゆつくりと覗き込んでみると、そこには、以前言い争いをして、相手を連れ去っていった男だ。たしか、相澤といていたはずだ。その目の前には、いきなりの出現にびっくりしているのか、まったく動ける様子がない女性。

髪はストレートで、もともと出しゃばる性格ではなく、おしとやかなほうだろう。

何かのゲームか何かで負けたかしたか。無理矢理そこに来させられました。といわんばかり。

「ま、ここはゲーム感覚で……」

とつぶやき、俺はその女の人の左側に立つ。

「お姉ちゃん！ 次はここで迷子になったの？ 探しちゃった。初めてきた土地なんだから、あんまり一人で出歩かないでっていったのにー」

見た目を利用し、につこり笑って子供っぽいしゃべり方をして、女性の手をつかむ。

もしここで話を合わせてくれば、助けがあって正解な印。

もし茶化すようなことを言ってきたら、人間違いでしたと十分だろう。

一瞬女性は困ったような顔をしたあと、それでも助かったような安心感を持っていた。

「あっうん。助かった。かえろっか」

「うん。お兄さん、もしかしたらおねえちゃんが何か失礼なことしたかな？」

「いや……」

どちらかといえば、相澤という男の方が驚いているようだ。

「そう。よかった、ではバイバイ」

言いながら俺は女性の手をひっぱり、相澤という男の右側。向かって左側を駆けていく。

ひっぱられたことにびっくりしたのか、女性は軽く相澤にぶつかった。その詫びを軽く言うなり、すぐに俺に着いてきた。

（迷子は俺なんだけど……）

勝手に迷子扱ったことに怒っているだろうか。

それが怖くて立ち止まることができない。でも、いつかは解放しなきゃ。されなきゃ。

近くに公園を見つけ、そのベンチに座り込む。

「えっと、ありがとうございます」

といったのは女性が先だった。

謝ろうとした矢先にいわれ、さすがに驚く。

「……余計なことしやがってって怒らないの？」

「え？ そんなこと言いません。本当にどうしようか困ってたし、本当に迷子になりかけてたし……」

「げっ本当に迷子！？　じゃあ迷子同士でぴったりじゃん」

なんて笑ってしまう。

中学生ではないだろう女性が、まさか迷子になっているのかと、少しだけバカにしそうになったのを食い止める。

「はい……って、あなたも？」

「まあ、そんな感じ」

「でも、どうして助けてくれたんですか？」

「いや、あの男の人がね……」

「……知り合い？」

少しかだけ女性の眉間に、皺が寄ったのを確認した。

やはり、あの男……相澤という男に何かが関係している女性<sup>ひと</sup>なのだろうか。

「知り合いではない。顔の面識がなかったからこそできた逃げ方だったしね」

「そう、なら何か知って？」

「んー……確実的な証拠はないんだ。遠目から見ただけだから、間違えとか勘違いって可能性もある」

「構わないわ」

力強い返事。

この人も、誰かさらわれたという事が起きたのだろうか。

もし、相澤が悪いことをしているのではなく、良いこと。もしくは、正当防衛であれば、俺は敵にまわってしまうことになる。敵に回りたいわけではない。ただ、あの時の会話を聞いたときは、悪者に聞こえたただだ。

「あの人は、友達だろう人をを気絶させてどっかに拉致るようなやつだぜ？ まあ、それが良いこととしてしたのかどうなのかは知らないけど……」

「……！ あなた、ちょっと今時間あるかしら？」

「え？」

麻紀と別れてから大分時間が経った。

ずっと同じ場所にいるわけにはいかないだろうと、とりあえず危



険承知で自宅へと帰った。もちろん、麻紀にもこの場所を教えておいてある。きっとこの場所に戻ってくるだろう。

確信があるこの怖さ。

きつと俺の弱点はここにある。

すぐに人を信じてしまう。

口では信じていないようなことを言っていたとしても、心のどこかでは信用し、頼ってしまう。

「それが怖いんだよな」

ピンポーン

一つの呼び鈴が鳴り、ほらねと口元が緩む。

「はい」

リビングにいた体を動かし、玄関の戸を開けると、麻紀と状況がよくわかりませんと顔にそのまま書かれているような、小学生から中学生くらいの背丈をした男の子が一人、立っていた。

しかも、状況が読み取れていないうえに、俺の登場にも驚いているようだ。「えっ」と小さくつぶやくのが聞こえた。

「麻紀？ その子は？」

「事情聴取しにつれてきた、重要参考人。みたいな感じです」

なんて苦笑する麻紀の顔は、特別脅されたり、危害を加えられた様子は見当たらない。

男の子も、どちらかといえば無理矢理着いてきたというよりは、無理矢理つれてこられたほうに似ている。

あともう一つ感じたのは、いつだったかの雨の日に、転けていた女子高生を見たときみたいに、この子もどこかで見たような気がした。

「とりあえず入って」

と家のなかに招き入れる。

この子なら、どうして俺の記憶にいるのかわかる気がした。

「麻紀、怪我とかは？」

「全然平気ですよ。すべて穩便に済ませるのが一番ですからね」

「無理矢理つれてくるような奴が穩便って……」

ソファーに座り、につこりほえむ隣で、歩と名乗った男の子がコップを持ちながらぼそりと突っ込んだ。

聞いた話によれば、この歩くんに困っているところを助けてもらったらしい。

「ねえ、歩くんさ、一回でも俺と会ったことある？」

「は？ まあ、いちおう俺は遠目から見てるけど、確かあんたはこっちには気付いてないはずだから、こうやって面を合わせるのは初めてなはずだけど？」

無理矢理つれてこられたのがそんなにいやだったのか、ムスツとした表情は絶えることはなかった。

「遠目で？」

「あんた、相澤とか言う奴に、一回でもさらわれてるんじゃない？」

「え！？ うん。相澤を知ってるのか？」

「よくはしらん。ただ、あんたがその相澤言う奴に誘拐されるのを見ただけ。まさか、助かってるとは思わなかったし」

「あの場所にいたのか！？」

「ああ。どうすれば良いのか、助けてほしいのかもわからなかったから、着いていくだけ着いていったけど、まあ店の前で断念した。つてところだよ」

「店！？ それはどこの」

「口では言いにくい。住宅地に地味商売してますよって言わんばかりの店だった」

もし、そこからさらに移動するということさえしていなければ、あの地下は店の下だったということか。

「でもおかしいとは思わないか？」

「辻さん？ おかしいって……」

「だって、店のなかに気絶してるやつ抱えてなかに入って、そして俺を閉じ込めた。客の一人くらい、その姿を見て不思議に思ったっておかしくはないはず」

「もしその人たちは、“お客さん”じゃなくて“仲間”だとしたら？」

にやりとほほえみ、歩がそういった。

「だったら納得はいく。客が何人くらいいたかはわかる？」

「地味なくせに結構お客さんはいた……あ」

ハツと何かを思い出したかのように、目を見開き、口をぽかんと開けた。

「もしかしたらやばいかも。あの場所はなれるとき、知らない人と顔合わせたんだ」

「どういう人？」

「髪は長くって軽くパーマが入って、クルクルというイメージで。顔もくつきり二重で、真ん丸な瞳身長は高くも低くもない、160cmを超えているだろう程度の女性」

必死に思い出そうと、目をぎゅつと瞑り、無理矢理単語をつなげるように口を開いた。

それもどこかで聞き覚えがあった。

「ちよつと待った。少し眠ってもいいかな？ 麻紀、五分経っても起きなかったら無理矢理起こしてもらえないかな？」

「……？ わかったわ」

「あいつと会話する」

「できるようになったのね」

「ああ」

「は？」

会話がわかっていない歩の半分裏返った声を聞いて俺は眠りについた。

「ラストイカ！ 教えて！ さっき歩が言った特徴を思い出して！  
あと、歩とどこであってるのかも」  
『なんだいきなり呼び出して……歩という男の記憶はないけど、さ  
っきの特徴は、前来た転校生とまったく同じだな。まあ、女とい  
うのはほとんどクルクルしてて160前後だろう』  
「……でも、俺はあの女には触れてほしくなかった。それに歩の言  
った女。きつと同じ奴だ……ありがとラストイカ！ 愛してるっ！  
』やめてくれ！！』

「歩が見たそいつ……その女、もしかしたら敵かもしれん」

自力で目が覚めると、目の前には、フライパンとお玉を構えた麻  
紀が、少し残念そうに立っていた。そのおかげで目覚めばうちりだ。  
「ってことは、店のなかにいる奴らって……」

「ああ。歩が言ったとおり、お客さんではないらしいな。にしても  
麻紀、頼もしくなったな」

「まあね、あれから何もなかったわけでもないからね。いなくなっ  
てから数日、短かったわ」

「そうか」

「ちよつと。勝手に呼び捨てにしないでくれる？ そして、いきな  
り話しそらさないでもらいたいなあ」

話がかわったことに対し、プウツと頬を膨らまし、顔をフィツと  
背向けた。

麻紀と顔を合わせ、あまりにからかい甲斐があることに気付いて、  
ニツと微笑み合う。

「ごめんごめん。ところで麻紀、“あれ”はどうなった？」

「……んー。初めてやることだから、微かにしかわからない。いや、全然わからないに等しいわ。歩くのを頼ったほうがよさそうだわ」

「そうか」

頼んでいたのだって、急なことだったし、初めてなことならばなおさら仕方がないだろう。

しかし、歩というこの目の前の男だって、あまり覚えていないだろうことをいつていたから、道順を書いてもらうというよりは、連れていつてくれたほうが早いだろう。しかし、もしその道程で前にあったクルクル女と遭遇したり、歩の顔がブラックリストかなにかに書かれ、相手の仲間に知れ渡っていたら。

無事、帰すことができない可能性もある。一度ならともかく、この先も巻き込んでしまいかもしれない。

「歩くのは俺たちに手を貸してくれる気はないかな？」

「手を貸すって、別にそこを教えればいいんだろ？」

なにも、難しいわけではないと、胸を張るように言う。そのノリが一番怖い。

「そうなんだけど、覚えてるかな？ 書いてほしいんだけど」

「はあ？ 歩いてみねえとわかんないし。別に連れていつてやるよ？ なに？ なんか問題でもあるわけ？」

「……もしかしたら、君を巻き込んでしまい、危ない目に遭わせるかもしれない」

力を与えられていない、しかも年下の子に“もし”という危険を負わせたくない。

ジッと見つめ合う俺と歩。

（わかってくれるかな……）

「危険…… 危険なら、余計に関わりたかもしれない」

「はあああ！？」

あまりにも意外な返事をされて、思いつきり声が裏返ってしまった。

（こつりゃあ、まったく信じちゃいねえな）

ため息を吐こうとした瞬間、スッと視線が下に向き、ボソリと声が聞こえた。

「……ワタル……」

きつとこのつぶやき方は、俺や麻紀には聞こえていないと思っ  
ているだろう。いや、無意識に発した言葉。だろう。

麻紀の方をちらりと見ても、少し暇なのか、物珍しいと周りを見  
回している。

「……わかった。じゃあ麻紀、いつ行く？」

「この子、連れてくのね」

「うん。連れてくたっていつでも、場所教えてもらうまでだけど」

「そう。私はいつでも構わないわ」

「なら、歩く今は今から平気かな？ 近くまで行かなくていい。見  
えてきたら指差してくれるだけでいいんだ」

視線を歩に戻すと、真剣な力強い瞳で言ってくる。

「……最後まで付き合わせてもらえないか？ はっきりとした状況  
は読み取れないけど、乗り掛かっただけじゃいやなんだ」

何かを、抱えている瞳。

きつと、なんと説得しても納得はしてくれない、頑固な子供だっ  
たらしい。

軽いため息を吐き、ソファアの背もたれに背中を預ける。  
「わかった」

ちらりと麻紀の方を見ても、ただ微笑んでいるだけだった。



## 第23話

相澤という男に会うため。いや、もう一人の杵島という、沚の友達を救うため、俺たちは足をすすめた。

まさか、この麻紀という女を助けたが故に、こんなことに巻き込まれるとはおもわなかった。

実際のところ、着いていくといったのは俺だけど……。

あれは半分脅されたようなものだ。いや、餌に釣られてしまったというべきか。

『渉のことと何か、関係があるかもよ?』

(つていわれちゃあ、オトナシクなんてしてられねえだろうが……)

渉の姿をした、渉と同じ声・表情・仕草。

これさえなければ、おとなしく場所だけ教えてさっさと帰っていただはずだ。

「ここか」

「うん」

途中までの道が知りたかったため、杵島という男の家。前に言い争いをしていった場所までいったん連れてきてもらい、そこから通った景色を必死に思い出して、問題の店までやってきた。

ちらりと中を覗くと、中にはたくさんの客。雰囲気はクラブに似ている。前回来たときと、雰囲気はかわらないようだ。

軽い扉に、ゆっくりと触れ、沚が手前にひっぱり開けようとする。

グッ……………



.....

引いた手は、ピクリとも動かない。

引かさらなかったのだ。

押しなのかと、押してもみるらしいが開く様子もない。

「……客差別？」

ムツとしながらもその戸から離れると、次に触れたのは麻紀だった。

引きも押しもせず、目を閉じ、少ししてから引いてみる。すると、その戸は簡単に開いてしまう。その姿を見て、余計に機嫌を悪くする辻。

でも、ただ少し置いてから開けたにすぎず、特別な何かをした様子もなかった。

「なるほどね」

「どういうことだよ」

「いったん退きましょ」

そういつて、簡単には動いてくれないだろう辻をつかんで、麻紀は来た道を少し戻っていく。遅れをとらぬよう、俺も着いていく。

店が見えなくなる位置までくると、辻と向かい合い、麻紀は説明をする。

「いい？ あの中にいる人みんな敵よ。中に入ったら周りの人に助けを求めたって敵を増やすだけ。あの扉は、力がある人しか動かせないようになってる」

その説明を聞いても、辻は眉間に皺を寄せて「じゃあなんで」と言わんばかりに不機嫌は深まるばかり。

あの戸を引けなかったってことは、辻さんには力がない。

でも、俺はその前に大きなところが気になって仕方がない。

『力ってなんだよ』と言いたいのが、今のこの状態で聞くのはあまりにも場が悪い。

歩きながらでも、聞いておくべきだっただろうか。

『力というのは……』

聞き覚えのあるその声が頭に響く。

いきなりのことで、体がビクツと跳ねた。しかし、運がよかったのかその姿を二人にみられることはなかった。

「で、その引く手に『力がありますよ』という証明。つまり、取っ手に対して力を使わなければならないということ。だから、今は私が戸を押さえるから、その間に二人は中に」

「了解」

『この地球環境や、人間に備わっていた力が、自分の思い通りに利用できる力のことだろう。かつて、渉というおまえの半身が氷の力を持っているということ』

麻紀の説明と、この声が被る。

どちらにも耳を傾けていると、さきに辻たちが歩きだしてしまう。それに置いて行かれないように、足をすすめる。

その間も、声は力について説明をしてくれる。

（渉が……力の持ち主……）

『姿を消してしまったのは、渉がその力の持ち主として選ばれなかったからだ』

（選ばれなかった……それは誰が選ぶもの？）

『氷の証である……この俺だ』

扉の近くまで来た。

言っていたとおり、麻紀が開けて最後の俺が入るのを待つ。

扉が閉まると、中にいた人たちの視線がすべておれらにささる。

そのことに対して、麻紀は力強く。辻は少し不安げに。俺は……

無心に立ち向かっていた。

いつたいここからどうするつもりか。

この先は入ったことも見たこともないため、道しるべにはならない。

ちらつと入ってきた入り口を見ると、そこには扉の近くにいた客が、逃げ場を防ぐように立っていた。

視線を先頭に移った麻紀に戻すと、その前の方から一人の女性が、何やら楽しそうに近づいてきた。

その後ろには、取り巻きのように大の男二人が、守るように立っていた。

年齢は二十代前半から後半に移ろうとする年代。髪は背中の中辺りで、クルクルよりもクネクネしているようなパーマ。

胸の谷間は見せるためにありますと言わんばかりに開いた服のうえに、黒いカーディガンに似た。しかし、カーディガンとは違うような何ともいえない、セレブを意識しましたといわんばかりの格好下は、太股丸出しのぴっちりした白く短いスカート。

背丈は、ヒールで2〜3センチほど高くした170もないくらい。片手にはタバコ。不健康極まりない。

コツコツツとならしながら歩くその足は、麻紀のすぐ目の前でとまり、少しだけ前のめりになって麻紀と顔を近付けていう。

「はじめてみる顔だねえ。歓迎してあげるよ。どんなパーティーが好みで？」

からかうように、その声を張り上げる。

（あの人は、選ばれた人？）

『さあな』

（でもここにいてことは力があるってことだよな）

『たぶんな』

(……どうして、渉を選ばなかったの)

『それはいずれわかる。いや、いずれ教える。今はそんなことを考えている場合か?』

(じゃあこの場をどうにかするのに、いい案はないの? あの女、こっちが何も答えてないのに、勝手にパーティすることにして、オレらに飲み物用意しちゃったけど)

連れていかれたのは、その店のど真ん中のテーブル。

周りからも、冷やかすような目でニヤニヤしているのから、最初は視線をこちらに送ってはいたが、特に興味も持たない奴らの二つに分かれていた。

テーブルといっても小さいため、ほとんどの人がコップを手に持っている。

持たされはしたが、飲む気にならないのと、りんごジュースは嫌いだ。

「はじめてみるけど、どうしてここへ?」

その女性の問いに答えたのは、意外にも麻紀ではなく辻だった。

「んーこってそんなに目立つ装飾ないじゃん? なのにどうしてこんなにお客さんがいるのかなって思っで。ねえ、お姉さんはこの店に何に魅せられたの?」

少しだけ大人びて見えていた辻が、すぐく子供っぽい表情仕草で聞き返す。

「そうね、あなたも言ったけれど、ここ、目立たないから。だから好き。それに皆仲良くて、知らない人同士でも比較的話しやすいのよ」

『どうにかなりそうだな』

(……でも、その捕まっただけという友達に会うにはどうすればいい

る？ まさか、こんなところに堂々としてるわけなさそうだし）

『いったん退くんだな。そして通いつめれば、すこしは仲間意識持つてくれるんじゃないの？』

（なるほどね。この二人は、どうする気かなあ）

『さあ？ わからんが、一つだけわかったぞ』

（え？）

『沚という奴と、麻紀という奴。二人とも証持ちだ』

（その証って何？）

『俺みたいな奴らだよ。力の主。それを体に宿している奴は、殺されないかぎり沚のように消えたりはしない』

（どうしてわかるの？）

沚と女性の会話は未だつづいている。

『あ？』

（どうして二人がその持ち主だとわかるの？）

『もとは一つだったからさ。二人の神の片方が一人を裁き、罰を与えた。力を分解し、バラバラにして体内にバラバラに納めたのさ。裁いたほうの神は地球の神。裁かれた神は人の神さ。だから、一つの場合に神の欠片である、証の持ち主を集めてはいけない。だからわかるのさ』

(じゃあ簡単に言えば、一卵性の双子……がいっぱい……みたいな?)

『まとめればそんな感じだ。しかし、姿形は違うし性格も表情も違う。それに、あと何匹いるのかもわからない。集まりしだいわかってしまうから、未然に防ぎたい』

(……ふうん?)

長い説明を聞いても、何かしっくりこない。  
現実味のないことを、一から十まで並べたのを、無心に読み続けているみたいだ。

この声に表情がないわけではないが、難しすぎてよくわからない。

(今助けるその男は、証の持ち主なの?)

『さあ……しかし、この店のどこかに証<sup>それ</sup>はある』

(どう)

『はっきりした場所まではつかめない。……トイレ』

(……行きたいの?)

『違うわ! 行く振りして、少し中を探ってみろ』

(へえ、意外と頭良いじゃん)

『意外意外うるさいよ』

（それ、前に俺が言ったセリフ）

「会話の途中悪いんですけど、お手洗い失礼しますね」

「ああ、場所わかる？ ボウヤ」

「探しますよ」

印象が悪くならないよう、にっこり笑顔でいうなり、にっこり笑顔で女性が答える。

“ボウヤ”という言葉に怒りが顕になりそうになったが、必死に押さえながらも、一向に減っていないコップをテーブルに置き、場所を離れた。

一応、トイレのマークがはられているのがわかったから、その矢印にならって、ゆっくりと足を進めていく。

通路は一方通行。

離れにあるのか、なかなかトイレにたどりつけそうもない。

先程までいた場所から聞こえてくる騒音は、もうほとんど聞こえなくなってきた。

突き当たりを唯一曲がりのあるほうにまがっていただけだというのに、不思議と騒音が再び微かに近づいてきている。

（そうか。遠回りに曲がっただけであって……って、どうしてそんなことを？）

疑問は募る一方。

『立ち止まらずにトイレに行け。大だ大。大していけ』

（下品！）

言われたとおり、トイレに行き個室に入る。

しかし、特別何かを食べたわけでもないから、でるもんもでない。

『ティッシュを通常どおりとって投げて流す!』

(はいはい)

言われたとおりに流して、普段どおりにでる。手を洗って何もなかったようにトイレをでた瞬間、声は再び命令した。

『さっき通った場所を歩け』

(一本道だつつうの)

言われたとおりにあるきだした。

突き当たりを左に曲がり、少し歩けば騒音は耳に入らず、右に曲がる突き当たり。

そこを曲がった瞬間、一瞬何か空気がかわった。

(気のせい……か?)

『気のせいなんかではない。その右壁のどこかに、違う道がある』  
「歩くん?」

「え?」

不意に声がかかり、振り向くとそこには麻紀が不思議そうに立っていた。

『この女、辻のメールとかいうやつ知らないのか?』

「ねえ麻紀さん、辻って人にメールできる?」

「ええ」

『壁を通ろうとすれば警報がなるかもしれない。そのうちにあつちに残された男が捕まれば意味がない。警報が鳴ったら逃げるように』

(わかった)



「ちょっと送らせてもらえる？」

「ええかまわないわ」

そういつてポケットから携帯を取り出し、メールの画面にした状態で俺の手に渡される。

少しだけ慣れない手つきでメールを送り、送ったメールを履歴から消すと、すぐに携帯を返す。

警報が鳴ったら、躊躇いなく逃げて。

扉は、あなたなら開けられるはず。

このメール、読んだらすぐに削除してください。

と。

メールをお互い削除したのは、証拠隠滅。なにか事故があった場合に、不利になるのだけはごめんだった。

これは、声の奴に言われたわけでもない、自己判断だ。

「でもどうしたの？」

「ちよつとね」

再び壁に向き合い、そつと右手を当てる。

空気がかわつたのは、その壁のどこから風が流れたから。

ほんの一瞬だったけれど、何かがわかった気がしたのだ。

（なあ、おまえが俺のなかにいるってことは、俺も涉と同じ力を持つてるってことで良いんだよな）

『ああ』

（でもどうすれば……あ？）

どうすれば、渉のような力が使えるのかを考えたとき、渉の力を知ったときに言っていた言葉を思い出す。

昔のことだから、曖昧さがでるが。

“こう……想像するっていうの？　こうなってほしいって形になるんだよね”

（想像……）

『証を持つものはそれだけでは無理だ』

（は？）

『証を持つものは、持たない人より強力な力を得ている。それを使いこなすには、証である俺との投合が必要だ』

（投合……）

『投合すれば、身体能力が普段よりも優れる』

（なるほど、で？　その投合の仕方は？）

『そもそも投合は意気投合。俺とおまえの力を合わせる必要があり、それにはお互いを知らなければならぬ』

（……なるほどね。おまえは渉とは性格も根性も真逆。似ているのは容姿だけ。名前は……シャベット）

『ふん。上等だ』

名前は不意に頭によぎった。

その名前に執着があるわけでも、特別何かがあるわけでもない。ただ、それしかないという断定だった。

名前を呼ぶと同時に、シャベツトはにやりとほほえみ、殺気に満ちたような気がした。

見たわけでもない、身体で感じた。

それとともに、体内に何かが流れ込むような、膨大な何かが胸の中で蠢いている。

そつと壁から手を離して、左腕に触れてみる。

（何かが生きている……この中で）

冷たくて、氷でカチカチに固められたかのように、あの事件以来動かなくなってしまった左腕が、昔を思い出す。

動かしていた俺。

俺の腕の中から外された渉の左腕。

今になってわかった。

渉の左腕は、俺の左腕の神経だったのではないか。

それを掴んでいた俺から医者が奪ったから、腕があれから使い物にならなくなったのではないか。

左腕が使い物にならなくなるより、渉の喪失がショックで、今まで自分の左腕の疑問は持たなかった。罪だと、そう思い込んでいた。シャベツトはいつていた。

投合することにより、身体能力があがると。

きつといま、動かすこの左腕はシャベツトのものだろう。

ゆつくりと目を閉じ、その妙な壁に手を当てる。

“こう……想像するっていうの？　こうなってほしいって形になる

んだよね”

渉の声を思い出しながら、ゆっくり目を開ける。

（想像……）

『一つの扉に、薄い氷の膜を張る感じ。張ったらそれを扉ごと壊すんだ。空気中の水分を収縮』

（水分を……大丈夫落ち着け……。俺なら……できる！）

左手に込める力などないはずなのに、胸のなかに蠢いていたものが、左腕を通じて外に流れ出る。

触れていた壁が、一瞬にして氷に覆われ冷たい。しかし、少し角度を変えて見なければ、肉眼ではわかりにくい薄い氷。

なんとなく麻紀には見られたくなくてその氷を壁ごと蹴り付けると、薄い何かが割れる音と、大きな爆音が聞こえ、壁は崩れ落ちていく。

目の前には先がわからない下る暗い階段。

『躊躇うな！ 中に入れ！』

その声と共に足を中に踏み出させる。

一段おいて踏み外さぬように。

一瞬ポカアンとしていた麻紀も、足を踏みだしたのがわかった。

本当に少ししてから耳障りな警報が鳴り響いた。

## 第24話

『躊躇うな！ 中に入れ！』

その声と共に足を中に踏み出させる。

一段おいて踏み外さぬように。

一瞬ポカアンとしていた麻紀も、足を踏みだしたのがわかった。  
本当に少ししてから耳障りな警報が鳴り響く。

「ちよつと待つて！」

「黙って着いてきて！ あの人ならきつともう逃げてるはずだから！」

警報がうるさくて、大声を出すしかない。しかし、ここで大声をだすのも本当は避けたい。

警報が鳴らないこともないだろうとはおもったが、まさか本番で怖気づきそうになるとは思わなかった。

階段を下る足も、足の付け根からガクガク震える。

どうして俺はここまで体を張っているのだろう。

どうして家でおとなしくしていなかったのだろう。

どうして……俺はここにいるのだろう。

渉のことにしたって、渉のために生きようとすれば、こんな事に巻き込まれないようにできたはずだ。

きっとこの人たちと、店の前で別れていれば、もう関わる事はなかっただろう。

そんなことを考えているうちに、階段は終わっていた。

薄暗い照明で、天井につながっている黒い柵。

「ここは……」

必死に走ってようやく追いついただろうに、まったく息切れしていない麻紀。

思ってみれば、俺も足の疲れや、体力的に息があがる様子はない。

（これが投合の力……）

体に蠢く何かはまだ、体のなかにいる。

それを確認すると、次は柵に手を触れず膜を意識する。

思った通り張らざるそれを確認する前に、足でその柵を蹴りあげる。

再び割れる音と、金属と金属が擦り合う音が響く。

砕け損なった鉄の柵。棒を手にし、一本道と、左右には牢屋みたいな柵と壁で囲まれた道へと足を踏みだそうとする。

後ろからは大量の足音。それと、目の前からは見覚えのある一人の男。

「こいつ……相澤」

後ろで麻紀がそうつぶやく。

「おやおや。いつだったかのお二人さん。たしか、キョウダイだったかな？ 悪いけど、ここを通すわけにはいかないんだ」

「ごめんなさい。あなたの相手は私がするわ」

すつと俺の前に表れたのは麻紀。

相澤を睨み付けるように、強気な口調で前にでる。

「手荒なことを女性にはしたくなかったのだが、仕方がない」

後ろから迫りくる靴の音は、もうすぐそこまで来ている。

それは麻紀も感じ取っていたのだろう。左手を一度胸に持っていていき、それを力一杯相澤に向かって何かを投げるように振り出すと共に大量の水が流れた。それから逃れるかのように、相澤も左手を出して同じくらいの水量を出し、ぶつけ合って対抗する。

その間にその水の横を通り、奥へと進もうとするが、すぐに相澤の舌打ちが聞こえる。

しかし、今の状態で力を抜くわけにもいかないのだろうが、一瞬水量が減ったのがわかった。

そこをつくかのように、麻紀は水量を上げ相澤を流すように、麻紀の水が相澤を覆う。

チャンスは逃さない。

その水の固まりに手を当て、瞬間的に氷の膜にする。

『膜じゃない！ 塊にするんだ』

言われたとともに、反射的に力を増幅させ、集中する。

パキパキッと氷になる音が鳴る。

後ろからは、人の足音。すぐそこまで降りてきたのだ。

「階段の方に水を！」

「は、はい！」

麻紀は言われたとおり階段に向かって大量の水を噴射させる。その水を瞬間的に氷にし、階段からこちらの通路の切れ目に、氷をまわりの壁と一体化させる。

しかし、それでホツとはしてられない。奥にどんな力を持った人がいるのかもわからず、俺は人探しに集中した。

しかし、探すほどもしなかった。

「辻か！？」

聞いたこともない声が奥から聞こえてくる。

目的の男。杵島だろう。

足を進めると、両手両足が鎖のようなもので壁につながられ、自分では身動きがとれない状態にある。

牢屋にあるような柵を、再び凍らせ、先ほど手にした鉄のパイプでそれを破壊する。

身長は俺より高く、地面からも高めに位置しているため、何をどう頑張っても俺の身長では、両手に届かない。

「麻紀！」

「両手からね」

麻紀は器用に水の玉を二個投げ付け、鎖にぶつかり弾けたとき、

それを氷り化する。再び二つ投げ、同じように両足の鎖も氷り化させる。

鉄パイプを麻紀に渡し、両手を砕いてもらうのと同時に、両足も解放させる。

「ありがとう……君たちは……？」

「説明は後！　どうやってここから脱出するか考えて！」

俺はそう怒鳴り着け、まわりを見回す。

何か良いものはないか。

最初、氷で閉じたところを解放し、麻紀に水で人を流すようにまた大量の水を出してもらい凍らしてやろうかとも考えたが、凍らしたそれをどうするかとも考えた。

その上を歩くにも、滑って上れないだろうし、その水を凍らせる体力も不安だ。

身体能力があがるといつても、体力にも限界がある。

今この現状で、多少息があがっている。神経的集中を使いすぎた。しかし、こう考えている時間ももう少ししかない。

氷の壁は、奥の者たちの所為でヒビが入りかけていて、そんなにもたない。

だんだん、辻はちゃんと逃げられたのか。

捕まってしまったらどうしようなど、違うことを考えてしま

う。

「歩くん！　辻はちゃんと逃げれた。今助けに来てくれる」

「助けにだど！？」

「ええ。辻さんだって、のんびりなんてしてられない。中からではなく外からね」

「……そういえばあいつって……」

「なんの力を？　と言おうとした瞬間、氷が割れ、崩れ落ちる音が響き渡る。」

「困っているようだったから善い待遇してやったっていうのに、その代償がこれかい？」



「こんなところに人とらえてどうするつもりだったんだよ？」

「あんたたちには知る権利なんてないよ？ おとなしくしていれば良いものを」

先頭切って出てきたのは、この店に入っすぐ声かけた女であり、ジューズを出した女。

その後ろからは、怖い怖い男たちが俺たちを囲もつと中に入ってくる。

「相澤は……役に立たなかったかい。ボスのお気に入りの人だったんだけどねえ」

クイツと顎で、相澤がいるだろう方を見る。

すると、もう氷が解けたのか、中から壊されたのか、座り込み上がっている息を整えている。

(いつのまに)

近くには杵島がいて、相澤の腕を首に回させ、グイツと無理矢理でもたたせる。

「わかった」

耳元で相澤が杵島に何か言つと、うんといったんうなずき、杵島はじつと女の方を向き直し、相澤を引きずるように近づいてくる。

どうするつもりか、俺よりも前に立ち、女と対峙する。

「相澤……あんたもしかして、私たち……いいえ、ボスを裏切るつもり？」

「はっ……俺は辻を裏切った……でもあいつは、それでも俺も助けようとした。だから俺もそろそろ作戦実行するさ」

「だったらあなたも始末するわ。どうせ証持っているわけじゃないしね」

「俺は最初から裏切るつもりだったさ。始末するなら、こつちも抵抗するさ」

「最初からこの状態になることわかってたっていうのかい」

「まあ、そうなるかな」

「ちっ」

女が舌打ちすると同時に、右手を相澤に向け、一瞬力んだと思えば、炎が相澤と杵島を力強く覆う。

（あの女、炎……か）

あまりにも覆うのが一瞬のこと過ぎて、こっちが手を出すこともできない。

不意に杵島が相澤の足元に何かが動いたのが目に入った。

『麻紀という女の近くにいろ。いつでも力を使う準備をしている』

（え？ うんわかった）

そつと足を進めて麻紀の隣に立つ。

（なにをするつもりなの？）

『足元をよく見てみる』

（え……何か流れる……って言ってもどうする……つもり？ 水……水……水……）

再び視線を二人に戻すと、炎で覆われたその下で、自分達を水で覆っていた。

その水が地面に落ちるなり、床一面には水が浸る。

階段の方に目を向けると、煙が充満すると共に、焦げ臭さと消防車のサイレンが響き渡る。

サイレンに耳を向けたみんなの視線を確認するかのようになり、ちらっと見た後相澤と杵島はしゃがんだ。

一瞬杵島の手から小さな光が見られる。

（光……？）

『電気か！』

麻紀と俺の足元だけを氷に変えて、水に触れないようにする。  
水は電気を通す。

純粋な水は通さないはずなのだが、大丈夫なのかと不安になった  
が、今は任せるしかなかった。

手が水に触れた瞬間、水の中を光る電気の筋が走る。その数本の  
筋が水に触れているすべての人を痺れさせ、一瞬のうちに立つこと  
ができなくなる。

「いまだ！」

軽がると電気を食らった相澤を担いだ杵島が、炎に覆われている  
階段へと足を進める。

「私が先頭切ります」

積極的に麻紀は走って階段を上っていく。

後ろを俺が。前を麻紀が水でカバーしながら出口へ向かおうとす  
ると、消防の人が中に入ってきていた。

麻紀はすぐに水の膜を落とし、オレら四人は救助された。

相澤と杵島という男はその後病院に運ばれ、俺と辻に麻紀は、一  
旦俺の家に来た。

時間はすでに零時を過ぎており、日付が変わった。

「歩……帰ったのね」

「か、母さん」

家に入ると、気付いた母さんが玄関まで来た。

母さんが帰ってくるのはいつも夜遅く、だいたい日付が変わるかわわらないかの時間。だから起きていたのだろう。

「この時間だから涉かと思っただじゃない！ 紛らわしいことしないでちょうだい」

「ゴメンナサイ」

心のない返事を聞かずにリビングへと颯爽ともどつていった。

「中入って。俺の部屋そこだから。何か飲み物用意してくるからゆつくりしてて」

部屋に入るなり、ベッドのサイドテーブルにある涉と俺のツーショットが入った写真立てを伏せさせる。

「え、ええ」

「お邪魔します」

母は、涉がいなくなってから変わった。

時には俺を涉だと思い込み、時には俺がいることに疑問を持ったり、邪魔だと罵ったり。

仕事は夜遅くまでしてくるようになったし、父さんはあまり家に帰ってこなくなった。

仕事はしているらしいし、貯金もきちんとしている。

だいたい家に来るときは、母が居ないのを承知しているとき。俺の様子を見に来てくれる。でもそれも仕方がない。

母さんも父さんも、昔からおとなしくていつも笑顔でいる涉が好きだった。だからと言って、今みたいに俺の存在を貶したりはしていなかった。

父さんと母さんも仲がよかった。それを壊したのは、すべて俺だ。

三人分のお茶を持っていき、バスタオルを手渡す。

「お風呂入って来なよ。着替えは二人とも父さんのだけど良いかな？ 明日には洗濯物乾くと思うから、服洗濯機のなかに入れておいて。俺は最後でいいから」

「ありがとう。じゃあ麻紀先に入って来なよ」

「うん。わかった」

着替えを受け取り、麻紀は部屋をでていった。

男二人の沈黙。

それを先に壊したのは辻。

「えっと、今日は本当にありがとう」

「別に。礼を言われることまではしてないよ。ほとんどあの女がやったからね」

「あの場所を見つけてくれたのも、杵島を救ってくれたのも歩くんだと聞いた」

「……ねえ、あんたの力って、もしかして炎？ あの火事を起こしたのもあんたでしょ？」

「ああ。歩くんは氷……？」

「麻紀から聞いた？ そうだよっていつても、力を使ったのも店に入って初めてだったから、ぶっつけ本番だったけど」

なんて微笑みながらも言ってみる。

「ああ、俺もそうだった。杵島と同じように捕まってる時、あの鎖を根性で溶かしたんだ」

楽しかった過去を話すように、口元を上げ、うつすらとほほえんでいた。

「……捕まってたんだ？」

「うん。もともと相澤は俺を捕らえる気はなかったみたい」

「へえ。捕らえられた理由は、知ってるのか？」

「いや、教えてもくれないし、まったく思いつきもしない」

ほほえんでいた口元は、少しだけ落ち、裏切られたようなほほえみを見せている。

すごく淋しくて、でも相手を憎めないといわんばかりの笑みは、すごく強くて勇ましかった。

まだ子供心の俺は、それが「強い」ということなんじゃないのか。そう思えてくる。

きつと、この先もこの人、辻のまわりには色々な人が集まってく

る。そういう、人を引き付ける何かをこの人は必然的に引き寄せていたのだろ。いわば、潜在能力のように。

「あんたは、相澤と言う男があんたを裏切ったと思うのか？」

「わからない。でも、今まで裏切られたって思わなかったわけでもない。何か理由はあるかもしれないって思い込んでても、心のどこかでは裏切られたって思ってた」

「でも憎めなかった？」

「うん……憎もうとしても、何かの希望を持とうとしてる。でも俺を逃がしたときわかった。相澤は裏切ったわけじゃないって」

「っこりほえんだその姿は、何かの希望と単純な嬉しさが入り交じっていた。」

俺は何か役に立てたのか。

もう必要ないのか。

でも、この人の近くに居たい……。

「たぶん、その相澤、もともと自分がいた組織っていうのか仲間っていうのか、そういうのを裏切るつもりだったと思う。たぶん、捕まえる理由を知っていたから」

「……理由を知っているのか？」

「ほとんど俺の推測だけど？」

「かまわない。話してくれ」

真剣な目付き。

その目付きが、俺の何かを揺らした気がする。

「たぶん、あそこの牢屋には辻や麻紀、杵島って人が持つてる証が並ばれるはずだった。それは、そのすべての証を手にして、何かを成し遂げてみたいと考えている奴がいるはず」

「何かを？」

「世界征服とか、人類滅亡とかかな。証っていうのは、もともと二人の神様のうちの一人の神様で、悪いことをしたただかなんだかで、裁かれバラバラにされた。バラバラにされたのは人の神」

「……神秘的だな」

「神秘だもん。証に何も話してもらっていないの?」

『証はバラバラにされたから、昔の記憶とか、知識とかもバラバラにされたんだ』

「うんなにも……むしろ俺の記憶以外なにもないらしい」

「わりい、それもバラバラにされたんだって、今聞かされた」

「そうなんだって、君も証を……?」

うんと首を縦に振ると、そうなんだと、喜ぶことも悲しむこともしない。

「で、そのバラバラにされたものを、一つの場所に集めることによって、何かが起きる。もしくは、一人の神様として復活するか。あくまでも俺個人の意見。証もそこまではわからんってさ」

「そつか……。裁かれた人の神……裁いたのは何の神?」

「地球の神。その中に罰としてバラバラにされた人の神の欠片を納めたんだって」

「じゃあ、その欠片が証で、一つにまとめたら、バラバラにした怒りを地球の神にぶつけてしまうかもしれない……か」

話している俺でも、あまり理解していないというのに、辻は俺の説明で理解し、より難しいことをいつてくる。

どうなるのかはわからない。何が起きてしまうのかもわからない。『どうなってしまうかは、なってみないかぎり俺にはわからない』

(よなあ)

「でも地球の神って、人型? それとも、地球そのもの? 地球そのものだったら、欠片を集めたらその集まった欠片はどうするつもり?」

「んー……いつそのことそうしようとしてるボスとご対面っていうのは?」

「するとしても、私はまだ接触することだけはしないほうがいいと思うわ」

ガチャリと中に入ってきたのは、風呂上がりの麻紀だった。

「聞いてたのか」

「ええ。だいたいね」

「辻、入って来なよ」

「いいのか？」

「ああ」

「じゃあ失礼していつてくるよ」

物を持って部屋から出る。

風呂場までいったのを確認すると、俺は立ち上がりテーブルをずらす。

「麻紀、この部屋で平気？」

「ええ、構わないわ」

物をどけ、押し入れから客用の布団などを取出し、軽くひいていく。

「あなた……左手使わないのね」

「え？ ああ、俺の左腕。動かないんだ」

自分の左腕を、動く右腕で持ち上げそつとほえむ。

「でも、力を使うとき動いてたわよね」

「それがわからないんだ。どうしてあの時は動いたのか。でもこの動かない左腕は、罪の証だから」

「罪？」

「そつ。まあ、あんたが知る必要もないさ。知らないほうがいい」  
渉をこの世から失わせた罰だ。

あの力も、俺の力ではなく渉の力。

なにもかも、すべてを渉から奪ってしまった罰だ。だから、左腕を持っていかれた。でもこの考え方は、ただの逃げだ。すべてを受け入れる覚悟ができていない。

「ねえ、どうして証を持たない力を持った人がいると思う？ 証を持たないのなら、力も得られなければいいのに」

「……」



「この世は醜い。美しいものなんて、何一つない。神様だって、残酷な運命しか与えない」

「本当にそう思う？　美しいものは、一つはかならずある。基準は人それぞれ違うけれど、癒してくれる何かがあるはず」

「癒してくれるもの？　それを神様が奪っていったのに？」

唯一俺をわかってくれようとして、存在を否定しない相手。渉。渉が幸せになれるのならば、俺自身を犠牲にしてもいいって思えた。生きていけると思っていた。

癒しを与えてくれる。

そう感じていた。

それを、俺が奪った。神様がそういう運命にさせた。

俺が生きていなければ、神様は渉をつれていかなかったし、母が怒り狂い、俺の存在を消そうとしなかった。

どうして俺を生み、この世に放り込んだのか。

過程で手違いが起きてしまい、同じものを作ってしまった。きっとそうだ。そうであるはずだ。

「……何を奪われたの？」

「俺の、すべて」

## 第25話 振り向けばスタート地点

結局、二人が眠りについたのは三時を過ぎていた。

明日は休みだから遅くまで寝られていても問題はないが、この先二人はどうするのだろうか。

止って方は、家に帰れるだろうけれど、麻紀の方はどうなのだろう。聞けば、遠くの方から来ているらしく、こちらに通うには大変だろう。

なかなか寝付けずに、俺はサイドテーブルにある渉と俺の写真をとった。

急いで伏せさせたため、無造作におかれていた。

俺は渉の肩に腕を回して、できるだけ自分に密着するように押し付け、空いた手でカメラに向かってピースを向ける。

渉は控えめにほほえみ、俺の居ないほうの手でピースを見せ、軽く首を俺の方に傾ける。

きつと気付いていたのは俺だけだと思うが、渉は控えめにもピースをしていない、俺側の腕をそつと腰に回していた。

渉といるときだけ大胆になる俺は、あまり他の人がいるところで渉にむやみに触れなかった。

手をつないだり、少しくつついたりしてはいたが、肩に腕を回すことなどそうなかったが、意外にも渉は俺とくつついているのを好んでいた。

（お互い意外と甘えん坊……だったんだよな）

『仲がいいな』

（うらやましい？）

『何が』

(仲がいいの)

『別に？ いいことなんじゃないのか』

(そう……だね。うん)

「じゃあ、お見舞いいつてくる」

「ああ」

お見舞い。

相澤と杵島という男のお見舞いだ。

二人はまだ相澤がついていたボスとご対面はしないものの、準備ができしだい会うつつもりで いるのだろう。

その頃俺はどうしているか、辻たちとはどんな関係にいるか。敵か……味方か……。

二人のいない家で一人、ボーツとそんなことを考えていた。

病院に着くと、杵島と相澤は、二日たった今日で元気を取り戻していた。

医者に話を聞いてみても、回復は思った以上に速く、早めに退院できるらしい。

「洩」

「よっ、二人とも元気そうじゃん」

「まあな、俺だし」

杵島は何かと楽しそうだが、俺を見た相澤は、少し苦しそうな瞳をしていた。

「どうした相澤。傷、痛むのか？」

「いや、平気だけど……洩、俺……おまえにも、ひどいことしたし。なんつうか」

「気にすんなよ。確かに心のどこかじゃ裏切られたとも思ったけど、信じてたから」

「ああ」

「でも、相澤いまじゃもう向こう側を裏切ったことになるんだろう？ 麻紀から聞いた」

「ああ。元からあつちを裏切るつもりでいたからな。俺の命もそうないことくらいしってるし、死ぬくらいだったら、あつちに尽くしたところで時間の無駄だしな。だから、この命がこの世に残ってるうちに、何でも聞けよ。わかること、全部話す」

「わかった」

端に積み重ねてあったみどりの丸椅子を二つとり、並べて置く。

枕に近いほうに俺が座り、隣に麻紀が座った。

（この世から命が……か）

「どうして、あの牢屋に杵島を入れた」

「あそこに並ばれるのは、おまえらのように証を持つ者だ。洩を逃がしたのは、やり方が気に入らなかったから。ボスは、証を集めて

自分の物にしたいんだ。この世界を滅ぼし、裁いた地球が、体内に証をばらまいたのを後悔させてやるって」

「証が集まると、膨大な力を得る……？ でも、俺たちが抵抗したらどうするんだ？ 力を集めるっていったって、どうやって」

「ボスの力は、証のなかの心臓なんだ。そうだな……神の肉体というべきか。ボスを中心に、証はバラバラになった」

「心臓……」

「ボスの名前は悠汰といわれている」

「悠汰……」

「でも、何かがおかしいときがある」

「おかしい？」

「俺、水で盗聴することもできるし。ボスは俺の力を奪ってお互い水で会話するんだけど、たまに何かと戦ってるんだ。苦しんでいるっていうか」

「そんなことまでできるのか……」

「そのボスって人の近くには、誰かいないのか？」

「聞いていた杵島が横から聞いてくる。」

「たまににいるけど、話してきたりはしない」

「そうか」

「顔は？ 見たことあるの？」

「いや、キングサイズのベッドが入るくらいの余裕がある大きさで、白い布が囲まれてるんだ。それがある場所自体薄暗いし、気味が悪い。声だって、変声機を使ってるようだしな」

「そうか」

「場所を教えたいのは山々だけど、行ったことがあるのは一回くらいで、何度か移動してるらしいから、今の居場所まではわからないんだ」

「そっか。わからないんだったら仕方がないさ。無理にとは言わないし」

「すまない」

「じゃあ、今日はこの辺で帰るよ」

ガタツと椅子をずらし、立ち上がると、杵島が待ってと制止させる。

「どうした？」

「今日来てない、もう一人の男の子」

「歩くん？」

「今度はその子もくるか？」

「どうだろう。相澤に会いにくいつて言ってこなかったから」

「会いにくいつて？」

「相澤を攻撃したのは俺だからって」

「だったら、俺は気にしてないから来てくれって言っておいてくれ」  
相澤は、まったく気にしていないというように、うつすらほえんでいた。

「直接礼が言いたい。もしこれないっていうなら、退院後に行くけどな。もともと、どこか負傷してたわけでもない。ま、相澤はもう攻撃食らってたけどな」

「うるへー」

楽しげに笑い合うその姿は、俺が望んでいた平和だった。  
バカなことを言い合って笑い飛ばす。

そんな一日が続けばいい。  
続くのならば。

家に帰ると、母も帰っていた。

ちようどいいと、麻紀を家にしばらく置いてほしいと言い、了承をもらって空き部屋を掃除した。

客用布団を取り出し、隅の方にまとめ、中心で向き合うように話す。

「学校どうしてるんだ？」

「退学。お兄ちゃんがなくなったことで、お母さんたちも現状呑み込めなくて、そのうちに逃げるように出てきちゃった」

「きちゃったって……そんな簡単に……」

「うん。でもね？ お兄ちゃん、自分がもうすぐ消えること薄々気付いてたんだと思う」

「……気付いてた？」

「お母さんたちは、いなくなっただっていうの、家出とか行方不明とかだと思ってるから」

「行方不明！？」

「ほら、死体が残らないから。死んだっていうのもよくわかんないことになるから、行方不明になったって。しかも、運悪くお兄ちゃんが食われてから一週間もしないで母さん帰ってきたからさ」

「そっか……」

「手紙がさ、見つかったんだよね」

「手紙？」

「これ」

ゴソツと、持ってきた手提げバックから、白いお手紙風封筒が出てきた。

手渡されるなり、もう封をとられたところから手紙を取り出す。

『こんにちは。いや、こんばんは。かな？ おはようかもしれないな。』

こういう手紙、一回で良いから書いてみたいって思ったのは間違いかな？

きっと、この手紙を読んでいるってことは、俺はきつと姿を消したってことだろう？ 麻紀。

本当は、おまえを残してはいきたくなかった。こんなしょうもない兄貴でごめんな。

でも、俺はおまえを残すことに、あんま未練はないんだ。全然な

いつてわけじゃないんだけどな。

だって、俺が信用する奴がいる。

この手紙を見たら、できるだけはやく、あいつのもとに行け。

麻紀なら、あいつが誰だかはわかるな？

よく、あいつの話で盛り上がったし、変なことも言い合った。あいつは本当に話のネタにしやすかったけど、その分、良い奴だ。良い奴過ぎて損してなきゃ良いんだけど。

最後になったというべきか、もしこの手紙を読んだら、麻紀はできるだけはやくあいつのところに行くんだ。

わかんねえけど。助けたのは俺たちの方のはずんだけど、あいつには助けられた気がしたんだ。

だから、悪いけど、俺に代わって、あいつを助けてやってほしい。また、次の世で会おうな。

兄貴より』

他には何も入っておらず、その手紙を封筒のなかに戻した。

「あいつって、俺？」

「ええ」

「……結局、二人には助けられてばかりなんだけどなあ」

なんて苦笑してしまう。

「そうでもない。お兄ちゃんがあんなに人のこと楽しそうに話す姿なんて、そう見えるものでもなかったから」

「そうなんだ」



「はああ、結局早めに裏切ったわねえ」

椅子に座り、脚を組んで、ちよつとばかり頬を手で優しく撫でるようなたちで、大きなため息をこぼす。

「そんなの、あいつがこつちについてからすぐにわかってたことだろう」

向かいの三人座れるくらいの、フワフワソファーのど真ん中に、偉そうにふんぞり返りながらも座る、小学校高学年くらいの生意気そうな男の子が、馬鹿馬鹿しいと言わんばかりに口を開いた。

その言葉にも、大きなため息をこぼす。

「ため息ばかり吐いていますと、幸せが逃げていきますよ」

紅茶が入ったグラスを、そつと私の目の前に置く男性。

いつも昼夜関係なくタキシードを着ている、25歳くらいのこの男は、身の回りをする人のように、いつもお茶や紅茶。茶菓子や洋菓子をタイミングよく持ってくる。

「毒なんて入ってないだろうな、藤堂」

「バカね和。この男が毒なんて私たちに盛るわけないでしょ」

「そうですよ。盛ったところで得はしませんから」

ニコニコほえんだままのこのタキシード男。藤堂は、ニコニコほえんでいる姿しか見たことはない。

元は、バーの店長だったのだが、先日どこかのバカが暴れて、相手に火を点けられ全焼。

一部の人間は助かったものの、地下にいたものは丸焼け。助かる見込みもなかった。

もちろん店長は、そうなることを予想し、焼ける1分前に、速やかに立ち去った。

残念なことに、私はそこに立ち合うことはできなかったが、一応仲間の一人が裏切った情報を楽しんでいた。

「フフフッ」

ついつい考えただけで笑みがこぼれてしまう。

「ヤス……思い出し笑い、気色悪いからやめてもらえない？」

「和さん、そんな直球に言わないであげてください。恭恵さんだつて、人ですからもう少し遠回りを……」

「藤堂。それはフォローのつもりか？」

「いいえ恭恵さん。本心です」

「尚更悪いわよ！」

「ヒーリン。今頃歩、何してるかなあ」

悩むときはお菓子を作つて気を紛らわす。それが私流だ。

今日はあまりにもいやな予感がするから、気を紛らわすためにクッキーを焼いていた。

『心配か？』

「いやな、予感がするんだ」

『ああ。心配なら会いに行つてみれば良い』

「だよ。そうだよ。毎度毎度ありがとうヒーリン」

『でも、行くのは良いけど、火は消していつてね。ちょっと焦げ臭い』

「へ……あー！」

使っていたオーブンのなかを見てみると、焼きすぎて真っ黒になっている、クッキーたち。

「最悪ー！ 力作だったのにー！」

「杵島」

「あ？」

「辻のこと、頼んだからな」

「は？」

退院の支度をしている最中、いきなり相澤がそんなことを言ってきた。

俺は検査入院みたいな感じだったから長くはかからなかったけれど、相澤は、歩という男に氷付けにされ、色々な器官が負傷しているらしく、退院までには幾度かの手術が必要らしい。

しかし、それも治らないわけではなく、“さよなら”を言うのは早い。

「俺には迎えが来たらしい。おまえがいるから辻の心配をしなくて済むのかもしれないって思ったからかな」

「でも、辻にはおまえが必要だろう？」

「杵島はもうわかってるんだろ？俺だって、ずっとこの世に残っているはずではないんだ。おれら証を持たない奴は、証を支えるためにいるんだ」

「でも……」

「良いからおまえはそれを持って病院から出る。この病室、おれら以外のベッドは空なんだ。運が良いだろう？」

「……わかった」

しぶしぶうなずいてみせた。

「辻によろしく。そして、辻をよろしく」

「わかった」

カバンを持つと、俺は振り向かずに病室を出ていく。  
泣きたいけれど、これを辻に伝えるまで、崩れてはいけない。  
辻のところまで距離はある。  
そこまでの我慢だ。

「……？　どうかしたの？」

「いや、今、誰かに呼ばれたような気がする」

大切な誰かに、大切な何かを言われた気がした。

声が届いたわけではない。なにか、引っ掛かる何かが何かを通じ  
て伝わってきた。

「何かの予兆ってことも、ありえるわよ？」

「……うん」

「いつ！」

何かが聞こえた気がして、持っていた茶碗を落としてしまった。  
その欠けらを一つ一つ、丁寧にとっていると、その切れ目で、指を  
スツと切ってしまった。

反射的にその指をくわえると、再び声が聞こえてきた。

《もうすぐだよ……》

「え……？」

とおくからかすかに聞こえるように、耳のなかに入り込んでくる。まわりを見回していても、人の実態は見当たらない。でも、目の前に誰かがいる気がする。

「わた……る？」

《始まる……気を付けて！》

「へ？」

首を傾げた瞬間、目の前にいたものは、ずっと消えた。

姿形がはっきりしなかった。

ぼんやりしていて、じっと集中していないと見えないなにかが、俺に警告してきた。

声も特定しない。

涉とも言えない。

今の声を思い出そうとしても、はっきりとは思いつけない。

透き通っていて、脳に覚えさせない声。

「歩くん！」

リビングの戸が開くなり、聞き覚えのある声がキッチンまで聞こえてきた。

「お、お前……」

「始まっちゃっ……」

「……」

「どうして……」

「何泣いてるんだよ。お前は喜ぶべきだろう?」

「いやだよ！　こんなの、こんなの……！」

「最高じゃないか！」

[illegible]

「お前に、」

「いや、言わないで……！」

「言わないで？ お前だっ  
てわかっているんだろう？」

「いぢ……！」

「ほら、耳を塞いだって聞こえているはずだ」

「やあ……」

「神の怒りが……さあ、パーティの始まりだよ！ 喜ぶんだ！」

「いやだ……」

「言っただろう？ お前は」

「いやだ……どうして。変わっちゃったんだよ！」

一人の口元が、にやりとあがる。

「お前は、逃げられない！」

## 第26話

「悠樹……ご飯を」

「祐介、俺は悠汰だし、パンがいい」  
パン以外食べる様子のない悠汰に、祐介という男は大きくため息を吐く。

『悠汰！ わがまま言うな！ そんなにご飯が食べたくないんなら、俺に変えれ！』

「うるさいよ悠樹。今は俺なの。あとでちゃんとお前の時間もあるから、ちよつとくらい良いだろう？」

祐介には見えない俺に文句たれる。

肉体は俺。でも、精神は悠汰。

違うのは性格だけで、姿形は同じ。

二重人格という種類ではないと思う。ただ、肉体を使っていないものは、肉体から離れることも可能。

霊体みたいだけれど、俺は肉体から離れはしない。悠汰が何をするかもわからない。

（前はこんなんじゃないかったんだけどな）

前はもつと、お互い今を楽しんだり、助け合ったりしていた。それに、悠汰が俺の体を扱うことなんて、出来やしなかった。霊体になっても、ある程度物などに触れていることができる。前といっても、一時悠汰は俺のもとから姿を消した。しかし、世界が何か動いたとき、再び悠汰は現れた。それからだ。

前とは違う、何かが起こりはじめていると実感したのは。

悠汰はそれを逃げられないことだといった。

悠汰を抑え、強制的に俺に戻すことは簡単だ。でもそれをしないのは、ただでさえ不自由な悠汰を、縛り付ける勇気がなかった。

「じゃあ行ってきます。祐介も着いてこなくていいよ。前みたいに襲われる事はないし、襲う奴も居ないだろうしね」

「しかし……」

「平気。祐介も、少しは自由にしろよ。俺だって、たまには一人になりたい」

「……わかりました。お気を付けて」

祐介と悠汰を残して俺は外に出た。

新鮮な空気と、新鮮な風。

いつも屋内に籠もってしまうから、なかなかこのような環境に触れない。

それに、隣には守るかのように、祐介や護衛がいる。

そんな堅苦しいところ、外にいろいろが中にいろいろが、押しつぶされそうな感じがした。

俺は、信賴していた人たちの寿命や病気で亡くなる様を見てきた。祐介は、信賴していた人たちの一人、祐司という人の息子の息子さま



だった。

今はもう23歳で、俺と祐司が出会ったきつかけも、その時起きた事件も知っている。

あれからもう、50年は過ぎた。いや、それ以上経っている。なのに俺だけは、祐司という男と出会った時、いや、人生が変わる瞬間の、悠汰と初めて出会った時から、年齢も老け具合も変わらない。変わらなくなってしまった。

「……来る……また、新しい魂が……」

体の全身が、目に見えない何者かの魂が近寄ってくるのがわかる。ただの魂ではない、力持つものの魂が。

「ああ、君か……君が……」

俺の頬は、涙を流すためだけにあるのだろうか……。

「そう……」

「なあ、俺たちは何をすれば良いんだと思う？」

「何も」

「え？」

「何もしなければいい。きっと今のおれらは、ボスっていう男に合う気がしない。だったら、こっちからアクション起こしても、ただ死に行くだけさ」

「まあ、そうだな」

「だから何もしない。向こうから来るのを、鍛えながら待っていれば良いんだよ」

託された伝言を、杵島はすべて話してくれた。

もう、相澤は居ないこと。

いつかはこうなることがわかっていた。

だから、泣かない。

今泣いたって何も始まらない。

（泣くのは、すべてがおわってからだ……）

泣いてしまいそうに、目頭が熱く熱を持つ。

俺は麻紀に呼ばれて、辻の家に向かっている。

辻の家はここから少し距離があり、そこまで行くには、渉がいるお墓通りを横切り、この前の火事現場の近くを通る。

右に行けば、杵島という男の家があり、もう少し行つて、左に曲がれば辻の家。

杵島の家からもつと奥に行き、国道を渡り、渉とよく行った山の方に行けば、相澤の家がある。

こんな遠いところに、麻紀は歩いてきたのだろうか。

「歩くん、声、聞こえた？」

「こえ？」

「ええ。忠告するような声」

「聞こえた……かも。麻紀が来る本当に少し前」

「そう……なら、時間差があるのね」

「え？」

「辻の家にいるときに、辻が何かが聞こえたって。忠告するような声が。いやな予感がするから、考え込むついでに、歩くことにして、そしたら辻からメールが来て、歩くんをつれてきてって。だから、歩いてきたんだけど、その時に声が聞こえて」

「じゃあみんなが？」

「多分」

「声の主って誰なんだろう……」

「聞き覚えがない声だった？」

「いや、大事な人の声……」

「そう……私も、大切だった人の声だったの。少し話していいかしら？」

「どうぞ」

沚の家に向かいながら、麻紀は昔を振り替えるように、リズムカ  
ルに過去を話した。

兄がいたこと。

兄に親友がいたこと。

いなくなったこと。

沚と会ったこと。

沚と有ったこと。

帰ったこと。

力のことや、最愛の兄がいなくなったこと。

麻紀が聞いた声は、その最愛の兄の親友であり、好きだった優貴  
の声だった。

沚には、麻紀の最愛の兄の声だったらしい。

「だから、私のもう一人の兄的存在は、沚……だったのよ」

「ふうん」

「あなたにそういう存在は？」

「え？」

「頼れる人や助けてくれる人。力の発現力になった人」

「……誰だろうな。もう、そういう人はいない。かな」

「もう？」

「俺の家に来たとき、何か違和感がなかったか？」

「違和感……？」

麻紀は、来たときのことを思い出すかのように、少しだけ顔を上  
げて視線を高くした。

考えるとき、上を向く人なんだ。そう観察しながらも、思い出す

のを待つように、周りを見回しながらも歩く。

「お母さん……かな？ 違和感っていうのかわからないけど、誰かを待っているような気がした」

「俺の大事な人をね。いや、家宝を待っているんだよ」

「聞こえた大事な人？」

「うん。失ったものは、戻ってくるわけないのにね。代わりなんてあつていいわけがない」

渉は家の宝だった。

家族の愛すべき宝だった。

子供心でも、嫉妬心もでなかった。

家族や親戚内で、渉だけが愛でられるのも納得ができていたから。自分だけが愛されない。そんな気持ちになんてならなかった。

今思えば、憎めればよかったのかもしれない。でも、俺も渉を頼った。

愛でられる理由がわかるから、俺も愛した。誰よりも、渉を信用した。渉しか、信用できなかった。

どちらが兄で、どちらが弟かは区別されなかった。でも、内輪では、渉を神といった。

それを失った今、家族内も親戚内でも、変化が少しずつ起きている。

もともと仲が悪かった親戚同士争い、憎しみ、分裂した。

もう、それを止める渉的存在が居なくなったから。

「どういう人だったの？」

「俺にとって、唯一信頼できる相手だった」

「その人は今……？」

「殺しちゃったんだ……俺が」

辻の話は、相澤を失ったということだ。

証を持たないものは、長くは生きられない。渉のように、誰かの犠牲に。何かの犠牲によって消えてしまう。

伝えたのは、退院した杵島の口から。

二人とも、いつかこうなることはわかっていただろう。そんな表情をしている。ついにこの時がきたかと。

ドヨンとした空気に耐えきれなくなり、散歩してくると外にでた。外は中とはちがく、明るく晴天だった。

(あつつい……)

麻紀と話ながら歩いているときはこんなに暑いとは感じなかったが、辻が熱を放出したかのように、蒸し暑さを感じる。

そつと冷えた左腕に手を当て、暑さを自分の体でしのぐ。

親友だろう人を失い、辻も杵島もこれからどうするのだろう。

あの忠告は、どういう意味なのだろう。

いやな予感はあるのに、その基を探すことができない。

どうしてこの力を得たのか、何をすべきなのか。

「わっ」

「えっ」

いきなり驚いた声とともに、身体がぶつかり合う。

つい転んでしまった自分の身体を起こしながら、ぶつかってしまった相手を探すと、同じように後ろに転んでしまっていた。

「ごめんなさい。つい考え事をしてて」

手を差し伸べ、つかませるとグイッと身体を起こしてやる。

謝ると、少しほえみいいよという。

「俺もちよつと考え事してたしお互い様。怪我とかなかった？」

「ああ。そっちは？」

「平気平気！ 俺強いから」

なんて楽しむように笑うその姿は、俺より身長はあり、裏もなさそうに微笑む表情は、見た目よりも大人という印象を持たせる。

見た目は高校生くらい。身長は、杵島という人や相澤ほどはないが、辻よりはる。いや、辻くらい。

「ねえ、君これからへんの子？」

「……？ 一応」

道にでも迷ったのだろうか。

キヤロキョロ周りを見回しているその姿は、新しい土地に来て方向感覚がつかめていない、何かの好奇心に満ちついる様子だ。

「半分家出みたいに出てきて、適当に歩いてきちゃったから迷っちゃった」

「家出って……」

「たまにあるだろう？ 親から逃げたくなることとか、反射的に逃げてみたいっていう気持ち」

好奇心か。

楽しそうな表情でそんなことを言われても、深刻性は感じられないし、冗談にしか聞こえない。でも、きっと家出をしてきた理由はきちんとあるのだろう。

親から逃げたい。

反射的に逃げたい。

この人は同じ事しか言わなかった。

必死にと言うわけでもないが、何かから逃れようとしている。

「あるな。俺も、逃げたい……」

親から、すべてから。逃げてしまいたい。

涉がいるべきあの家にいるのはもういやだ。そう思っているても、家出をするという選択肢は今まで持たなかった。

「……じゃあ一緒に逃げようか」

一瞬俺の表情を読み取るようにしたあと、にやりと口元を上げ、楽しそうな顔をする。

「どこに？」

「なあにいつてんだよ。家出に行き先を決めるな。行き当たりばったりだからこそ家出になるんだ」

「迷ったとかいった人が」

「つつい楽しくて、クスツと微笑むと、うれしそうに笑顔になった。」

「名前は？ 俺は悠樹。朝倉悠樹」

「乃木坂歩」

「歩かぁいい名前だね」

「そうか？ 悠樹もいい名前だ」

「ありがと。じゃあ行こうよ」

「ちよつとまって」

一応、麻紀たちに家に帰るといつておけば、帰ってこないことを疑問には思わないだろう。

急ぎの用が出来たから、帰るね。そうメールを送ると、悠樹に向き直る。

「さっきまで、知り合いのところに行ったんだ。家に帰るってメールしておいた。あの人たちに心配はかけられないから」

「家出は、心配かけさせるものなのに」

くすくす笑うと、駅の方へと足をすすめていく。

遅れを取らないように、急いでついていく。

知らない人に着いていつてはいけないといわれてはいたが、この年になって、いい人が悪い人かを見分けられないわけではない。

だから着いていく。

それで何かを得られる気がしたから。

学校は、サボることになるが、行かなければいけないという使命感が強いわけではないから、気にせずサボる。

「俺が家出しようと思ったのはさ、家にいつつもついて回るような人がいるんだよ。家をでるにしても着いてきて、心配性。そいつを少しは自由にしてやりたくて、逃げてきた。っていつても、俺が自

由になりたかつたんだけど」

「……その人に心配してほしいんだ？」

「ああ。歩は？ 逃げたいの？」

「あの人が、“俺”を心配するかどうか」

「あの人？」

「親。さっきまで一緒にいた知り合いには心配されたくないかな」

「複雑そうだな。さあ、見つからないうちに行こうよ」

「あ？ ああ」

複雑なんかじゃない。

ただ、母が精神的病気になっているようなものだ。

きつと、あの人は心配しない。むしろ、いなくなったことで、自分には子供自体いなかったんだ。今までののは夢だったんだと、勝手に納得しようとする。もしくは、歩という俺の存在のみを消すかもしれない。

渉という子供は、小さい頃に亡くなった。と。



## 第27話

「歩……？ さあ。私が帰ってきたときにはいなかったわ。部屋にいるかもしれないし、勝手に漁<sup>あさ</sup>って良いわよあんな子の部屋」

「は、はい……」

歩くんの家に来て、ちょうど留守にしていた。というおば様が  
出向いてくれたが、本人はいないようだ。

しかし、歩くんのお母さんも相変わらずだ。

歩を無視し、渉を崇拜する。

昔よりもひどくなってきた。

昔から多少歩くん鼻根ではいたが、ちゃんと“歩”という存在も  
認識しており、きちんと自分の子として愛していたはずだ。

その中でも歩くんを持ち上げるだけ。ただそれだけだった。親戚  
だつて。

歩くんを失つて一番精神異常がかからなかったのは、おじ様。歩  
くんの父だった。

ショックを受けてはいたが、母を慰める事で精一杯だっただろう。  
歩くんは一時期感情を無くしたかのように、あまりしゃべらなくな  
ってしまった。母の方はショックで立ち直らない様子だった。

歩に冷たくあたり、ショックをすべて歩の責任にした。

時には歩くんに似ている歩くんを渉として接した。

それについていけなくなり、父の方はでていった。

正式に離婚はしていないらしいが、別居。

本当は歩くんを連れていきかけたと言っていたが、母がそれを

許さなかった。

渉として接していたから。

「部屋にもいない……か」

勝手に中に入ると、相変わらず整理整頓してある、きれいな部屋だった。

ポスターやカレンダーなど装飾品が壁に掛かっていることもなく、シンプルな部屋。

見回していると、玄関の戸が外から開かれるのがわかった。

呼び鈴であるチャイムの音が聞こえなかったことから、歩くんが帰ってきたのだろうか。

しかし、おば様の様子は違った。

「なっ、いまさら何しに来たのよ」

（だれ…？）

入ってきた人だろう声も、歩くんではなく、違う懐かしさがある声だった。

「歩はいるか？」

そういつて私のいる歩くんの部屋の扉が勢い良く開かれた。

「あ……おじ様」

「梓ちゃん。その呼び方は止してくれといっているじゃないか。背中が痒くなる。ところで歩は？」

いきなり入ってきたのは、歩くんの父だった。昔から何かの影響で、おじ様と呼んでいる。

恥ずかしいといつも苦笑を浮かべられる。

「私も会いに来たんですけどいなくて」

「そうか」

「そうじゃないわよ。今すぐでていつて。何でもかんでも私に押しつけておいていまさら何の御用があつて？」

おじ様の後ろから、早く帰ってくれと急かすおば様。

昔とはかわっていた。

おじ様とは仲が良くて羨ましいくらいだったのに、こんなにもトゲトゲしい関係になってるなんて。

涉くんが亡くなったとき、一番おじ様がおば様を心配していたということも、すでに忘れてしまったのだろうか。少しだけ、寂しい。「押しつけた？ 歩のことは、おまえが断固として渡さないって言ったんじゃないか。学費も少しは払っている。でももういいだろう？ 歩はこっちで預かる。おまえのところに置き続けたら、歩までおかしくなってしまう」

「何よ！ 私がおかしいみたいない方しないで！」

「おかしいんだよ！ だから、歩に決めてもらおうと思ったんだ。俺たちでこんなことを言い続けても埒<sup>うち</sup>があかない。歩にいたい場所を決めてもらおう」

そこまでいうと、おば様は何も言い返さずに、じっとおじ様の方を見つめていた。

おじ様は目線を外し、私の方に向き直る。

「歩がどこにいるかわかるかい？」

「私も探してるの」

「どこか行きそうな場所はわかるかい？」

「……私も最近まで全然会わなくて、この前久しぶりに会いしたきりで、全然情報がないんです」

「そうか……」

「ほ、ほら、本人の歩はいないんだから今日のところは帰ってちょうだい！」

黙っていたおば様が、いきなり怒鳴りだし、私たちを追い出しました。

隣で小さくため息がこぼれるのがわかった。

「おじ様……」

「あの人も困ったものだ」

薄らと見せるその苦笑は、辛そうで淋しそうだった。

「……歩くん、どこ行っちゃったんでしょね」  
「さあ、いつかは帰ってくるでしょう」

とは言ったものの、根拠がない。

その証拠に、あれから歩くんの家におじ様と行っても、留守のままだった。

学校にも休むという連絡もなく、無断欠席がつづいているらしい。おば様に聞いても知らないの一点張り、日に日に弱っているのもわかる。しかし、その弱り方は歩くんが帰ってこないという現状ではなく、歩くんを再び失ってしまったかのようにだった。

おば様は、歩くんを失ってから、歩くんを「歩」という一個人として見ることはなかった。

「そつえば、歩くん前に言ってたんです」

「何をだい？」

私たちはおじ様の家に一旦引き返し、歩くんについてお茶をのみながら話していた。

その時、不意に歩くんのことを、歩くんが言っていたことを思い出した。

「涉は俺が殺したって……おじ様、何かしりません？」

「歩が……？ 確かにあの場にいたのは歩だ。一応その考えも思いついて、調べてはいたらしいけど、涉の体がどこにあるかわからないかぎり、それは難しいだろうって。歩も、何を思ったんだ……何を見たのか、教えてほしいんだけどな」

「神様に好まれたとか、俺は嫌われ者だとか」

「あのことを知っているのは歩だけ。一人で何もかもを抱え込んでいるのか。嫌われ者だなんて」

「全部話してくれば良いのに……よし、もう一回行ってきますね！」

「ああ俺も行こう」

私たちは立ち上がり、再び歩くの家まで足を向ける。  
タイミングというのは大切だ。

一つの事をするのに、何かのタイミングをずらしてしまえば、一つずつずれてしまい、予定とは崩れてしまう。

二度目の再来は、ずれることなく、新たな情報を手に入れることができた。

それは、家の前での出来事だった。

私たちがついた頃には、私たちのように追いつ返された人がいた。  
男の人二人に女の人一人。私や歩く人よりは、年上みたいだ。  
高校生くらい。歩くの学校の友達には見えない。

「あの……」

「……？ 君は」

「あ、私は歩くんの幼なじみで」

中でも一番背の低い、そばかすのある男性が首を傾げながらも聞いてきた。

つい緊張して早口になってしまった。

「歩の父です」

「お父さん、ですか」

「あ、この間は服をお借りしました」

「服？」

あっと思い出したかのように、そばかすのその男性は、軽く礼をした。

なんのことかわからずに、おじ様は首を傾げた。

「この前借りたんです」

「そうか。でも、まだ破棄してなかったんだな」

「え？」

「いや、なんでもない。役に立ったならいい」

「あなたたちはどうしてここに？」

話をずらして私は聞くと、女性が積極的に聞いてくる。

「歩くに会いに。どこにいるかしらないかしら？ 少し用があるのだけれど」

「どういう知り合いなんですか？」

「それは言えないけれど、簡単に言えば仲間。ね」

「なんの？」

「それは答えられないわ」

「答えられないことなんてあるんですか」

「あるわよ」

強気で言うその女性は、何かを急いでいるようにも見え、いつかに感じたいやな予感を再び感じさせられた。

「悪いけど、知らないかな？」

フオローするように、背の低い男性が前に出てくる。

「知りません」

「そつかあ。なら仕方がないね。日を改めるよ」

「ちよつ辻!？」

女性が再び声を上げたとき、一瞬その辻と呼ばれた背の低い男性が、驚いた。というよりも、いきなり思い出したという顔をしたと思えば、私に指を差してきて叫ぶように口を開く。

「君、梓ちゃん？」

その言葉に、私はもちろん、サイドにいた二人まで驚いている。

「辻、知り合い？」

背の高いほうの男性が、首を傾げてそう聞く。

「あれ、君、雨降つてるときに転んでエメラルドグリーンのアクセサリー落とさなかった？」

「……なんでそれを！」

確かに、雨の日にそれを落とし、拾ったそのネックレスを歩くに拾われた。

そこから私の人生、再び変化が起こりだした。そんな気がする。「いや、丁度印象深かったから。だって君、どこかであった気がしててさ。どこかであった？」

「辻、その口説き文句は古い……」

呆れたように背の高い男性が言う。

見たことなんてない。

あるわけない。

はつきりと言えないはずなのに、会ったことがないというのは確実だった。

「歩くと君、どこかであってる……そう……麻紀の家でだ!」

思い出したように、いきなり女性の方に指差し、声を上げた。

「わ、私の家?」

麻紀というのは、急いでいるような表情を見せていた女性らしい。

「うん。でも、あいつも記憶に無いつて言ったんだよね……」

「夢とか?」

「あー! ……それだ! ……そう! ……草原で、風になびかれて、杵島と麻紀と、歩ともう一人の女の子がいた。その女の子が君! ……あー!

やっと解決」

モヤモヤしていた何かが弾けだし、清々しい笑みを見せている。

「そのメンバー……もしかして」

麻紀と呼ばれていた女性が、何か引っ掛かったかのように、眉間に皺を寄せた。

「え?」

何もわからないかのように、辻という人は首を傾げる。

チラツとおじ様の方を見ても、わかつている様子もなく、私も首を傾げる。

「あなた、自分以外の自分の存在って知ってる?」

「自分以外の自分……に、二重人格!」

少しだけ、引っ掛かる事はあった。

ネックレスをなくして、どうすればいいのか迷っているとき、冷静に判断したのも、何かいやな予感がして、歩くんに会いに行く案を出したのも私ではない。不意に頭をよぎったヒーリンという名の声にしたがっただけ。

その声に責任を押しつける気はないが、不意に来るその声が、自分に関係していることは確かだ。でもそれを、この人たちに言う義務なんかないはずだ。

「いえ、わからないのならいいの。ごめんなさい。私たちはもういくわ」

麻紀という女性は、そういいながら強制的に沁たちをこの場から去らせようと、腕を引っ張って私たちの視界から消えた。

おじ様は何を言うことなく、茫然としていた。

「いないようですし、私たちもいきますか？」

「あ、ああ、そうだな。今日は帰ろう」



## 第28話

「え!？」

不意に意見を述べた麻紀に、部屋にようやく戻ってきた俺は驚いた。しかし杵島は「でも、そうだと決め付けるのは早いんじゃないのか?」と、驚く様子を見せずに、冷静な口振りで言った。

「可能性の話です。あの女性に力が無いとも言いきれない。なにせ、なにかを隠してるような間があった」

「麻紀の根拠も結構あてにならなくも無い」

「辻……おまえは結局どっちの味方なんだ……?」

呆れるように杵島は肩の力を抜いてため息混じりに言った。

疲れた足を休ませるようにベッドに腰を下ろし、悩む。麻紀が言ったのはこうだ。

夢に出てきた人すべてが、力を持ち、なおかつ今のところ“証”を持つものだと思われる。だとすれば、先程の女性に力が有ってもおかしくはない。そういったのだ。

しかし、それは次々にタイミングよく、力を持つものばかりと遭遇しているからそう思ってしまうのかもしれない。そうも思うが、可能性がまったく無いとも言えないと考えてしまうのも事実だ。

とりあえず杵島は、明日の学校に備えて帰り、俺も早めに布団に入った。麻紀の部屋から、電気が漏れていないところからして、眠っているのだろう。

眠りたくても眠れない。歩のこと、梓という女性のこと。どちらにしても謎ばかり。

当分眠れそうもない。

次の日、眠い体を必死に動かし、ようやくという疲れ具合で学校につく。

前に、歩が会ったといっていた、髪が長くてクルクルしていて、身長160もないくらい。そういう女性はたくさんいるようだが、あの店に通っているのと、いやな予感がしたという証拠があれば平気だろう。

いつだったかに転入してきた恭恵という女性。あの人も、そのような髪型をしていて、尚且ついやな予感がした。勘というのはそれだけで十分だ。

しかし、あれから見かけなくなったのと、関わってはいけなさそうだから、探すこともしない。でも、それはこちらからの話だ。

「あ、辻君？」

向こうだって、俺の存在を知っていてもおかしくはない。

机が一つ、教室の中から消えたのを確認したとき、聞きなれないが、一度会話をしたこのある声。

「恭恵……だっけ？」

「ええ」

行方不明で、退学という形をとられたその教室は、少しだけシーンとしていた。

学校側は、退学までしなくてもと言ったのだが、親が、いきなり姿をなくした息子に怒りを見せ、迷惑はかけられないと退学届けを出した。

不可解な行方不明。

各地で起きていたからなのか、ついに不可解だとテレビや新聞で報道された。

誘拐や拉致という方向でも搜索が開始されていると。

しかし、その真相を知っていたとしても、口を開くには抵抗がある。

杵島は、会ったことがあるのか、恭恵の顔を見た瞬間、目を見開いたと思えば、俺の腕をつかみ、勢い良く引き寄せられる。

「お前、この学校の者だったのか」

「あ、確か杵島君って言ったわね？」

喧嘩を売るかのように言った杵島の言葉に、俺と会話をするときとは違う、何かの威圧感を持った恭恵の口調。

「杵島……？」

「こいつ、敵だ」

「……捕まったとき……？」

「ああ。近くにいた」

杵島と話していると、不意に恭恵はにやりとほほえんで、口を挟んでくる。

「残念。言っちゃうんだ」

「言われなくても、その口調の違いでわかっていたと思うよ」

にらみつけるように、じっと恭恵の方を睨み付ける。

前はもっとおしとやか……とは違うが、もう少し学生らしさがあった。

「ざんねん」

どこも残念そうでもなく、何かを楽しみ、弄んでいるような表情は、敵にも味方にもしたくなんかない、信用ならない素振りだった。でも、もし敵だとしても、どうしてこの女、恭恵は俺たちを捕らえようとしなのか。慎重に相澤みたく、仲を近くしてからとしても、杵島と恭恵は、敵だということを確認済み。しかも、あのバーを使い物にならなくしたのだって、俺たちだ。特別アクションを起こしてこないのも不思議だ。

特別アクションを出さないということは、そのことに積極的ではないのか。それとも、捕まえる気はないですよと思込ませるつもりなのか。

結局どちらなのかわからずに、恭恵はどこかへ行ってしまった。

「……あの女、敵だと思うか？」

思っていることは同じらしく、口を開こうとしたとき、杵島が同じ事を口にした。

下校時の道路は、すごく淋しく、すごく寒そうだった。

秋になってくるころではあるが、それ以上に寒そう。なにかが足りないというのを、伝えてくるように。

「わからない。何を考えているのかも、何をしようとしたいのかも」

この先に足を突っ込んでよいものか、今、関わりかけているこの状態から手を引くべきか。しかし、手を引くというのはどういうことか。

ただ今は、居るべき場所にいて、行くべき場所に行っているだけ。ごく普通の生活を送っているだけだというのに、今までとは違う道

が現われ、必然的にそちらに向かわされているだけ。ただそれだけだというのに、何を間違ったことを行っているだろう。

いきなり制度が変わり、民が政府に振り回されているだけのうちに、俺たちもいきなり作られた道を歩いているだけ。逆らうことのできない、非現実的な世界へと。

「きっと、あいつが……いや、あいつらが考えていることがわかったなら、こんなにも先を恐れることなんてなかったんだろうな」

「杵島、怖い？」

「ああ。何に振り回されているのか、何に足を伸ばそうとしているのか」

杵島が恐いと言うのは、凄くめずらしいという印象を受ける。けれど、それが当たり前な気がして、寧ろホッとする自分もいた。

ゆっくりと足を止め、空を見上げてみた。まだ見えない星たちを無理矢理見るかのように目を細めてみた。

なにか、懐かしいものを見ているかのような、安心感があらわれる。しかし、どこか不自然な。

「辻？」

立ち止まり、空を見上げている俺に話し掛けてくる。

顔を戻すことなく、空を見上げたまま口を開いた。

「空に、赤い玉がある」

いつだったかに見た、真っ赤な月を思い出す。しかし、あれは月なのか。

皆が知っている月は、銀に輝き、夜をも薄暗く照らし続ける。しかし、その隣にある、あの月は赤く、到底夜を照らす力なんかもつ

ていない。だから、玉。

「赤い……？」

「うん」

「今見えているのか？」

「……うん」

「赤い玉は見えないかな」

結局杵島には見つけることができない、そんな玉だった。

ただの幻覚か。

本当に見たのだ。というにも、次に目を離し、再び見てみるとそこにはもう、隠れてしまったかのように見つけることはできなかった。

こうして、部屋を真っ暗にし、窓から覗き込んでも、見つかる様子はなかった。

前には、眠れずに……いや、不意に目が覚めたのか、喉が渴いて飲み物を喉に通した後、気晴らしに外に出て空を見上げると、そこには月と真っ赤な月が肩を並ばせていた。しかしあれは、月ではない。言い切る理由はないが、そんな気がした。

（何かの予兆じゃなければ良いんだけど……）

麻紀に相談をしようかとも思ったが、ただの勘違いかもしれないと思い、今日は止めておこうと踏みとどまる。

もし次、見たときでもと先のばしする。

杵島にも見えていなかったとすれば、麻紀にも見えていないとい

うこともありえる。

「外って、気持ちがいいね」

いったい電車賃はいくらかったのだろうか。

巻き込んだからと、悠樹が電車賃を出してくれた。

行き先もわからずついてきた場所は、都会というイメージではなく、住宅街。というイメージ。遠くには海が見え、バスが通っているらしく、今悠樹はそこに行くバスの時刻表を眺めていた。そんなとき、ぼそりと言ったのだ。今まで滅多に外に出ない人のように。

「ああ。落ち着く」

「歩も？」

「うん」

「今は、色々進歩して、バスも電車も乗り心地がよくなってる。空気が重く感じるけど、世の中は便利になりすぎた。電車があれば、どこにもいける……」

「……なんか悠樹、おじさんくさい……」

まだ若いだろうに、どうしてそんな古そうな口調をするのだろう。大人びているというよりは、その場にいたかのような口調。

「そつだつたらどうする？」

「……は？」

いきなり振り向き、そんなことを楽しみながら聞いてくる。

「もし、俺が八十年とか九十年とか生きる奴だったら、どうする？」

「……そつだつていうんだつたらそうなんだろ？ どうするも何もあるのか？ あ、あえていうなら、その若造りのコツを教えてください！ って言うね」

「……步つて変な奴……」

「だつて、八十年とか生きてるくせに、その若そうな面だろ？ だれもが羨ましがるだろう」

「どっか……ずれてる」

そついいながらも、嬉しそうな顔を見たすぐにバスは来て乗車した。

三十分もしないうちに到着し、そこでもやはり悠樹が支払いを二人分おわらせ、下車した。

ついたそこは、美しく透き通つた海だつた。

嬉しいのか、悠樹は子供のように砂場を駆けだした。

「あ！ 待てよ転ぶぞ」

と言いながらも、綺麗な海に見入られるかのように、俺も走って追いかける。

裸足になることなく、靴のまま海に入る悠樹をみて、つい目を見



開いてしまう。ズボンの裾なんか、水分で重みが増しているのが見て分かった。

真似せぬよう、俺は裸足になり、裾をめくって中に入っていく。その頃にはもう、腰まで浸かるほど悠樹は奥へと入っていた。

「歩ー！ はやくー」

楽しそうにこっちを向き、大きく手を振ってくる。

「……到底、八十歳や七十歳って年齢の奴とは思えないな」

ぼそりと聞こえないように呟き、ズボンを捲ったところまで行く。

「歩ー」

「これ以上行ったら濡れる。悠樹も服どうするんだよ」

「あー……」

考えていなかったのか。

少しだけ呆れるが、子供みたいで可愛い……といってしまうは悪いのだろうか。

「早くあがつてこいよ！ 風邪引くぞ」

「うん……わっ」

足をこちらに向けてきたとき、すべったのか悠樹の姿が消えた。

「悠樹！？」

反射的になのか、渉のことがあったからか、足は濡れることなか気にせず、悠樹のもとへ向かった。

状態が分かっていないのか、バシャバシャと手を海面に出し助けを求めていた。その手をつかもうとして気付いた。

少し浜と平行に横にずれるだけで、ほんの少しの段差があり、深さが変わる。水深が変わったその場所に丁度悠樹は入ってしまったのだ。

「悠樹！」

腕をつかみ、グイッとつかみあがると、必死に呼吸をしようと、必死に上を向いていた。

「あゆ……ゲホッゲホッ」

少し海水を飲んでしまったのか、苦しそうにむせ続ける。右手で背中をさすってやりながらも、浜の方まで誘導してやる。

「悠樹……！ 大丈夫か！？」

浜に寝かせると、俯せになり海水を吐き出した。

「悠樹……」

「ごめっ……びっくりして……」

まだ落ち着いたわけでもないのに、悠樹は謝ってくる。それでも怖かった。

近くにいる人が苦しむ姿が。

また、姿を消してしまうんじゃないのかと。

「歩……？」

茫然としていると、息が整った悠樹が顔を覗き込んでいた。

「あ……？」

「歩は平気か？」

「ああ、丈夫だから」

そうかといった悠樹の顔は、溺れかけたというのに、子供のよう  
に楽しそうな表情だった。

## 第29話

あのままでいたら風邪を引くんじゃないかという予想はしていたが、本当に風邪をこじらすという面倒な状態になった。

しかも、一番ひどいはずの悠樹はピンピンしている。

風邪を引いたのは、俺。

しかも、着替えとして、パーカーと短パンを持ってきていた悠樹は、それに着替え、いったん俺を置いてバスで駅の方まで行き、二人分の服を調達してきて、それに着替えた。  
どこまで所持金があるんだか。

「ごめん歩……」

「ばあか。おまえのせいじゃねえよ」

もうそろそろ一日がおわりそうな夕日。

砂浜で体を温める。

潮風が冷たく、すぐに冷える俺の体を思い、悠樹は口を開く。

「向こう戻ってホテル探そうか」

「でも金」

「あるから」

「でも……いや、悠樹行つてなよ。もう少し海見てるわ」

「でもこの熱で」

そう。くしゃみや咳がでることもなく、ただ高熱だろう状態。  
体温計できちんと測ったわけではないが、悠樹が手を額に当てるかぎり、高熱があるらしい。

「すぐ治る」

「だったらなおしてからまたこよう？　ね？」

そう宥めようとする悠樹。その奥から、女性の姿が見えた。

足はこちらにむかい、不審者をみるように、伺わしい目で見られている。

「悠樹……人がいる」

「え！？　だめえ！　歩をつれていかないでえ」

「はい？　どんな状態だよ。後ろ！」

誰かが迎えに来たとも思ったのだろうか、しがみつく悠樹を離しそうというと、首を傾げながら後ろを振り向く。

女性も気付いたことに気付いたのか、少しだけ困ったようだった。足を進め、近づいてきたと思えば、口を開いてくる。

「ここで何を？」

年齢はすでに、四十をすぎているようだった。化粧のおかげか、遠くから見ればもう少しだけ若めに見えた。

「あ、歩が……熱を出しちゃって……」

「熱を……君たちはどこのこ？　ここの子じゃないわね」

「ちよつと遠くから来てて……」

「泊まる場所は？」

「……まだ」

この、悠樹と女性の会話を聞きながらも、内心はらはらドキドキ状態だ。

家出のことをいうんじゃないかと。

「親は？ 保護者の方は知っているの？」

「あ……」

意外と素直な奴らしい。

嘘でも、知っていると答えておけば、怪しまれないでうまく事を運べたかもしれないのに。

「知らないのね。私の息子と娘も……行方不明なんだよ。だから、その部屋でなければ貸してやれる。おいで」

「あ……ありがとうございます」

「私も仕事で飛び回ってたから、子供が行方不明になったのも、家出だと思うの」

隣の部屋から聞こえる声。

女性と悠樹が話をしているのだ。

熱を測ってみれば、三十八度少し。すぐにベッドにつれていかれ、暖かくしていなさいと。

この部屋に入ったとき、一番に目に入っただのは、一度力強く丸めたような名残がある、古い雑誌。だれかがこれで叩かれたのだろうかという想像をする。

「息子さんたち、何才くらいなんですか？」  
「17才かなあ」

(……辻と同じくらい……?)

聞こえてきた声に反応し、少しだけ考えてしまう。  
学校はどうしているのかや、どうして家出をしたのか。どうして二人ともいなくなったのか。もしかすると、渉のように……？  
何かがわかるかもしれないと、ベッドから出て部屋の中を歩き回る。

机の上には、小さな女の子と、そのサイドに立つ男の子二人。  
その女の子には、どことなく見覚えのある人の面影があった。  
裏を捲るように見てみると、下の方に立っている順番か、男の子らしい名前から女の子、男の子。という順番に並んでいた。

左から、昌之、麻紀、優貴。

(……麻紀)

聞き覚えどころか、見覚え……いや、会った。

ここにくるまでは一緒に行動していたようなものだ。

しかし、麻紀という名前は他にもいるかもしれない。そう思ったが、その隣の『優貴』という名前、兄の親友であり、好きであった人の名前。

ということは、片方は最愛の兄なのだろう。

少し考え、その写真が入るように携帯で写真を撮った。

優貴はいなくなったといった。兄もいなくなったといった。ということは、この写真のなかの生存者は一人。

『あの母親も可愛そうなもんだ』

(え?)

聞こえてきたのは、渉の声にそっくりなシャベットの声。今まで静かだったのが、今になって不思議に感じる。

『一人は血の繋がりが無いにしろ、三人とも姿を消した。優貴の方は知らないが、昌之つてやつはこの世にはいないことを知らされていない。ただの行方不明なだけだ。なのに、麻紀までも近くにいるのなら、何のために仕事をしていけばいいのかも、支えもない。生死も知らずに、捜査届けもだしていないだろう』

（出していないなんてわかるのか？）

『なんとなく』

（根拠なしか……でも、麻紀は何でこっちに來たんだろう）

『泣がいるからだろう』

（……そっか）

もし捜査届けを出していないにしたらとして、どうしてか。

心配をしていないのか、何か、帰ってきてくれるという確信があったのか。今の状態で考えられるのはそこまで。熱のせい、頭が働いてくれない。

再びベッドに潜り込み、耳を澄ます。

もう会話は止まってしまったのか、シーンと静まってしまった。

足音も、物音もせず、逆に不安感をよぎらせる。そのせいか、自分が高熱があることを、直に知らせるかのように体全体が重み掛かった気がした。

熱が出たのは何年ぶりだろうか。

少なくとも渉がいなくなっからには、熱があるという実感はしない。

感じていられるほど身体的にも精神的にも、余裕がなかった。今になって熱をだしてしまうということは、どこかに余裕を見つけて



いるということなのか。

不意に携帯の存在を思い出す。

濡れるつもりではなかったから、着替えたときにべちゃべちゃになっ  
ていて、使えそうもないと、タオルで拭き、放置している。眠  
れないことをいいことに、再び布団からでて携帯を開く。

元々、電源を切っていたから、確実に使えないと言い難い。

ゆっくりとパワーボタンを長押しする。

ボタン側がオレンジに光り、ゆっくりとウェイクアップ画面が開  
くのが通常だが、やはり壊れたのか、画面は真っ暗なままだった。  
でも、すんなり受け入れることができたのか、急激な睡魔に襲われ、  
ベッドにそのまま伏せてしまった。

「ど……………て……………あ……………」

遠くから微かに声が聞こえる。

耳障りがよくって、ついつい二度目の違う夢を見てしまいそうな  
気がする、でもそれも悪くないかななんて。

よく耳を澄ましてみると、その声は悠樹の声だとわかる。

「……………わかったよ」

何が分かったのだろう。

ボタンと、遠くの方から玄関の扉が閉まる音がした。

そしてまた、睡魔に襲われ、眠ってしまう。

今起きなかったのが、幸運のか不幸だったのか。

次に目が覚めると、昨日の女性が迎えてくれた。

「あ、おはようございます」

「はいおはよう」

「すみません、少しゆっくりしすぎちゃいましたか？」

「気にするな。おまえは病人、私は拾い人。最後まで世話をするのが当たり前……なんだけどね」

力強く言った割に、語尾は弱々しく、何かがポカンと開いてしまったかのような、素朴感。

首を傾げながらも尋ねてみる。

「何かあったんですか？」

「んー……あんたの相方がね、早朝に迎えが来てさ」

「え……」

（悠樹に迎えが？ どうして……）

「まあ、それまではよかったんだけど、少し揉めちゃってね、どうしてここにいたのがわかったんだって。まだ、歩がいるから待ってくれて言ってたんだけど、向こうは聞いてくれなくて、なんだか歩くんのも知らないみたいだったし」

「あ……知らないと思います」

「え？ 友達でしょ？」

「でも、親とはあったことないですし、実はあったのも家出するときで……っていうか、家出中の悠樹と会ったっていうか……」

「つまり、面識があまりないって事？」

「言つてしまえば……」

「そう。にしては仲良さそうだったけど……って、そうじゃなくつて、熱は？」

いいながら手を額に当ててきた。少しひんやりするその手は、俺の左腕にも似ていた。

「大丈夫そうね。それで、あなたについて、お金を渡されたのだけだ」と

手渡された茶封筒は、妙に厚く、硬かった。封は閉じられておらず、何が出てくるのかが不安になる。

お金というのだから、他のなにものでもないのだろうが、なんだろうかこの厚みは。千円札がいくら入っているのか、想像しただけで気がとおくなる。

そつと中を確認するため、束のまま少し顔を出させると、想像よりもゼロの数が一つ多かった。

「万札かよ！」

余計に何かの重みがかかった気がした。

こんな大金、手にしたことがない。少なくとも、二十枚は確実にあるといえるが、それだけでもすごい。考えてみれば、場所を突き止め、迎えにきてもらえるというのだから、相当な坊っちゃんなのかもしれない。

しかし、心配を掛けたかったといっていたが、こんなにも早く迎えにきてくれたということは、相当心配されたのだろう。誰に心配されたかったのかは知らないが。

でも、元々心配性らしいし、こんなことをしなくても、分かつて

いたのではないか。

逃げたいとも解放されたいとも言っていたが、矛盾していることに今頃気が付く。

「変な奴」

「お金くれることが？」

「あ、いや。なんていうか、矛盾している奴だったなと」

「友達なんでしょ？　いらなら、地元帰ったときでも返してやったら？」

「言っただじゃないですか。家出中の悠樹に会ったんで、学校とか、近所の人とかじゃないんすよ」

「ふうん。あなたのほうがよっぽど変な奴……だよ」

「え？」

「あまり悠樹の話も信じてなかったけど、あなたの話を聞くとところ本当らしいわね。あなた、悠樹の家出に付き合っただけでるんですよ？」

「え？」

「道に迷って、助けられてそのままつれてきちゃったって」

「ちがつそれ、なんかちがつ」

悠樹が言ったことは間違えないのだろうが、そのままでは、悠樹がすべて悪いかのような言い方でないのだろうか。

どちらが悪いというわけでもないという事を証明するため、出会いからあったことまで、だいたいの話をした。

すると、少し首を傾げたときもあったが、ある程度納得するように首を縦に振った。

「なるほどね。要は二人とも、誰かに心配してほしくてたまらないのね」

「って事になるんですかね」

「あの子達もそうだったのかな」

「え？」

「私の娘たち」

「ああ」

「“ああ”？」

「え？」

「いや、知ってるの？」

「ごめんなさい。昨日寝てたら聞こえちゃって」

「あ、隣で話してたものね。聞こえて当たり前よね」

なんて薄ら微笑むけれど、相当心配したのだろう。

心配しながらも、帰ってくると信じて待っているのか、もう、帰ってこないと思っているのだろうか。

ベッドからようやくおり、机の上にある写真を手にする。

「この人ですよ」

「ええ。一人は近くの子で昌之……息子の親友なんだけど、その子も行方不明。それは何年前だったかしらね……優貴っていうの。あなたの相方と同じ名前ね」

「相方……」

「少しの間でも人生をともにしていれば、相方。でしょ？」

「ですね」

「娘は麻紀。いつもお兄ちゃんについて回って、仲のいい兄弟だったわ」

「羨ましいです。きっと麻紀さんは、目的があってここを離れたんだと思います」

「だといいわ。でも何で娘のみ？」

「……」



### 第30話

「誘拐とか？」

「ま、まさかあ」

なかなか歩が帰ってこないことを、三人で理由を想像し、楽しいことから、辛いことまで考え尽くしていた。

探したいのは山々なのだが、あてもないし思いつきもしない。家の周りを歩いても見たし、街中で梓という女性を見つけては、尾行したりもした。

歩の父だという男と喫茶店であつては、何かを話していたりもしたが、話している内容までは聞き取ることができなかった。そのため、特別よい情報を得ることもできず。

メールを送っても、返ってくることもない。ただ、じつと待っていることしかできないのか。

杵島の時にあつたように、誰かにさらわれたということも考え、可能性のある恭恵に勇気を出して聞いても見たが、何の話か解らない様子。真意を知る方法はないものの、日が経つにつれて心配になるばかりだ。

仲間だから余計に。

仲間だと、言っているののかも解らずに。

「変なことに巻き込まれてなければ良いけれど……」

「そうだね。でも、あの子だったら大丈夫よ」

「え？」

「色々心配はしたけど、結構自分で良いことか悪いことか判断でき

る子だもの」

「だといいけど」

麻紀の言ったことに納得がいかない。と言うわけではない。むしろ、首を縦に振れる言葉だというのに、何かが引つ掛かってならない。

何かを注意させるような、お兄さんの声。昌之の声。何かが始まっているという事は、警戒しなければならないこと。もしかしたらその警戒しなければならぬことに、引つ掛かってしまったかもしれない。

前回は助けてくれた。ならば、つぎはおれらの力で何か、役に立てればと思っている。

「そういえば、辻さん気付いてると思うけど」

「ん？」

麻紀がふと思い出したかのように口を開いた。

「歩くんの左腕動かないじゃない」

「ああ、記憶にはないな」

「動かせないって本人も言っていたけれど、力を使うときは動かしてるっと言つか、左腕が力の源でもある。その腕が日常動かないのは、罪の証だっって言っていたの。何か知らない？」

「罪の？」

「うん。で、思ったんだけど、あそこであつた、梓……でしたっけ？ あの子なら、すべてを知っている気がするの。だから、尾行じやなくて接触しようと思ってるんだけど……」

「……うん。そうだね。尾行しても特に変わりはないし、寧ろ、どうしてあの子が歩くんの父と一緒にいるのかも気になった」



次の日、学校がおわったとともに、麻紀が尾行している先、梓という女性の学校に杵島と共に向かった。

「麻紀、様子は？」

梓という女性の学校につくと、校門が見える公園に麻紀がいた。近寄って様子を聞くと、まだ出てきてはいないらしい。

一緒になって眺めていると、生徒は、バラバラに出てきては、誰も出てこないと、疎らに生徒の帰宅がみられた。

じっと校門の周りを眺めていると、予想から外れた人の姿が現れた。

「辻、あれって」

「あ、ああ。歩くんのお父さん……だな」

「援交……？」

「杵島さんって結構変なこと言う人だったんですね」

ため息混じりに言った麻紀に、ついつい俺は笑ってしまう。

「あ、出てきた」

連絡を取ったのか、タイミングよく梓という女も校門のところまで出てきて、何かを話したかと思えば、いつもの喫茶店があるほう

に足を進めていた。

見失わないように、一定の距離を保ちながらタイミングを見る。何気なく世間話をするように、笑い声がたまに聞こえてくる。人通りがなくなってきたとき、おれらは足を早め、二人の前に立ち止まる。

「ごめんなさいね？　ちょっといまいいかしら？」

「あなたたちは……」

いつも二人が行く喫茶店に俺たちも同行させてもらい、三人ずつ向かい合って六人座りの席に、梓と歩の父。俺と杵島に麻樹の五人で利用し、そこで話を聞くことにした。

「あなたたちは歩くんとはどんな……？」

「前にも言ったけれど、“仲間”よ」

「友達とは……違うんですね？」

「ええ」

梓の質問にすべて麻紀が答える。

麻紀いわく、先に質問されたほうが、あとあと聞きやすいらしい。仲間だといった言葉に、梓と歩の父は不審そうな瞳を見せる。

「どうして、歩くんを探しているのか聞いても？」

「それも、仲間だから。よ」

「じゃあ、いま歩くんには何が起きているの？」

「私たちにも解らない。歩くんの居場所が解らないかぎり」

「あなた方といるのは、歩くんは合意で？」

「ええ。巻き込んで悪かったとは思っているけれど、歩くんの意志のもとよ。そのことについてあなたは口出しできないはずだわ」

そういつてしまうと梓は黙り込み、怒られた子供のようにムツとしてしまった。

幼なじみだからこそ、自分が知らないことを他の人が知っているのが気に入らないのだろう。いわゆる、嫉妬というものだ。

「こちらから聞いても良いかしら？」

「なにかな？」

梓が口を開かないのを悟ったのか、歩の父が答えた。

「歩くんの左腕が動かない理由を教えてほしい」

質問したのは俺。

ちらりとみると、私はもうしゃべらないと言っかのように黙った麻紀がいたからだ。

梓をいじめて満足したのか、疲れたのかは解らない。前者な気もするが口にはしない。

「……それは……」

最初に答えにくいものをだしてしまったのか、歩の父は目を逸らすように首を傾げてしまった。

解らないや、知らないという様子ではない。なんだか、言いにくいという様子だった。そこで口を開いたのは、梓の方だった。

「事故よ。不可思議なね」

「不思議な？」

杵島が聞き返すと、いらつきだしている梓がうなずく。

「歩くんは双子だったのよ。すごく仲が良かった。なのに、ある日突然歩くん……片割れが姿を消した。左腕を残してね」

「……え？」

その梓の言葉に、ピタリと固まる。

「不思議でしょ？　すぐ近くには歩くんしかいなかったわ。意識を失って倒れてたわ、その残した歩くんのものだろう左腕をつかんでね。しかも、血が出ることもなく、肉が崩れることもない。歩くんから引き剥がすまでは、脈も打っていた。生きてるように……」

そこで一旦言葉を止めると、その場は静まり返ったかのように、耳に入ってくるのは喫茶店が流す、耳に良いオルゴールだけだった。梓の言葉を頭の中で繰り返す。

“ワタル”という言葉は、以前に一度聞いたことがある。あれは、歩くん初めて会い、杵島を助けに行く話し合いをしていた時、ボソリと聞こえるか聞こえないかの声でつぶやいた。

何か意味があるだろうとは思っていたが、まさかいなくなった双子のことだとは思ってもよらなかった。

「その時のこと歩くんは……？」

「……誰も聞けなかったの……。何を聞いても、口を開くこともなかった歩くんは、何を考えて何処を見ているのかもわからなかった。すべてを知るための“何か”も見当たらなかった。だから、歩くんは何も言えなかったのかも知れない」

「それが罪の証として今も気に病んでいるって事……」

「そ、それ、誰がいつてたの!? 歩くん?」

何か思い当たるのか、麻紀が考えながら言った言葉に、梓は身を乗り出すかのように、声を荒げた。  
少しの間があつて、麻紀が口を開く。

「あなたも事故の真実は知らないのよね? 何か聞いていないのかしら?」

「自分のせいだつていうようなことを……」

「でも、そのいなくなり方ってもしかして……」

「何か解るの!？」

「選んでくれなかったんだよ……シャベットが」

不意に聞こえた、聞き覚えがあり、探していた本人の声が、通路から聞こえてきては、五人とも顔を上げる。

ここに来ると思わなかった。この場所が解ると思わなかった。いつのまに來たのか。いろいろな疑問を持ちながらも一番に口を開いたのは、梓だった。

「歩……くん……!？」

「いままで、どこに……」

続いたのは麻紀だった。

俺も杵島も、言葉にならないかのように口をパクパクさせ、茫然と椅子に座っていた。

軽いため息を吐きながらも、梓側の空いている場所、歩の父の隣に腰をおろす歩。

「久しぶり……父さん」

「さ、探したんだぞ!? 何処に行っていたんだ!？」

怒鳴り付けるように、歩の右腕をつかみながら言う父。なぜだか、返事を聞いたわけでもないのに安心した。この人は、本当にお父さんなんだ。と。

嘘を吐かれていると思うていたわけではないが、歩の母があのよ  
うな態度であつたから少し心配していた。それを、ホッとした今気  
付いた。

「ちょっとね、家出を試してみたんだ。さっき帰ったら、無駄だった  
ことを知ったけど……」

なんて苦笑する歩の表情は、淋しいや悲しい。苦しいなどという  
負の表情ではなかった。どちらかといえば、すっきりしたような様  
子だった。

でもそれに気付いていない様子の父は、不安そうな表情。  
何の連絡もなく姿を消したんだ。気持ちもわからなくもない。

「無駄だったって……」

「無駄だったよ。いたっていなくなつたって、あの人には特別な問題  
もないんだ」

（いても……いなくても……）

そんなこと、親に言われたときには、自分はどうするか。考えた  
だけで不安になる。

いてほしくないのなら、いないでほしいとはっきり言ってほしい  
というのが本音。それでショックを受けないとは思えないが、あい  
まいな言い方をされるよりも全然良いような気がする。

でもなぜそんなことを、すっきりしたような表情で言っているの  
かがわからない。歩は、いないうちに何を得たというのか。

「歩、一緒に暮らそう」

もちろん父だ。前々から考えていた様子。いや、驚く様子もない梓を見るかぎり、相談をしていたのかもしれない。

「いやだというわけじゃないんだその言葉。でも今、あの人から離れたら、何だか負けた気がしてしまうんだ。だから、まだ俺はあの  
人から離れることはできない」

「歩……」

言われたことに、驚きや動揺を見せることなく、はっきりとお断わりを入れる。やはり、前までの歩とは何かが変わって見えた。

### 第31話

「何処に行っていたんだ？」

「少し遠いところに逃げたくなってね」

本当に高校生には満たない男の子なのだろうか……。

到底そうには見えなくて、自分より大人に見えてしまう。

「……ひとりで？」

麻紀が何か不満そうに聞くと、首を振って答える。

「もともと、俺が言い始めたんじゃないんだ。たまたま家出少年見つけてついていったにすぎない。逃げたくて、ついていった」

「それは最後にメールをくれたときか」

「うん」

「ずっと一緒だったの？」

「まあ、一度別れたけど……」

その後も、俺と麻紀の質問に、答えられるところまでは答えてくれた。しかし、何処に行ったのかや、一緒に行ったのは誰だったのかまでは教えてもらえなかった。

あまり歩とは話したことがないからか、杵島は傍でじつと話を聞いていた。

しばらく話していると、話は脱線し、どうでも良いような会話にまで発展し、日は暮れていった。



杵島と歩は帰る支度をする。その姿を見て、歩の父さんが言っていた事を思い出した。

「お父さんのもとじゃなくていいのか」

「……ああ。これ以上あの人から逃げても、勝てはしないんだ」

何をいまさらというかのように、驚いた顔を一瞬見せては、ほほえむ表情になり、スラツと言ってしまった。

「じゃあまたな」

杵島が戸をあけながらこちらを見て、軽く言う。

なんだか、その戸が閉まってしまつと、それですべてがおわつてしまつんじやないかという不安が起きる。

何に巻き込まれているのか。

仲間何人作れるものか。

どこまでいき、どう通常の生活に戻ればいいのか。

不安ばかりが残る中、今の現実で、歩はこれからどうするつもりなのか。

「歩くんは、何処まで一緒にいてくれるんだろっ」

「麻紀も、やつぱり気になる？」

「ええ。梓って子が、この先どう手を回してくるかが気になって」

「たぶん、歩はその子に惑わされることはないと思っけど」

「信用できるの？」

渋い顔をして疑う麻紀に、うつすらほえみ言う。

「麻紀こそ、梓が何かするかもなんて、あの子と争う意味を知りたいよ」

「だってなんか……」

「嫉妬？」

「何であの子に！？　むしろ私がされてるように感じないんですか？」

「……競う意味が分かんない……」

（女ってよく分かんない）

「君が何をしようと勝手かもしれないけどさ」

辻の家を出て、俺は杵島と家へと向かっている。

しばらく無言だったけれど、いきなり口を開くなり言ってきた。

それは、辻と接しているときよりか、すごく冷たい口調と視線を向けられる。

「あいつは何でも心配するし、なんでも信用しちゃう危なっかしい奴なんだよ」

「……みたいだな」

「あ、あのなあ！　おまえなら何を言いたいのか分かんたろう？」

「下手に近づくな？　杵島さん、あなたの気持ちはすごくわかるけど、辻さんだって子供じゃないよ。しっかりしてるし、頼りになる人さ。信用するって言ったって、ちゃんと信用できる人だって確信があるんだろっ」

「いいからおまえは近づくな」

「醜いな」

「なっ！」

この人は、性格を使い分けている。きっと、これが本性。いや、もつとひどいのかもしれないが、何かの出来事で使い分けることにしたのだろう。

辻の前では、ずっといい人ぶるだろう。気持ちはわからなくもないが、いつ本性がバレルのか。その時の辻の表情と感情がとても気になるところだ。

「醜いよ。男の嫉妬」

「勝手なことばかり言ってるじゃねえよ」

「本当のことでしょ？ わざわざ本性出してまで敵意出さなくたって、そばであなたが守り続ければ良いじゃない。違う？」

「だから俺はこうやって……！」

「本性を出してまで敵視している？」

「……！」

何も反論できなくなっただのか、ギュツと唇を結び、黙り込んでしまった。

「もうちょつと冷静に考えてくださいよ。俺は、つぶそうと思えば、いつでもあなた方を潰す力を得た。あなたたちも、俺を潰す力を持っている。わかってるのに、あなたは俺に突っ掛かってくる？」

自殺行為だよ。そんなことを言うならば、麻紀さんは？ 同じ家について、いつでも寝込みを襲うことができる。なのに、簡単に家を出るし、こうやって俺を敵視する。先に目を付けなきゃいけないのは麻紀さんの方じゃない？」

「……あの人は、辻が信頼してる」

「だから？ いつどこで裏切るかわからないのに？ そう考えたら、あなただって、裏切るかもしれない。そのために、おれらを先に排

除しようとしているかも……」

「そんなわけ……！」

「……俺を疑うのはどうでもいいけど、口に出すには早すぎだよ」

杵島が、あんなにも愛想が良さそうな雰囲気をだすのは、すこしだけ疑問を抱いてはいたが、本性があそこまでかわるとまでは思っていないかった。

だからといって何がわかるわけでもないが、どうしてあそこまで辻にこだわるのか。古い仲だとしても、ずっとあの性格で接するのも精神的にも疲れていつかボロを出してしまうんじゃないか。それを考えると、何年もいるわけではないのか。だとすれば、どうしてあそこまで守ろうとするのか。

考えれば考えるだけ、わからなくなってくる。

守りたい気持ちは分かる。

放っておけなくて、目が離せない。理由までは出てこないけれど、感覚がそういつている。そんな感じ。

「俺にとって涉みたいな感じ……なのかな……？」

渉を失って数年たった。そして今、渉がいたらどうなっていたのか。こんなことに巻き込まれやしていなかったかも知れない。

でも、シャベットがどちらかにいるかぎり、巻き込まれるけとにかりはないかもしれない。

もしかしたら、違うところに手を貸していた可能性だってある。

でも……

(そんなこと考えてても……仕方がないかもしれない)

家に着いたときに感じた素朴感。

お帰りという声も、同じ声も聞こえない。

いままで、よく自殺を考えなかったものだと、自分を誉めたくない。

部屋に入ると、隅の方に一人の影が見える。

「ただいま。出てきていいよ」

「……歩？」

ヒョコツとその影がびくついた顔をのぞかせ、俺を確認すると、安心するかのように口元がゆるみ、ホツと肩を落とす。

相当緊張していたのだろう。ヘナヘナと崩れるように床に手をつき、じつとどこか一点を見つめている。

「だから一緒にくれば良かったのに。悠樹」

「今になってはそう思うよ……」

今は悠樹がいる。

一度別れた悠樹が、ここにいる。

あの後オレらは、再会した。だからこそ、ここにいる。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2185d/>

---

熱の手

2010年10月11日01時56分発行